
永遠のフィレーナ
7
氷原からの船出
作/首藤剛志
絵/高田明美
AM
JuJu

登場人物

フィレーナ　デビス帝国に滅ぼされた国、フィロセラ王国の王女。灯台の光の方向へ旅を続ける。

リラ　フィレーナの元・妻。ネストが倒れた後、首都ボーを脱出し、フィレーナと合流。

ネスト　元・闘技作家。帝国警察に殺されたかに見えたが、密かに更正病院へ収容される。

テス　帝国人民心理更正病院勤務の新米の心理病理観察看護人。ネストの調査をする。

ラズル　帝国のエリートだったが、リラによって全てを失い、首都ボーの反乱軍に加わる。



アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 7

氷原からの船出

首藤剛志

絵/高田明美

AM JuJu

Pocket Editions of Animage
by Tokuma shoten

目次



口絵・本文中さしえ／高田明美
帝国地図／道原しょう子

プロローグ

闇(やみ)の天空……銀粉をまぶしたような星空がおぼろになっていく。
極北の氷原に朝が来た。
氷に閉じ込められた巨大な船は、眠ったままその全貌(ぜんぼう)を現した。
無造作にその姿をフィレーナとリラ、そして狼犬(ウルフドッグ)のギャッピーの前にさらけだした。
それは、フィロセラの灯台の壁画で見た帆船(はんせん)に違いなかった。
帆(ほ)こそ張っていなかったが、五本の帆柱(ほばしら)が、氷の山の五つの頂を内側から支えるようにそそり立っていた。
「この船を動かす者、それは海、大地、生きる者を生みだせし心ある者なり」
フィレーナは、灯台の壁画に書かれていた文章を思い浮かべた。
さらに、その文章はこう続いていた。
「北の海、蒼(あお)き流れの源に、海の魂(たましい)の拠(よ)り所(どころ)あり。わが光、フィレーナによりそのありかを指ししめすであろう」
フィロセラの王家の剣フィレーナが放出する青白い光は、数々の灯台の鏡玉(レンズ)を通り抜け、確

かにフィレーナをこの地に導いてきた。

そして、フィレーナの目の前に、今、船がある。

だが、何もかも凍(こお)りついた、この氷の荒れ野のどこが海だというのか？

なにが蒼き流れの源だというのか？

フィレーナという名前は海洋民族の言葉で「海の魂」という意味だ。

けれど……僕(ぼく)……フィレーナは、この氷原のどこを拠り所にすればいいというのか？

氷山に閉じ込められた帆船を見つけた胸の高なりを、氷原を吹き抜ける凍てついた風が、急速に冷やしていく。

だいいち、こんな巨大な船をどうやって動かせというのか……。

フィレーナは、肩の力が抜けていくのを感じた。

けれど、リラは目を輝かして言った。

「これよね……フィレーナが言っていた灯台の壁に書いてあったお船って……」

「ああ……たぶんね」

「壁に書いたお船が、あるとこにはあった……ふーん……なんか、お伽話(とぎばなし)みたいなお話が、ぐんぐん本当っぽくなってきたわね……」

「ああ……確かに本当っぽい……けど、今の僕たちになにができる？」

「今の私たち？」

リラは肩を竦(すく)めた。

「そりゃ、私たちだけで、えんやこらどっこいしょ……って、この船を引きずってくわけにはいかないわよね。それに、コチンコチンの氷で、中に入れそうにもないわ」
「ギャッピーの歯も、僕の剣も歯が立たない」
「今の私たちには猫に小判……豚に真珠……フィレーナにお船か……」
「冗談に笑う元気なし」
「でも、リラは笑うのです」
「そう……？」
「小判も真珠もお船も、ないよりはあったほうがいいわ。見てるだけでおいしいもん。こういうときは目で食べるの。そうすれば、食べなくても、おなかいっぱいになるわ……でしょ？」
リラはフィレーナの顔をいたずらっぽく覗き込む。
フィレーナは、こんなときのリラのしたたかさにときどき舌を巻くことがある。
どんな苦境のときも、その不安を百八十度回転させて明るく振る舞う習慣が身についている。
それが、そのまま性格になっているとしか思えない。
……目で食べるか……なるほどね……
フィレーナは曖昧に頷いて答える。
「確かにね……」
リラは、こくりと頷き返す。
「うん……とはいったものの、氷はおなかの足しになんないし……冷房が欲しい暑さじゃない

し……困ったぞ……」
自分は少しも困った様子を見せずに、リラは呟いた。
「ほんと、困ったね」
フィレーナも、さもひとごとのように肩を竦める。
だからといって、困った状況にあることには変わりがない。
こんなとき、頼りになるのは、狼犬のギャッピーしかいない。
二人は、ギャッピーを見つめる。
……頼りにされても困る……この氷原の真ん中では、人間も狼犬も、飢えて凍えている同じ動物同士であることにかわりはない……
ギャッピーは、知らんぷりをして座り込んでいる。
フィレーナは、白い溜め息をつく。
「北の果てで行き倒れか……」
「もしも倒れないで立っていられれば、女の子二人と狼犬の彫刻ができるわ。氷の彫刻……ポーズつけてみよか……」
リラは、氷原に昇る太陽を指差した。
「彫刻の題名は……乙女は太陽を目指す……なんちゃって……」
そのときだった。
首を垂れていたギャッピーが、リラの指差す太陽に向かって頭を上げた。

「あれ……？　ギャッピーもポーズ？」
しかし、ギャッピーは、何も答えず太陽の昇った方向を見つめている。
「リラ……静かに……」
フィレーナが、低い声で呟いた。
フィレーナは、知っている。
ギャッピーがこんなそぶりを見せるのは、何かの気配に気づいたからだ。
人間の五感ではとうてい感じ取れない何か……。
人並みはずれて研ぎ澄まされているはずのフィレーナの五感ですら、ギャッピーが何を感じたのかまだわからない。

……なにがあるんだ？……

フィレーナとリラは、ギャッピーを見つめた。
ギャッピーの両耳が、ぴくりと動いた。
すばやく身を起こす。
そして、リラの携帯通信電算機の入った袋を口にくわえた。
二人を見据え、警戒の唸り声を上げ、帆船を背に後ろも見ずに駆け出した。
フィレーナは、リラの手を強く握った。
「リラ……走れ……ギャッピーの後をついていくんだ」
「なにが？」

「わからない……ともかく危険だ！」

フィレーナは、リラを引きずるようにして走り出した。

ギャッピーは走り続ける。

フィレーナとリラも全力疾走だ。

「な、なんなのよう？……」

「何もしゃべるな。息切れして走れなくなる」

どれほど、走ったろう。

氷原の小高い山に駆け上がったギャッピーは、やっと、立ち止まった。

そして、今来た方角に向き直った。

二人も荒い息を吐きながら、ギャッピーの見つめる氷原を振り返った。

雲一つない蒼い空と、白色でぎらぎらと輝く太陽……。

日の光を目いっぱい反射し、眩しくてとてもまともには瞼を開けていられない氷原……。

そして、吹き抜ける風の音の他は何もない世界に思えた。

「なにがあるっていうの？」

リラが呟いた。

「静かに……」

フィレーナが、低い声で言った。

そして、氷原の果てを見つめた。

そのときフィレーナの耳は、ギャッピーと同じように異変に気づいた。
それは、氷原のかなたから広がってくるかすかなざわめきだった。
しかし、氷原の上は、太陽を照りかえす白い雪の広がりしか見えない。
「いったい、なんの音なんだ……？」
そのときだった。
いきなり、目の前が、地響きをあげて盛り上がった。
氷原の内部から、押さえつけられていたなにか巨大な力が、一気に吹き出したようだった。
と、同時に、天と地と、すべての空気をゆるがすような轟音が続いた。
目の前の氷の盛り上がりは、みるみる氷原を、まるで葉脈のように枝分かれして広がっていく。
そして、氷の膨らみは内部の力に耐えきれず、粉々にはじけ飛ぶ。
それは、氷原のいたるところが間断なく爆発しているようだった。
ズーン……ズーン……。
フィレーナもリラも震える大気のあおりを受けてなぎたおされ、小高い山の頂でうずくまるしかない。
……いったい、何が起きたんだ？……
だが、細かい氷片が吹雪のように降りかかり、目を開けていられない。
声を出すと、口の中が氷で埋めつくされそうだ。

だが、どれほど経ったろう。
フィレーナは頭上から叩きつけていた氷片の凍った痛さのなかに、わずかに優しさのようなものを感じた。
……ん……？
フィレーナは、頭を上げた。
いつのまにか氷片は、水しぶきに変わっていた。
そのしぶきには、なつかしい香りがあった。
濃厚に鼻をくすぐるその刺激を、フィレーナは忘れるはずがなかった。
潮の香り……海の息吹き……。
フィレーナは、目を開き、そして立ち竦んだ。
目の前の氷原に、まるで毛細血管のように広がる蒼い線があった。
そして、そこから、しぶきが吹き上がっていた。
蒼い毛細血管にちぎられた氷原は、盛り上がり、へこみ、互いにぶつかり合い、吠えていた。
そして、みるみる氷原は姿を変え、一時も、同じ姿でいることはなかった。
目の前のすべてが、生き物そのもののように、激しく息をしていた。
暴れていた。
それは、日の光に急激に温められた氷原の氷が、一斉に溶けて割れだし、それまで氷に押さえつけられていた激しい海流が一気に力をもりかえし、氷原をゆるがし分断し、流し去ろうと

する、珍しい自然現象だった。
春は訪れるとき、いつもやさしい表情を見せるとは限らない。
極北の、気象条件と地形の厳しいこの地では、春もまた、たけり狂って季節のおたけびを告げるのだ。
引きちぎられた氷原は、互いに身体をぶつけ合い、吠える。
冬が消えていくのを歯ぎしりし、泣きわめきながら、主役の座を、氷と雪から激しい海流に泡だつ蒼い海に取って変わられていく。
その交代が、この星の、数十万年の間、この地ではわずか数日で行われていた。
氷原を駆け回った海の血管は広がり、みるみる氷の中に水路を作っていく。
フィレーナが、この自然現象の仕組みをわかるはずがなかった。
だが、胸の中に強烈に感じた思いは、一つだった。
海は生きている。
世界は生きている。
いままでこの星に生きた何千億の人間が死に、何億種の生き物が絶滅しようと、しっかりとこの海は、この星は生きている。
そして、フィレーナも、リラも、ギャッピーも、生きている。
今は……。
この海と同じように……。

風が吹く。
海は荒れる。
だが、フィレーナの頬には笑みが浮かんでいた。

第1章

北の果て……
見込みある種は……?

デビス帝国、首都ボーの帝国中枢(ちゅうすう)総合病院……その地下二十階の会議室では、いつものように帝国機密情報兵団（通称黒い悪魔）の最上層部定例会議が開かれていた。

巨大な壁面に映し出された帝国地図は、帝国と反乱軍の勢力分布を映し出している。

「現在、帝国の半分が、さまざまな反乱軍の勢力下にあります。帝国人民(エンパイアラー)と他人種との人口比は、五分五分……首都ボーですら反乱暴徒の襲撃が相次ぎ、深夜の外出禁止地区は全都の四割を超えています。もはや、この星で帝国が帝国として君臨できるぎりぎりの限界がやってきたと思われます」

黒い悪魔の一人が、抑揚(よくよう)のない声で言った。

それは、この男の、ここ二カ月の決まり文句だった。

「一刻の時も許されぬ。ただちに帝国機密情報兵団は反乱軍の鎮圧(ちんあつ)に乗り出すべきだ……」

もう一人の黒い悪魔が、無表情な声で言う。

これもまた、ここ二カ月の決まり文句だった。

状況報告も、彼らの判断した結論も、二カ月前と変わらなかった。

帝国の指導者が帝国を存続させたいなら、答えは他に見つかるとは思えなかった。

だが、

……帝国機密情報兵団は動くな……

帝国指導者の指令は、もう一年近くも変わらない。

「この状態が続けば、超爆弾を使用せねば反乱を収拾できなくなる事態になるかもしれませんな」

それは、最上層部のだれもが予感している最悪の事態だった。

帝国が自ら禁止している超爆弾は、生命はおろか使用された土地を数百年にわたって不毛にしてしまう。

「それを、われわれの指導者が望むとは思えないのですが……」

黒い悪魔の一人が言った。

「新爆弾の完成を待っているのかもしれない」

新爆弾は、南部海岸地方の反乱を平定する目的で、帝国の禁止令に逆らい、超爆弾を使った要塞都市デビを制裁するために、実験的に使用された爆弾だ。

新爆弾は、人間の特定の種だけを狙い撃ちして消滅させる目的で開発中だった。

これが完成すれば、帝国人のある種だけを残して、他の種を、完全に抹殺することができるはずだった。

だが、新爆弾は、まだこの時点では、未完成だった。

「新爆弾が完成すれば、確かに邪魔な人種を一瞬のうちに消せますが」
「完成まで、帝国がもつかな？」
「完成が間に合ったとしても……」
　黒い悪魔の一人が呟いた。
「帝国指導者は、どの種まで残そうとするつもりですかな？　われわれ、帝国機密情報兵団の上層部は、その残される種の中に入っているのでしょうか」
「われわれは、少なくとも優秀種だ。われわれを消せば、残るはわずかな数の最優秀種しかいない。最優秀種だけで、帝国を運営できるとは思えんがね」
「われわれはたぶん生き残るだろう」
「そう思わねば、とても、われわれは帝国機密情報兵団の上層部など務めてはいられない。違うかね？」
「だが、それは、たぶんだがね……」
　黒い悪魔たちの仮面の奥から笑いが漏れた。それは、しかし、引きつった笑いだった。
　本当に彼らは生き残れるのだろうか。
　だれにもその確信はなかった。
　帝国指導者が何を考えているか計り知る力のあるものはだれもいなかった。

＊

　帝国には、どこの都市にもデビス神殿がある。

「帝国人民は神によって選ばれた人間であり、帝国は神によって定められた唯一の国家である」
古代から、どこの民族にも付帯している手前勝手な都合のいい神様が、ご多分に漏れず、帝国にもつくられていた。
だが、人類生存のために……わが身の生存のためには神も仏もない時代……人道主義や民主主義が崩壊した後に誕生したデビス帝国では、さすがに神を心底から頼みにする人間はいなかった。
帝国の神は、帝国の式祭典用に使われるための形式的道具か、ときおり女性たちの間で起こる神女団等の集団ヒステリーの象徴的な目標になるだけで、帝国の精神的な救済の場とはいえなかった。
何百年も前から、帝国人民にとって、宗教は何の救いにもならなかった。
神に祈ったところで、喉を潤す一滴の水も、飢えを癒やすひとかけらのパンも手に入りはしない。
神に祈りを捧げても、傷ついたものは治りはしないし、死にいくものが生き返りはしない。
帝国人民の心の中で、人を実利的に救う能力のない神はとっくに死んでいた。
しかし、その代わり、宗教に近いものはあった。
人間の生命を実際に救う能力があると思われる医学だ。
医学に対する信頼は、絶大なものがあった。
医学に見放されれば、それが神に見放されたことと同義であり、医学によって救われれば、

それは神に救われたことと同じだった。
帝国人民の間で医学に対する信頼は、信仰と同じだった。
病院は帝国勃興以前の教会や神殿や寺院と同じように、救済を求める人の心の拠り所となっていた。帝国では医学が宗教であり、病院が神殿だった。
だが、信頼されたのは、あくまで医学であり、心理面で病人を支える看護が無駄なものとされたのが、いかにも帝国らしかった。
医療技術が発達した今、いくら、心を込めて看病しても、助かるものは助かり死ぬものは死ぬのである。
病気を治すのは医者であり、医学であり、薬であり、医療設備なのだ。
帝国は優れた医療設備のある病院を、他民族を侵略していく過程で、いたるところに奨励してつくらせた。
それが、他民族のためでなく、戦いに傷ついた帝国人民のためにだけつくられたものだとしても、古代の宗教活動が、教祖の奇跡で難病を治し普及していくように、帝国病院への信頼は深まった。
病院はどこの町にもつくられ、帝国人民から尊崇された。
帝国人民にとって病院は、侵すべからざる聖地になった。
帝国人民は、敬虔な教徒が毎週、日曜日の朝に教会に行くように、最寄りの病院に健康診断に行くのが習慣になっていた。

反乱がいたるところで勃発する今も、聖域としての病院が被害を受けることはまずなかった。その帝国全土に広がる帝国病院の奥に、帝国機密情報兵団などの、帝国を陰で動かす中枢の情報網が密かに隠されていたのだった。

そして、帝国の中心は、いうまでもなく首都ボーの帝国病院群の中にあった。

帝国政府や軍関係者によく利用される帝国中枢総合病院には、帝国機密情報兵団の最上層部があり、ボーの中央に位置して、医療よりも医学研究の成果で知られる国立帝国病院の地下深くに、この帝国を指導する帝国上層部……最優秀種の中からさらに選別された皇帝種七人の居場所があった。

＊

国立帝国病院最下層階……大地の間と呼ばれる巨大なホールで、七人の皇帝種がいつものように話していた。

「この星の帝国人種と他人種の数が五分と五分になるまで、予定より九十一日遅れました。われわれの予想を裏切って、帝国人の犠牲が少なかったのです。原因は、最大規模の反乱組織、南部海岸地方の『狼のフィレーナ』が、他の地区の反乱組織が浮かれて暴れているというのに、全く、攻撃を仕掛けてこなかったからなのですが……」

男女両性の皇帝種が、経過報告をした。

「あのフィレーナの反乱軍ですね」

女の二が呟くと一同が一様に微笑みながら頷いた。

帝国人種に敵対するとはいえ、フィレーナは、彼らが育てつつある超皇帝種に次いで、人類を継ぐ可能性を持つ候補だった。

今、フィレーナの名前は、彼らにとって単なる敵以上に親しみを覚えるものになっていた。

そして、「狼のフィレーナ」軍が、この帝国の混乱に乗じて、他の反乱軍に付和雷同(ふわらいどう)することもなく、冷静に状況を判断して動かないことを、皇帝種の七人は好ましく思っていた。

「今、帝国軍に戦いを挑んでも、無意味な犠牲が増えるだけで、情況は変わらない……まして、下手(へた)に集結して、超爆弾を撃ち込まれたらひとたまりもないと読んだのでしょうな」

「しかし、フィレーナ自身は、単身北を目指し、南部海岸地方にいないのですよ。指導者不在で、これだけ統率のとれた行動ができるというのは、寄せ集めの反乱軍としては、評価していいでしょう」

「そうとうに、優秀な参謀(さんぼう)が留守を守っているようです」

七人の皇帝種の目の前に、三人の男の立体映像が浮かび上がった。

ひとりひとりに、集中光があてられ、解説の声が聞こえてくる。

ひとりめは、重量鎧(ヘビーアーマー)に包まれた二メートルを超す大男だ。

「この男は、『狼のフィレーナ』が南部海岸地方の反乱軍の覇者(はしゃ)になる前、最大の勢力だった『鯱(オルカ)のフィレーナ』の指導者だったオルカです。……この男は中央闘技士(メガロバトラー)として連戦連勝、闘技士としての頂点を極める直前になぜか脱走……反乱に身を投じました」

そして、不精ひげをはやし、着のみ着のままの薄汚れた中型鎧(ミドルアーマー)の男……。しかし、その目は、

獣のように精悍だ。

「この男は、戦略作戦立案に関しては天才的才能があると噂されながら、どこにもとどまらず、各地の反乱軍を転々としていたはぐれ蜘蛛のバンニルと呼ばれる流策士です。しかし、どうやら、しばらくは『狼のフィレーナ』に定住の地を見つけたようではあります」

　さらに、反乱軍の参謀と呼ぶには不似合いな華奢な体格で端整な顔立ちの男に、集中光があたる。この男は鎧すらつけていず、着流しの軽装だった。

「南部海岸地方出身でありながら、権威ある中央の闘技評論家として、次代を担うかもしれぬと、評論界の一部で注目されていたナスカ。……現在、狼のフィレーナ軍を直接指導しているのはこの三人です」

　帝国上層部はフィレーナの素性はおろか、「狼のフィレーナ」軍の詳細な実態すら掴んでいたのだ。

　皇帝種の男の一が言った。

「どの男も、その道の頂点に立つ可能性がありながら、なぜか、自らそれを放棄して帝国に反乱する側に立っている。こういう個性は、帝国はおろか他民族にも珍しい人間ですな」

　女の二が頷いた。

「こんな個性が、たとえ反乱軍という寄せ集めの集団であれ、一つの組織の中で仲良く共存できるのでしょうか」

　男の三が答えた。

「不可能でしょうな。とうの昔に仲間割れしていていいはずだ」
女の六が呟いた。
「それがなぜ、こうまで統率がとれているのです？」
女の二が微笑して言った。
「フィレーナがいたからでしょう。あの娘がね……」
男の七が、女の二の肢体をちらりと見て言った。
「雌としての魅力ですか？」
「違います」
両性の皇帝種の五が、きっぱりと言った。
「雌の魅力があれば、複数の雄はそれを取り合って互いに戦うだけです。まして三匹の雄なら
とうの昔に、傷つけあうか袂をわかっているでしょう。たぶんフィレーナには、雌雄とは別の
指導者としての力があるのでしょう」
男の七がしげしげと両性を見て言った。
「なるほど……男でも女でもないあなたとしては、指導者の資格に、雌雄それぞれの性的魅力
は関係ないと言いたいわけだ」
「両性の性的魅力なら可能とでも言いたいのですか？」
女の六が、からかうように両性に言った。
両性は、憮然として言い返した。

「雌雄両性……この際、性別などどうでもいい」
女の二が、とりなすように言った。
「性的魅力があろうとなかろうと、あのフィレーナが率いる軍が、われわれの予想を狂わせたことは確かです」
男の一が頷いた。
「そのとおりです。もっとも南部海岸地方の例外をのぞけば、この混乱のわずか二百日で、帝国人種と他民族の数を合わせるとほぼ五億人の人間がこの星から消えたのですから、帝国史最大の殺戮が今、現在、行われているといってよいでしょう」
「殺戮というのは、ひどい言い方ですわ。少なくとも、帝国人民と他民族の両方から犠牲が出ているのです。帝国が他民族を征服した当時の、一方的な殺戮とは違います」
女の二が言った。
「しかし、仕組んだのはわれわれだ」
男の一が肩を竦めた。
女の四が溜め息をついた。
「仕方ないのです。この星にはもはや二千万以上の人間は生存できないのですからね」
女の二が首を振った。
「いいえ。今や二千万人ですら、この星に生存できるかどうかも怪しいものですわ。五億人程度の間引きをしていても、この星の人類の滅亡には焼け石に水です。一日も早く、今の人類を

継ぐ種を見つけ出し、他の人種は駆逐しなければなりません」
「超皇帝種に見込みは……」
超皇帝種は、皇帝種の中から生まれた、より進化させた帝国種、彼らにとって、今、考えられる究極の種のことだった。
「見込みはあると信じたい……でも、その見込みはフィレーナたちにも残されています。そして、その他にも見込みがないとはいいきれません」
「そして、そのだれも見込みがあるとはいいきれない」
両性は、溜め息をついた。その溜め息は、両性、雌雄の別なく皇帝種の間に伝染した。
今の人類を継ぐものが現れなければ、早晩、帝国人はおろかこの星の人類という生物が滅亡する見込みだけは確かだった。

*

「ろくでもない……」
帝国人民心理更正病院の資料庫で、与えられた最後の資料に目を通したネストは、ここ半年間、口癖になった台詞を呟くしかなかった。
資料庫に集められたこの星の人類の軌跡は、単純にいえば、この星に知的生物として発生したときから、絶滅に向けて走り続けているとしか思えなかった。
もちろん生物はいつかは絶滅するものかもしれない。
だが、どんな生物も自分自身の種を生存させようという本能をもっている。

しかしそれは、同一種の中で、それぞれの個体が、自分自身の個の遺伝子だけを繁殖させたいと思っている結果だ。

そこに種族繁栄などという指向性はない。

種の生存のために、自分が犠牲になって死のうなどという献身は、生物の遺伝子の本能にはない。親が子を守り育てるのは、自分自身の遺伝子を子孫に残したいためだ。

動物の中に群れをつくるものがいるのは、種族を守りたいからではなく、自分の遺伝子を生み、守り、繁殖させるのに都合がいいからにすぎない。

この星の生物の個々の持つ遺伝子の繁殖への本能は、きわめて利己的なものだ。

そして、それぞれの個体の中で強いものが自然に生き残り、結び合い、それが種の進化をゆるやかに促進させていく。

もしも、ある種の生物の数がこの星で生存できる数の限界を超せば、生態系の枠が、過不足ない数に調整してくれていた。

そしてこの星に発生した生物たちは、この星の寿命がなくなる日まで、緩慢な進化を続け、生き続けていくはずだった。

生物が個々に持つ、遺伝子を繁殖させようという本能……それだけで生きていれば、この星の生物に何の問題も起こらなかったかもしれない。

だが、本来の生物から見れば奇形ともいえる動物が生まれてしまった。

それが人間だった。

人間は、そんな自分の遺伝子を残そうという本能に加えて、自分自身も楽に生き続けようという欲望をもった。

人間は個々の生物本能だけでなく、楽に生存をしたいという欲望を満足させながら生き続けようとした。

そしてその欲望への執着は、この星の生物の枠を超えていた。

生存を安定させる道具の使用も、技術も、農耕も、蓄積も、集団も、国も、法律も、宗教も、哲学も、繁殖すら、人間の考えだしたものすべてが、実は、遺伝子を繁殖させようという生物の本能以上に、人間個々の欲望を満たそうとした手段にすぎない。

人間の集団は、個々の遺伝子を繁殖させるための群れではなく、個々が楽に生存したいための群れでもあった。

その集団の中で謳われる他者への愛も、人道主義も、道徳も、実はより楽に生きたいという功利と自己保身の裏返しの思い込みにすぎない。

人間の知性というものが生み出したすべてが、自分の遺伝子を繁殖させたいという本来の生物の本能を逸脱していた。

そして、生物を逸脱した人間の過剰な繁殖は、人類滅亡の時期を早めるばかりか、他の生物まで片っ端から滅ぼしていった。

……おいおい、そんな理屈は数千年前の古代から、気のきいた子どもでも理解できる通説だ。

それをこのおれに聞かせてどうしろというのだ……。

ネストは、そう遠くない時期に来る人類の滅亡を予測した資料の山にうんざりしていた。
だが、それも今日でおわった。
テスは、資料庫の資料映像投影機の操作スイッチを切り、溜め息をついた。
「ろくでもない……ですよね」
そして、ネストのほうに向き直って頷いた。
「……ええ……人間はこの星の生物の中でもっともろくでもない生きものですよね。そのろくでもない生きものが、滅亡せずに生き残れるかどうか。ネストさんの意見を聞きたい。それが、あなたをこの病院に閉じこめた上層部……帝国皇帝種の考えです」
「最優秀種のさらに上に位置する皇帝種が、特殊変形優秀種などの意見を本気で拝聴する気持ちなのかね」
「皇帝種は、遊びで半年以上も帝国機密の資料をネストさんに見せるような趣味人ではないと思います」
「人類は滅亡すると私が言ったところで、帝国が生き残りをあきらめるはずがなかろう」
「ええ、あきらめはしませんわ。でも、だれかにあきらめるなと言ってほしいのかもしれません」
「あきらめるなと言ってほしい?」
テスは頷いた。
「ええ……もともと帝国は自然環境も社会環境も疲弊しつくしたこの世界で、人類という生物

がなんとか生き残りたいからつくられた国です。この星で駄目なら、宇宙のどこかに進出してでも、生き延びて種族を残したい。でも、最初にもくろんだ種の進化による生存が、本当に人類を生き延びさせていることになるのか……人為的に進化させている帝国種という生物が、本当に、人間と呼べる生き物なのか……。今の段階で皇帝種は帝国種の中でもっとも進化した人類です。と同時に、生物である以上、彼らの遺伝子は繁殖を望む。皇帝種の中から、人類の後継者を望むのは当然です。でも、その気持ち自体がもう人間と呼べない生き物である皇帝種の願いだとしたら、この生き残り計画は人間という生物の生存計画ではなくなります」
「人間の作り出した疑似人間が生き残りたがっているだけで、人間という生物が残ることにはならない」
「ええ……彼らはあくまで人間という生物として生き残りたいのです。どんなに進化しようと、人間という生物でいたい。疑似人間で生き延びてもしょうがない」
「生き延びたくないとは思わないだろう。生物なら生存したい。繁殖したいと思うのが本能だろう？」
「確かに生物なら、当然生存したいし繁殖したい。帝国とこの人類生存計画ができたときにはみんなそう思っていたのでしょう。そういう意味では、帝国の創始者たちの生物的本能はしっかり生物らしかったといえるかもしれません。でも、その結果現れた皇帝種が、疑似人間としての生存では意味がないと思いだしていたとしたら……」
「自分たちの生存に意味がないと思っているとしたら……それはあまりに観念的すぎる……生

物が本来持つ本能とは違うと言いたいのかね」
「それに気がついたのは、皇帝種自身だと思うのです。自分たちは観念的すぎる。人類滅亡の時期に、生き延びることを考えなければならないときに、自分たちがそもそも人間であるかどうかなんて……そんなことを考えること自体、生物としての人間らしくない。
皇帝種は自分自身の生物としての存在にすら疑問を抱いているんではないでしょうか？　帝国種の進化は人間の進化どころか生物の進化ともいえないかもしれない」
そして……テスはぽつりと言った。
「……皇帝種は迷いだしたのです」
ネストは呟いた。
「……迷うか……その迷うこと自体も、生物らしいとはいえない……」
テスは、軽く肩を竦めてから頷いた。
「ええ……人間であろうとなかろうと、本来、生物は自分の存在と生存に迷いをもったりしませんわ……皇帝種はそれがこの星の生物らしさだと思っています。けれど、ご本人の皇帝種たちは……現実には迷っている」
「皇帝種の迷いは生物の本質からではなく観念から生まれたものってわけか」
ネストは苦笑した。
「生物、生存、存在……か、よく整理して言わないと舌を咬みそうになる」
テスは微笑み返した。

「人がおしゃべりするときに、自分の台詞に舌を咬みそうになったら、それはたぶんおしゃべりの内容が自然にすらすら話せない証拠ですわ。きっと話が理屈っぽくて観念的になっているんです。人間って考え過ぎたとき……身も心も……そして言葉も迷い出すっていいますもの。皇帝種は、自分たちを、生物としての人間ではなく、観念としての人間が優先した存在かもしれないと疑いだしたんだと思います」

「なるほどね……」

ネストは軽く溜め息をついてからテスを見つめた。

「テス……あんたはそうやって私だけでなく、皇帝種の心理分析までしていたわけか」

「いけませんか？　皇帝種だって、古代の伝説にある神が人間を見るような視線で私たちを分析しています。人間が神を人間なりに分析して悪いとは思いません。ですよね？」

テスはときおり見せる、すがるような表情でネストを見返した。

それは、道に迷った子どもが、今にも泣きだしそうになって親の顔を求めているような表情だった。

そのひたむきな瞳は、ネストの皮肉っぽい口調をいつも黙らせた。

「先を続けて……」

ネストはテスに優しく言った。

テスはこくりと頷いて……気を取り直して、話し続けた。

「皇帝種は、自分たちを観念先行の疑似人間かもしれないと考え始めています。自分たちが生



帝国資料を見終えたネストの結論をテスは待っていた。人類に未来はあるのか？

物もどきの疑似人間なら生きのびても仕方がないと、観念的に思っているふしもあります」
「皇帝種がこの先、どう進化してもしょせん、疑似人間にすぎないなら、帝国人種は滅びてもいい……彼らはそう考えているというんだね」
「間違っていることはすぐやめるべきだ、そう考えるのが観念的には普通です。そして、彼らの観念としては、疑似人間よりは生物としての人間を滅亡から救いたいと考えています。けれど、反面、……仮に自分たちが疑似人間だとしても、自分たち帝国種の進化形も滅ぼしたくないという矛盾(むじゅん)した思いもあるんだと思うんです。
皇帝種にも生物遺伝子があります。帝国人種という名の生物としての生存指向(ベクトル)と、繁殖指向(ベクトル)が残っているのです……。
人類の滅亡を前にして、彼らの内部には帝国種としての生物的な生存指向(ベクトル)と、この星で生物としてまともな人間を生存させたいという観念が分裂(ぶんれつ)気味になって、共存しているんだと思います。だから、自分たちの進化形を育てようとしながらも、生物としての人間本来の後継者も探そうとしている。
無理やり進化させた帝国人種でない……自然な形を残している異人種の中に……」
「たとえばフィレーナのような……」
ネストが呟いた。
「ええ……そして、人類滅亡のぎりぎりの時期が近づいて、皇帝種は迷っています。人類を継ぐべきは帝国の進化形か、フィレーナのような自然形か……どちらもまだ、決め手がないので

す。かといって両方を残しておける時間もそう残っていない。……だから、聞きたいのです。……進化した帝国優秀種の中で、ぎりぎり元の人間らしい要素をもっていて、しかも、心理障害がなく、判断力があると見られる特殊変形優秀種に……」

「それが、私か……」

「ええ……そしてもしかしたら、普通の優秀種とは少し違う性格の私……私も彼らから特殊変形優秀種の一種と見なされているのです」

テスは、軽く肩を竦めた。

「皇帝種は私たちに聞きたがっているのです。今の人類をどう思うか……帝国種という存在をどう考えるか。帝国人種は滅亡するか……すべきか……帝国人種は生存にかけるか……それとも、別の異人種に道をあけるか……」

ネストは苦笑するしかなかった。

「たった二人の特殊変形優秀種に、それを聞いたからといって、帝国と人類とこの星がどうなるものでもあるまい……それに、帝国種の未来は明るいと私たちに言ってほしいのかな？……皇帝種から見れば劣等にすぎない私たちからそんな追従を聞いて喜ぶほど皇帝種はおめでたくもあるまい？」

「おめでたくもないし、喜びもしません。でも、その答えによってはわずかな期待をかけているのかもしれません」

テスは、いったん口をつぐんでから、ネストを見つめて言った。

「私たちに……期待を……」
「皇帝種が私たちに？」
ネストはテスを見つめた。テスは、ネストの顔を見ずにうつむいて言った。
「帝国人種の進化が行き過ぎだったとしたら、戻れるぎりぎりはどこか……帝国人種と自然型人種のすれすれの分かれ目はどこか……もしかしたら、その分かれ目が、帝国人種の進化の形の行き止まり、最頂点かもしれない。その最頂点の種には、もはや皇帝種や最優秀種の失った人類としての資格と知恵が残っているかもしれない」
ネストはテスの言おうとしていることがわかった。
「それが優秀種の中で先祖返りを起こした特殊変形優秀種……つまり、おれたち……」
そこまで言ってネストは思わず首を振った。
「ばか言ってんじゃないよ」
テスはうつむいたまま微笑した。
「ほんと、ばか言ってますよね……いまさら特殊変形優秀種に人類の後継者としての期待をかけられたって困ってしまいますよね」
「この世界に、まともな特殊変形優秀種が何人いるというんだ？」
ネストは吐き捨てるように言った。
「まともなら特殊変形とは呼びません。帝国全土の心理更正病院に収容されている特殊変形優秀種は十万足らず……そのほとんどが重症の心理異常を起こしています。

仮に心理更正病院に収容されていない正常な特殊変形優秀種がいたとしても、自分の性格の中にある特殊性に気がつかないはずがない。その特殊性を他から見つからないように包み隠そうとします。

その気持ちが幼児期から続けば、精神に影響を与えないわけがないのです。自閉症に陥るか……心身症、過食症、拒食症、その他のノイローゼ障害の児童が、一時期、優秀種に激増しました。さらに、その時期、児童の原因不明の自殺が優秀種の間で多発しました」

「私が子どもだったころだね」

「ええ……ネストさんの世代の優秀種の児童には、他の世代の優秀種にあまり見られない特色があります。後で考えれば、それが特殊変形優秀種が急激に発生した時期だったのです。

この世代はネストさんのように無事に青年期を迎えた優秀種も、周囲の帝国社会体制に反発し、やがては反社会的活動を指向した者が多い」

ネストは苦い笑みを漏らした。

「いわゆる、優秀種、反逆の世代か……あれは、私たちの世代の一種の熱病のようなものだ」

「熱病ではなく特殊変形優秀種ならではの性質だったのです。そして反逆の世代は、帝国体制の社会で、トラブルを起こし抹殺されるか、落ちこぼれた。それが、精神に異常のない特殊変形優秀種の典型的なパターンでした……もし、正常な神経の特殊変形優秀種の性格が帝国の社会に適応できるとしたら、ネストさんのような芸術関係か、私のような心理病理観察看護のような仕事しかないでしょう」

「後の特殊変形優秀種は、酒中毒者か薬中毒になって都市の浮き草地区に流れ込んで野たれ死にを待つばかりか」

「飲みたくなったよ。何カ月ぶりかにね」

ネストは喉の渇きを感じた。

ネストはテーブルの上の自然水の入ったグラスを握った。

そして、ブランデーを飲むように、グラスの水をころがすそぶりをした。

テスは素早く、グラスの上に手をやった。そして、いつになくきつい口調でいった。

「やめてください。そんな飲み方は……これはお酒じゃない、水です。ネストさんのアルコールに対する身体の中毒性はなくなっています。飲みたくてもそれは心理的なものです。でも、その心理は一生直りません。たとえ、水を飲むときもお酒を飲むような気分で飲めば、いつか水が酒に代わるときがきます。そして、今度アルコールのダメージを受けたら、身体が持たないかもしれない……」

ネストはふっと笑って言った。

「今は貴重な特殊変形優秀種が、また一人消えるか……」

「そんなつもりで言ったんじゃないわ！」

その語気に驚いたネストは、テスを見返した。

「ん……？」

テスも自分の強い言葉に戸惑ったような表情でネストを見た。

「喉が渇きました」
テスはネストのグラスをひったくるようにして呷り飲んだ。そして、むせた。
「大丈夫か」
テスの肩が、震えた。そして、ネストの手から身を離した。
ネストはテスの背を擦った。
「なんともありません……」
テスは首を振ってから、気を取り直したようにネストに向き直った。
「だから……」
「だから?」
「浮き草地区の特殊変形優秀種のお話です」
ネストは苦笑した。
「そうだったな」
「そうです」
テスは、自分に言い聞かすように頷いた。
「相次ぐ反乱で、浮き草地区は反乱組織の巣窟になり、帝国軍の掃討の的になりました。巻き添えを食って真っ先に抹殺された浮き草地区の人たちの中には、かなりの特殊変形優秀種がいたはずです」
「だろうな」

ネストは帝国社会の暮らしに耐(た)えられず、浮き草地区(デラシーナ)に逃げ、そこで朽(く)ちていった数々の友人を思い浮かべた。

そして、ネストが過去に唯一愛(あい)したと言い切れるあの女性(ひと)のこと……闘技演出家バラバの妹……彼女は兄のバラバ以上に、芸術創作を指向して、あげくの果てに、浮き草地区(デラシーナ)で、精神も身体もぼろぼろになって消えていった。

あの女性(ひと)も、もしかしたら特殊変形優秀種の一人だったかもしれない。

ネストはテスを見つめた。

ふと、そのとき、ネストはテスの中に、あの女性(ひと)の面影を探している自分に気がついた。

ネストはそんな自分にいささかあわてた。

テスはネストから見れば、リラやフィレーナとそう歳(とし)は違わない娘のはずだ。

リラやフィレーナをネストは、女性の対象として見たことがあったろうか。

だが、テスに対するおれは……。

よせよ、おじさん……おまえは恋愛(れんあい)感情など酒に溶かして、とっくの昔に吐き捨てたはずじゃないか……今のおまえは、テスを見て過去の感傷に浸(ひた)っているだけだ。

ネストは今の自分をそう思うことにした。

しかし、テスに対する気持ちを、昔の恋人(こいびと)にこじつけて説明し納得しようとしている自分が、いささか情けなくもあった。

テスは、ネストのそんな思いを知ってか知らずか、話し続けている。

「帝国の上層部が、特殊変形優秀種の持つ先祖返りの貴重さに注目したのは、ほんの十数年前からです。それまでは、無視し抹殺されるべき存在でした。いまさら保護しても遅い……まるで、発見されたときには、数頭しかいなかった絶滅指定生物のようなものですわ」

「帝国が正確に掴んでいる特殊変形優秀種は何人なんだ？　心理的精神的に異常のない特殊変形優秀種の数はいくつだ？」

「ネストさんの世代のころは、正常な精神状態を維持している特殊変形優秀種も多くいたでしょう。でも、それからさらに日々急速に進化した優秀種からは、正常な神経の特殊変形優秀種は、ほとんど生まれてきません。それに特殊変形優秀種のどこまで、特殊変形の基準にするかで意見も分かれます。現在、生存しているネストさん級の特殊変形優秀種は、ネストさんの他は確認されていません」

「他は絶滅ってわけか……」

「いいえ……そうともいいきれません。特殊変形優秀種の特徴は、心理と精神面に多く現れます。それを調査するのは、きわめて難しいのです。心理や精神は、本人の理性や忍耐で隠しおすことも可能ですし……その種が、帝国内で上位の優秀種だけに、人権上、理由のない心理精神調査は難しい。……たとえば、本人が心理病になるか刑事事件でも起こして、心理更正病院で心理精神分析しないかぎり判別しにくいのです。なにしろ、今でも帝国内で、特殊変形優秀種の存在は帝国機密ですから……」

「期待はかけられんな」

　ネストは溜め息をつく気もしなかった。
「じゃあ、……私はともかく、テス……あんたが特殊変形優秀種の標準だとしたら、何人ぐらい帝国内で確認されているのかな？」
　今度はテスが、溜め息もつけず答えた。
「せめて乗り合い自動車を満席にするぐらいの数がいれば、休暇に団体旅行ができて楽しいんですけれど……」
「そんなもんか……」
「そんなもんです」
「この星の人類は、乗り合い自動車じゃない。団体旅行もできない数でどう乗り回す？」
　テスは頷いた。
「ええ……たとえ特殊変形優秀種に乗り合い自動車のお客になる資格があったにしても、もう遅すぎる……わたしもそう思います。もちろん皇帝種もそれはわかっているはずです。それでも、彼らは特殊変形優秀種に期待したいのでしょう」
「本気か？……皇帝種は」
「本気で期待しているとしたら、彼らは人類とこの星の未来に対して、藁にも縋る気持ちにまで追いつめられているということでしょう」
「私たちは藁にもなれない……かなわぬ願いをかける藁人形にはなれるかもしれないがね」
　テスは頷いた。

「ええ……わたしもとっくにそう思っています」
ネストは、テスに頷き返し、やさしく微笑した。
「テス……長い間、ありがとう」
「え……？」
「帝国の上層部に報告してくれ。帝国は特殊変形優秀種になんの期待もしないほうがいい。……人類がどうなろうと、私の知ったことじゃない。誰が人類を継ごうと私はかまわない。それが私の答えだ。……そして、その答えがでた以上、私はもう不用のはずだ」
「不用じゃありません」
テスが言った。
テスはまっすぐネストを見つめていた。
「あきらめません。私は人間を……そりゃ……私自身は人類を継ぐ人間にはなれない。でも、だれが継ごうといいんです。私は傷ついた人間をあきらめたくない。死にかかっている人間をあきらめたくない。たとえ人類が滅びることが約束されていたって、見守って何かをしてあげたい。最後の最後まで、付き添っていたい」
そして、その目には涙が潤んでいた。
「私はあきらめません。ネストさんはあきらめてしまうんですか？」
二人は、黙って、ほんの一瞬、見つめ合った。
一瞬だが、それが、どれほどの時間だか、二人にはわからなかった。

ネストは頷いて言った。
「最後まで付き添うか……われわれは確かにそんな役どころなのかもしれない」
「あきらめませんよね」
テスの顔に微笑みが戻った。
ネストは肩を竦める。
「あきらめませんよね」
テスがもう一度言った。
ネストは頷いた。
「付き添いはあきらめない。たとえ患者が動けなくなり、意識がなくなり、脳死しても……患者の生命維持装置を他のだれかの手で外されるまでは……」
テスは頷いた。
「でも、付き添いって淋しいんです。患者自身でもなく、医者でもなく、家族でもない。付き添いって一人でいると、とっても淋しいんです」
ネストは、テスに言った。
「帝国上層部に報告するといい。付き添いが二人に増えたと……」

*

その男は、特殊変形優秀種という名称など知るはずもなかった。
だが、その男も今は、優秀種からはみ出したという意味では特殊変形優秀種に、似ていない

ことなかった。

帝国の優秀種にして反乱軍の指導者……ラズル。

首都、ボーの外壁を遠くに望む丘の上で、首都反乱軍の指導者「ボーのフィレーナ」ことラズルは、ある決断に迫られていた。

首都の戦いは一進一退……敵も味方も犠牲者ばかりが増え、何の進展もなかった。

反乱勃発当時、全国に無数に生まれた反乱組織も、しだいに統合され、それぞれの各地を代表する反乱組織が生まれていた。

やがて、それらも統合され、帝国と対峙する一大勢力になるのは目に見えていた。

その組織の指導者の位置を狙うならば、首都圏を制する反乱軍の長であることが、一番の早道に思えた。

ラズルは焦っていた。

そして、ラズルは、反乱軍にとっても帝国軍にとっても暗黙のうちに守られていた禁じ手を使う誘惑にかられていた。

それは、帝国病院の攻撃……。

首都の帝国病院が帝国の上層部にとっていかに大切な場所であるか、優秀種の官吏だったラズルには、気がついていた。

だが、病院は帝国にとって聖域だ。

いや、帝国人民以外の他民族にとっても、医療施設は救世の場だった。

侵すべからざる場所を攻撃したとき、その反動がどういう形で現れるか見当もつかなかった。

だが、ラズルは、決意しかかっていた。

一度、帝国内で優秀種としての生きがいを失い、まして、子孫を残す能力すら壊されたラズルに、今以外の未来はどうでもよく思えていた。

＊

フィレーナとリラが立っている小高い丘は、極北の海に先端を突き出した岬の先だった。

さながら白い砂漠のように広がっていた氷の原は、そのほとんどが凍った海だったのだ。

そして、けたたましい寝覚めのときがきた。

氷原はひっくり返したジグソーパズルのようにひび割れ、身をすり、咬み合い、砕けながら、逆まく波の上を、思い思いの方向へ動き始める。

「あれを見て！」

リラが、今来た方角を、指差した。

帆船を飲み込んだ氷の塊が、ぐらりとゆれ、氷原から離れた。

そして、帆のある頂のほうから逆さまに、海の中に突っ込んだ。

あたりの氷塊をはじき跳ばし、水煙を噴き上げて、氷の中の帆船は荒海の中に姿を消した。

「しずんじゃった……」

リラが肩を落とした。

「ああ……見つけたばかりだっていうのに……」

フィレーナは、がっくりと膝をついた。

だが、ギャッピーは、氷の沈んでいった海から目を離さず、すぐにぴくりと耳を動かした。

氷の塊の沈んでいった渦の中から、波を引き裂く轟音を響かせて、氷の山が浮上してきた。

そこにはもう帆船の姿はなかった。それは、帆船を覆っていた氷の塊の底の部分だった。

氷の塊は比重の関係で四分の三は水の中にある。

おそらく、氷の塊は海の中で一回転して上下が逆になり、帆船は逆さまにひっくりかえった形で海底に帆柱を向けているに違いなかった。

「もうあの船は海の底だ。僕たちにはどうしようもない」

フィレーナは、溜め息をつきながら、けれどどこかでほっとしてもいた。

……もともとあの帆船は、僕たちには大きすぎる。荷が重すぎる……

最初からなかったと思えばもともとだ。

もしも、あの帆船を動かさねばならないということにでもなったら、持てあますどころか重荷になって仕方がない。

ここは北の果て……先は海……それも氷塊が軋み砕ける流氷の海だ。

もう、前進は無理だろう。

……ここで、僕の旅も行きどまりか……

「やれやれ、ごくろうさん」

フィレーナはそう呟き、後ろを振り向いた。

……灯台の光が導くままここまできたのはよかったが、これから先はどこへ行く？

帝国軍と、反乱軍が互いに殺戮を繰り返している内陸へ戻るしかないのか……。

そのとき、リラが、フィレーナの袖をひっぱった。

「まだ、後ろを向くのは早そう……」

「え……？」

「氷の山が動いてる」

フィレーナは、帆船を飲み込んでいる氷塊に目をやった。

荒れた海の激しい波におされるように、氷塊がゆっくりと動いている。

行く手を阻む流氷を押し潰し砕きながら、おそらく海流が導くどこかに向かって、まるで意思あるもののように進み始めた。

「どうするの？　行っちゃうよ」

リラがフィレーナに聞いた。

「追いかけるさ」

フィレーナは何も考えずに即座に答えた。

逃げれば追いかける。

他にやることもないし……。

フィレーナの中で、さっきまで帆船のことは荷が重すぎると思っていた気持ちが、遠ざかっていく氷塊を見ていると、きれいさっぱりと消えていた。

それは、投げられたボールを無心に追いかける小犬の本能に似ていたかもしれない。
「追いかけるったって、どうやって」
「見えている限り、陸沿いに……」
フィレーナは、リラの持っていた携帯通信電算機の袋を、肩に掛けるとさっさと歩き始めた。
リラは肩を竦めた。
「私たち、お腹減ってるはずなんだけれどなあ……ま、しばらくは、アイスフロートを目で食べるっきゃないか」
そんな、リラの袖を、ギャッピーが軽く噛んだ。
……もう少し、がんばりなさい……
そう言いたいかのようにうわ目づかいにリラを見て、袖を引いて、歩くのを促した。
氷塊は、陸地からつかず離れずのところを、太陽の動きを追うように動いていった。
おそらく、このあたりの海流は、海岸線ぎりぎりを削るように流れているらしい。
それが、さほど風もないのに波を荒だて、海岸に、巨大な波浪の絶えることはなかった。
極北の氷は、消えることはない。
しかし、海の波の強さは、海岸線の氷を溶かすというより、抉り取り、ぼろぼろの地膚をむきだしにした岸壁がどこまでも続いていた。
フィレーナとリラは歩き続けた。
食物？……。

それが、不思議だった。
ときおり、二人の前から姿を消したギャッピーが、気がつくと、兎か鼠の類の小動物をくわえ、戻っていたのだ。
わずかな獲物だが、フィレーナとリラが歩き続ける体力を確保できるだけはあった。
凍てついた陸地のどこに、そんな動物が住んでいるのか、フィレーナは知りたかった。
ギャッピーと一緒に狩りをすれば、もっとたくさんの食物が手に入るはずだ。
が、海流に乗って、まるで目指す港があるかのように、進む氷塊の速度は、一度見失えば二度と出会えそうにないほど速かった。
それに、夜のない白夜の太陽に照らし続けられる氷塊は、徐々に溶け、刻々と形を変えている。
海流に漂う氷塊は無数にある。
目を離せば、どれがどれだか見分けがつかなくなってしまうだろう。
氷塊を追った旅が、四日続いた。
正直な話、フィレーナには、それが何日間なのか、はっきりと言い切る自信はなかった。
なにしろ、極北のこの地で、夏は一日中太陽が沈むことがないのだ。
一日という単位が、つかみにくい。
まして、海流や氷河にぎざぎざに削り取られた海岸線の険しい崖を上り下りしていると、方向感覚までおかしくなりそうで、太陽の位置で方向や時刻を知るのもおぼつかなかった。
頼りになるのは、リラの携帯通信電算機だが、緯度の低い帝国内ではどの通信でも傍受でき

たはずの高感度も、極北のこの地では雑音が多く、聞き取れないことが多かった。

「たぶん、電波障害を起こす何かがあるか……でなきゃ、ここが帝国系の電波が届かないほど、遠いとこってことなのかな……ま、時計まで狂うわけじゃないし、帝国から遠いってことは悪いことじゃないと思うけれど……私たちが、あの氷の塊と追いかけっこを始めてから、たっぷり百時間は経っているわ」

「あの氷いったい、どこまで流れていく気かな……」

フィレーナは、氷塊をまるで意思のある生き物のような言い方をした。

それが、フィレーナの氷塊に対する実感でもあった。

「どこに行ったっていいけど……さんざん引きずり回されたあげくが、溶けて流れて水の泡ってのだけは勘弁してほしいな……」

リラの心配は、まんざら嘘でもなかった。

氷塊の大きさは、最初のころから比べてかなり小さくなっていた。

「いくら、お日様ぎんぎんでも、ここ、北の果てでしょう？　ちょっとあの氷さん、ダイエットが激しすぎない？」

確かにリラの言うとおりだった。

フィレーナたちの行く陸地は、凍てついていて、積もった雪の溶ける気配はない。

大気も冷たく、氷が溶けるような暑さなど微塵もない。

だが、海の上を漂う氷塊は、急速に溶けているのが明らかだ。

無数にあった流氷も確かに少なくなっている。
荒れた海の上に見える白いものといったら、昨日までは確かに氷のほうが多かった。しかし、今は、逆巻き、吠(ほ)える波浪の白さが圧倒的だ。
「海のほうが温かいのかなあ……」
リラが言った。
「だろうね。水は氷よりは温かいもの」
フィレーナは、しごく当たり前の答えしか言えない。
「けど、私たちは北に向かってる。それなのに、なぜ、水だけ温かくなるの」
「さあね。行き着くまで行くしかない。そうすればその謎(なぞ)が解けるかもしれない」
そして、氷塊の流れていく方向を見つめて肩を竦めた。
「解ける前に、霧の中……わけがわからなくなるかも」
「え……?」
リラはフィレーナの見つめている先に目をやった。
抜けるような蒼空(あおぞら)の見えるはずのそこには、巨大な壁のように霧がたちこめていた。
乳白色のベールで空の蒼と海の青をしっかりと分けた霧の壁は、真夏の入道雲のように空の高みまでわきあがっていた。
氷塊は、海上の霧の中にみるみる姿を隠していく。
「鬼ごっこの次はかくれんぼ?」

リラが、溜め息混じりで言った。

今日まで、海と空の青さがあればこそ、白い氷塊は見分けられた。

夜の暗やみのなかですら、晴れてさえいれば、星の光を浴びて青白く浮かび上がる氷塊は確認できた。

だが、光を遮る霧の壁の乳白色の世界の中で、しだいに小さくなっていく氷塊を見つけるのは、とうてい、不可能に思えた。

「だけれど」

フィレーナが呟いた。

リラも微笑んで頷く。

「うん、他にあてはないんだし、行くっきゃないよね」

「ギャッピーはとっくにその気だ」

ギャッピーは、決まりきった結論を、ごちゃごちゃお喋りするんじゃないと言いたげに、さっさと霧の壁のほうへ歩みを速めていた。

二人が霧の中に入ったとたん、足元の大地は感触を変えた。それは、かすかではあるが温かかった。

まるで、硬直した死者の体が蘇生したような、まさに血の通った生きものの肌の上を歩いているようだった。

明らかに、一歩一歩踏みしめるカチカチの凍土がうるおって感じられた。

リラは、霧の中で、顔さえはっきり見えないフィレーナの手を握りしめた。

「なんか、ここ、生きてる」

フィレーナは、何も言わず手を握り返して頷いた。

やがて、大地の踏みごたえが、シャリシャリという霜柱を潰す感覚になり、それも消えると、この極北の地に来て初めての、なつかしい踏みごたえが、二人の足元にあった。

それは、露に濡れた草に違いなかった。精いっぱい水分を含んだ霧は、確かに温かかった。

……地面が冷たくない。そして、海も……

霧の壁は、凍土の上を吹き抜けていく氷を含んだ風が、大地に温められ急速に上昇して、さらに上空で冷やされてつくられたものだった。

二人は、霧の中を歩き続けた。

霧の向こうを見てみたい。

二人の足取りは、疲れも忘れて速くなった。

足元の草はどんどん増えていく。

霧は小粒の雨に変わり、乳白色に濁っていた視界が、開けてくる。

草の緑がにじんで見えてくる。

やがて、二人とギャッピーは、霧の壁を抜けた。

そこには、もう一つの世界が待っていた。

第2章

北の民

フィレーナとリラの前に、再び、空の蒼(あお)さが戻ってきた。
陸には、色があった。
鮮やかな緑……草原のじゅうたんの上、モザイクのような赤、黄色、紫(むらさき)、そして雪とは違うぬくもりのある白がちりばめられていた。
それは花だった。おそらく、菊の類らしい花弁の多い花が無数に咲いていた。
今までが嘘(うそ)のように穏(おだ)やかな海は、空を映してさらに青い。
二人が立っているのは、岬(みさき)の先端(せんたん)だ。
だが、今まで切り立っていた崖(がけ)はなく、草花が咲く岬は、緩(ゆる)やかな傾斜で海に滑(すべ)り込んでいた。
そして、岬に狭められた海を挟(はさ)んで、向こう側にもやはり岬があった。
こちら側と対照的に背の高い樹林に覆(おお)われている。
このあたりは、二つの岬に囲まれた大きな入江のようだった。
だが、その地形を思うより、今のフィレーナとリラは、目の前に広がり息づく色彩(しきさい)に息を飲

んで立ち竦んでいた。

花といえば、二人には、忘れえぬ風景があった。

山岳民族の生き残り、リトル・ラリテニアの人々が作っていた、自忘芥子の畑だ。

だが、それは不毛の山岳地帯で栽培されている花の、色彩こそ絢爛とはしていたが、これみよがしに美しさを誇示したような、健気には思えても、無理をして生きている重苦しさのある色だった。

鬱蒼と茂る密林の中を歩いたこともあった。

それも、今思えば、その密林は荒廃した砂漠のオアシスの中で、懸命に生き続けようとしている必死さが、その色彩に匂っていた気がする。

その色が自然本来の存在でありながら、あまりに周囲の色彩が疲弊しているために、かえって不自然に着色したような落ち着きのなさがあった。

まるで、前評判の高い芸術を、背筋を伸ばして感動しなければならないような窮屈さがあるのだ。

素晴らしいとは思う……けれど、どこか居心地がよくない。

今まで出会った自然の色彩とは、二人にとってそんな感じのものだったかもしれない。

だが、今、目の前に広がる色は違っていた。

それぞれの色が、のびのびと、あるがままに、でしゃばるわけでもなく、そこにあって当然と思える色彩で存在していた。

これほど、穏やかな色彩が、支配する光景を見たのは初めてだった。
無理のない生命の色だった。すべてがみずみずしい色だった。
これが、絵画だとしたら、色彩の保存のために油で溶いた絵の具でなく、長持ちしなくてもいい……だれに認められなくてもいい……けれど、生命が本来もつ、水で溶かれたみずみずしい水彩画だった。
時が今の色をあせさせてもかまわないのだ。
なぜなら、また同じ色が、次の季節には生まれてくるのだから……そんな潔さと余裕のある色彩が、二人の前に満ちあふれていた。
だから、その色は、決して、媚びず、謳歌せず、あたりの空気を染めようとはしない。
かすかに色のかおりを匂わすだけだ。
「生きているんだね」
リラがもう一度さっきの言葉を呟いた。
「ああ……こういうのがそうなんだね」
フィレーナは、胸いっぱいに息を吸いこんで頷いた。
「あれも生きてたみたい」
リラが、微笑んで入江を指さした。
かなり小さくなった氷塊がぽつんと浮かんでいて、ゆっくりと入江の奥へ向かって進んでいく。

「あれが、僕らが追っかけていたやつかな？」
その氷塊の表面は、ずいぶん溶けて、形が変わっている。
リラは肩を竦めた。
「他にそれらしいのが見当たらないもん。この際、決めつけちゃお」
そのときだった。
まるで、リラに答えるように、氷塊が大きく揺れた。
「あらら……また、でんぐりがえし」
リラの言うとおりだった。
氷原に亀裂が入り、帆船が海上から海底に逆転して没したときと同じ現象が起こったのだ。
ただし、今度はその正反対に、海中に没していた帆船が海上の氷塊とひっくりかえって、姿を現した。
まだ、薄く氷に閉じこめられてはいたが、氷原で二人が見たそのままの姿だった。
リラは、思わず手を叩いて歓声をあげた。
「やった。お船だ……お船だ……あの船だ。やっぱりね」
「どうなってるんだ？」
フィレーナが、呆気にとられて呟く。
「こりゃ、起こるべくして起こった自然現象でしょう……」
リラがしたり顔で答えた。

「自然現象？」
フィレーナが聞き返す。
「氷は水に浮くでしょう？」
「確かに……だけど、それとこれとは……」
フィレーナは、首をひねる。
リラは携帯通信電算機を開き画像を出した。
「あの氷の塊の大きさと形から計算したんだけれど」
ビジョンに氷塊のシミュレーションが、映しだされた。
「浮かぶといっても水との比重で氷の四分の三は、海の中よね。氷が割れたとき、帆船のある氷の四分の三が海の上に出ていたとしたら、その部分が水の中に入って当然でしょう？　そして、流れていくうちに、外の空気より海の水のほうが温かければ、海の中の氷のほうが先に溶けて小さくなる。そうなれば、海の上の氷より海の中の氷が小さくなり、ひっくり返って、帆船の部分が外に出てきても不思議はないわ」
「不思議だね」
フィレーナは首を振った。
「やっぱ、不思議に気がついた？」
リラは微笑んだ。
「氷の四分の三が水の中に隠れるのはわかるよ……でも、水の中の氷が小さくなったからとい

って、都合良く、上と下がひっくり返ったりするかい？」
「そう……都合が良すぎる」
リラは頷いた。
「本当なら、そのままの姿勢で、溶けた分だけ沈むわよね。でも、現実は、上下がひっくり返ってしまった……」
「なぜ？」
「たぶん、あの帆船には、そういうバランスを取れるような仕掛けができているんだわ」
「仕掛け？」
「帆船の中に、相当軽いものがあるのよ。たぶんそれは水よりも氷よりも軽くて、そして、周りの水から帆船を守る氷が溶けてきたら、船が水の中に沈みっぱなしにならないようにバランスを取るもの……はてさて、それってなあんだ？」
フィレーナは、すぐに答えた。
「水より軽い……それは空気か……あの帆船の中に空気があるっていうの？」
「不思議が不思議でなくなるには理由があるわ……今、考えられるのは空気……そして、きっと、空気で、重さや姿勢のバランスを取る仕組みがあるのよ……あの船はただの帆かけ船じゃないわ……もっと仕掛けのある船に違いないわ。でも……どうして……何のために……なぜこんな所に？」
「それは、あの船に聞かなきゃわからない……」

「ですね」
リラはこくりと頷いて携帯通信電算機を閉じた。
帆船は、日の光を受け、凍った船体をきらきらと光らせながら入江を漂っていく。
二人は、帆船を追った。
入江はしだいに狭まり、その奥に砂浜がひろがっていた。
そして……。
二人は、浜を見下ろす丘の上で足を止めた。何かが聞こえたからだ。
それは、風の音でもなく、潮騒の音でもなく、しかし、人工的な臭みのない音だった。
自然の何かが発する音のように思えた。
それでも、その音には確かにリズムがあった。
動物の鳴き声のような気もした。
だが、確かに旋律があった。楽器らしい音もした。
けれど、フィレーナやリラが、今まで聞いたことのある音楽とは、あまりに違っていた。
それなのに、なぜか心地よく、なつかしく聞こえた。
フィレーナとリラは、誘われるように音の方向へ向かった。
ギャッピーも、その音に警戒心を示す様子がなかった。
やがて、丸太で作った小屋の点在する集落が見えてきた。
中央の広場で、焚き火が燃えていた。

二人は、岩陰に隠れ広場の様子を窺った。
焚き火を囲んで、十数人の人々が座っている。
人々は毛皮を縫い合わせただけだが、見るからに暖かそうな服を着ていた。
その服にほとんど差はなく、頭につけた花のあるなしが、男女の別らしかった。
そして、あの音は、その人々の口々から、唸るように呟くように流れ出ていた。どこの言葉なのか意味は不明だが、それは、祈りとも呟きともとれる歌声だった。
時折、歌声に交じって、楽器のようなものの音が、連続して聞こえた。
音は小さいのに、あたりの空気を震わせて、フィレーナの胸の奥底まで響くような音色だった。
じっとしていると心臓の鼓動が、どうしようもなく共鳴して、肌が粟立つような気分におそわれる。
音の出所を注意深く目で追うと、小さな菊の花を頭に挿した女性が、口のあたりに両手を持っていき、小刻みに震わしているのに気がついた。
フィレーナは、その女性が笛でも吹いているのかと思った。
だが、リラの溜め息まじりの呟きは違っていた。
「痺れるわ、この弦の細震奏法」
「弦？　弦の細震奏法って……知っているのかい。あの楽器を」
フィレーナが、聞きかえした。

接待用奴隷(エンターテインメントクレチア)として育てられたリラは、フィレーナより楽器に詳しいはずだ。

「弦を使った音だってことはわかるわ。でも、聞いたことのない楽器の音よね。普通ね、弦楽器って、金属製の糸を、弾いたりこすったりするものでしょう」

「弦の使い方なんて知らない。闘技士が出すのは、武器で相手をぶっ叩くときの音ぐらいだからね」

「あなたは打楽器……太鼓(たいこ)専門か……」

リラは、肩を竦めた。

「楽器って、電子楽器をのぞくと、打楽器でしょ、弦楽器でしょ? それに、笛なんかの吹奏楽器の、大体、三種類に分かれるの。わっかる?」

リラは先生が生徒に教えるように、フィレーナの顔を覗(のぞ)き込んだ。

「知識としては知っている」

リラの先生口調には閉口していたが、この際は素直に頷くことにした。

もっと、あの楽器の音について知りたかった。

フィレーナはそんな自分の気持ちが、不思議だった。

ここは、見ず知らずの土地、まして、見ず知らずの人たちが目の前にいる。

本当なら、全神経を磨(と)ぎすまして警戒しなければならないのに、人々の声と楽器の音は、フィレーナの感情を穏やかにさせていた。

こんな音を出せる人たちが、二人に危害を加えるはずがないと、何の根拠もなく安心してし

まったのだ。

あのギャッピーですら、二人のかたわらで目を細めて、横たわっていた。

リラも、気持ちは同じらしい。

リラはフィレーナに微笑んでから、小声で話を続けた。

「もっとも、帝国系の現代音楽って、音拍(リズム)中心で、旋律なんてどうでもいいって代物(しろもの)ばっかですもんね。それも、乱打強打。雨が降ろうが、風が吹こうが、おかまいなしの、まるでお腹に響けばいいって感じの高音量でしょ。弦を弾こうがこすろうが、どんな音も、神経を高ぶらせる刺激音になっちゃう。いわば空気を揺するような音なのよね。でも、ここの弦の音は違う。帝国では弦をどう使おうと、こんなに弦の音が繊細(せんさい)にはならないわ」

「繊細か……」

「うん、空気を微妙に震わせてるって感じ……これがほんとの細震奏法(ビブラート)なんだわ。こんな弦楽器の使い方、細震奏法(ビブラート)って言葉は残っていても、帝国の現代音楽にはもうないと思う。芸術関係の天才であるリラちゃんとしては興味のつきないところよね」

リラが天才かどうかはわからないが、人々の声に混じって流れる楽器の音が、フィレーナが物心ついてから聞いたどんな音楽の音より、心地よいことは確かだった。

今、女性の口元で震え空気を響かせている弦楽器が、太古の昔、北方の狩猟(しゅりょう)民族が大地と空と海に感謝し弾いていた口琴(こうきん)の一種であることを、二人が知るはずもなかった。

空気と歌声と弦が調和した、うつらうつらの時が過ぎていった。

太陽のつくり出す影だけが、時間の経っていくのを教えていた。
そして、突然……。
浜のほうから、今まで聞こえていた歌声とは別の、けれど、歌声と同じようにあたりの空気を震わせて声がした。
叫び声だった。
フィレーナとリラは、これほど、空気を響かせる人の声を聞いたことがなかった。
しかも、その声だけは、二人にも何を言っているのか聞き取れた。
「フィレーナ！　フィレーナ！」
浜に、集落に、岬に、草原に、森林に、山に、声はこだました。
広場の人々が立ち上がった。
「フィレーナ！　フィレーナ！」
その声に呼ばれて人々は、海辺へ向かって歩きだす。
フィレーナはリラに確かめた。
「フィレーナ……僕の名？……だよね」
リラは、目を輝かせて頷いた。
「うん。フィレーナって言ってる。……それも交錯唱法を使って」
「交錯唱法？」
「胸からの声と裏声を交互に喉で震わせる歌い方……古代の人間が、声が遠くまで届くように

考えだした発声法で、拡声器や伝音機のある今となったら、普通の人はまずできないわ。私も練習のときしかやったことがない」

「練習のときって?……」

「接待用の声なの……失礼しちゃうわ。……女があんな声を出すと喜ぶ男もいるんだって……ばかみたい」

リラは口をとんがらかせた。だが、すぐに真顔になり、

「でも、この声は……ばかにできないわ」

「拡声器なしの声の通信か」

リラは目を輝かした。

「うん、本来の使われ方よね……うん。交錯唱法（ヨーデル）って素敵。本物はいい。この声なら納得できるわ」

「行ってみよう」

二人はギャッピーとともに、岩陰づたいに人々の後を追った。

「フィレーナ……フィレーナ」

海辺の小高い岩場の上で、男が海上を指差し叫んでいる。

砂浜に来た人々も海にむかって口々に叫ぶ。

「フィレーナ!　フィレーナ!」

海の上にはあの帆船が浮かんでいた。表面の氷はほとんど溶けている。

人々は再びあの歌を歌いだした。
そして、その歌詞の最後には、フィレーナという言葉が付け加えられた。
二人にも、この土地の人々にとってフィレーナという名が何をさしているかよくわかった。
「あの船、あなたと同じ名前らしいわね」
フィレーナは頷いてリラに言った。
「船の名前としたって不思議はないよ。フィレーナって海洋民族にとってはありふれた名前だもの」
「海の魂（フィレーナ）……か。だとしたら、この人たちも、あなたと同じ海洋民族ってこと？」
「かもしれない。でも……固有名詞はわかっても、あの人たちが何を喋っているかはわからない。つまんないよね、こういうの」
フィレーナはそう言って肩を落とした。
海洋民族の国フィロセラの末裔でありながら、帝国の奴隷（クレチア）として育てられたフィレーナの知る海洋民族の言語は少なかった。
いや、帝国に育たなくても、帝国教育は海洋民族の言葉を人々の記憶から抹消しようとしていたから、接する機会もなかったろう。
それでもフィレーナは自分の生い立ちを知った以後は、できるだけ海洋民族の資料を手に入れ、海で生きる人々の言葉を憶えようとしてきた。
やがて、わずかながらだが、暗号を解読するように、文字と文章のいくつかは、その意味を

読み取ることができるようになっていた。
しかし、それは読み取れるというだけだった。
その文章を、どう発音していいのかはわからなかった。
母国フィロセラの文字が音を示す表音文字なら、発音の真似事ができたかもしれない。
だが、フィロセラの文章は、象形文字と表音文字の複雑な混合だった。
しかも時代によって象形文字と表音文字の使われている比率が変わっている。
近世になるほど、象形文字は略式化され、形から意味の読み取れる文字は少なくなっている。
まして、フィロセラは、国民もろとも存在した記憶すら根こそぎ消された国だ。
フィロセラの言葉を発音できる人はほとんど生き残っていまい。
滅ぼされた国と文化の言葉は文字で残っても、音は記憶から消されていく。
文字は読めても、しゃべることも聞くことも、もうできないのだ。
それでも、フィレーナは、海の魂という意味と文字が母国フィロセラで、たぶんフィレーナと発音することを知っている。
わずかに生きている海洋民族の間に残されている数少ない共通の固有名詞だからだ。
だが、他の言葉を、どう発音するかわからない。
たとえ、同じ血を引く海洋民族でも国と地方によって言葉は違ってくる。
共通の発音で話される単語等、そう多くはない。
文字で残っても、人の口から出てこない語句は、もう、言葉とは呼べない。

過去を知らせる記号でしかない。
　最後の海洋民族国家だったフィロセラの言葉は、音を失い、叫ぶことすらできなくなった。喜怒哀楽で漏れる悲鳴や笑いにすら、もうフィロセラの音はなくなっているかもしれない。
「フィレーナ！　フィレーナ！」
　北の果ての人々は帆船を見て確かにそう発音している。
　もしかしたら、この人たちのしゃべっている言葉のなかに、母国フィロセラの人々が使っていた音があるかもしれないのだ。
「フィレーナ」という言葉がわかるだけに、それ以外に何も理解できないもどかしさが、フィレーナの胸を切なくさせた。
　いつのまにか、幾艘もの獣皮艇が、浜から漕ぎだし帆船に近づいていった。
　獣皮艇から帆船に乗り移った人々は、祈りとも願いともつかぬあの歌を口ずさみながら、帆船の甲板に花びらをまき散らした。
　浜辺では、男たちに運ばれてきた、さまざまな動物の顔が彫刻された大きな円柱が立てられた。
　その周りにいくつも焚き火がたかれ、その周りを取り巻いた男女が歌に合わせ、口琴の音拍に乗って緩やかに踊り始めた。
　いきなり、激しい太鼓の音拍が、それに加わった。
　それは、フィレーナとリラが、いままで聞いたことのない太鼓の音だった。

帝国で二人の聞き慣れた太鼓は、合成樹脂の張り切った皮膜に、金属の枹を叩きつける機械音に近いものだった。

だが、今、空気を弾ませている音は違っていた。

木製の筒に、獣の皮を張り手で叩く原始の太鼓だった。

どこか温かく、心が和み、しかも気持ちは高揚していく不思議な音色だ。

「なんか……乗れる……」

岩陰に隠れているのも忘れ、リラは思わず足先で音拍を取った。

それほど、胸弾む太鼓だった。

焚き火の周りの踊りは、陽気な足取りと身振りに変わった。

若きも女も男も子供も身体を激しく揺らし、跳ね飛び、老いた者はそれなりに音拍に調子を合わせている。

それは、リラが習った鑑賞用の舞いでもなく、決まりきったふりのある社交舞踏でもなく、ましてて帝国の舞踏場で帝国人の若者が踊るような、自分勝手に自己陶酔する一人踊りとも違っていた。

浜辺で踊る人々のすべて……それぞれに笑顔があふれ、互いの躍動を喜び楽しんでいた。

「そか……これがお祭りの踊りなんだわ」

リラが、目を輝かした。

「お祭りの踊り……？」

「うん……かつて踊りは祭りであった。……帝国芸能序説……序章の出だし……私、養成所で暗記させられたの。暗記はしたけれどピンとこなかった。踊りって自分が楽しむものか、人を楽しませるものかのどっちかだと思っていたもん。もっとも、接待用奴隷(エンターテインメントクレチア)にとってはほとんどが帝国人民(エンパイアラー)の御主人を楽しませるものだけどね。ふーん、これが祭りの踊りなんだ」

リラは、自分自身を納得させるように呟いた。

「違うのかい？　普通の踊りと……」

リラは頷いた。

「だいたい、私、祭りっていうのが、よくわからなかったんだ。フィレーナは、お祭りって何だか知ってた？　お祭りって楽しいもんだと思っていた？」

「え？　楽しいもの……」

そう言われてみれば、普通、お祭りといえば楽しいものという意味あいが、言葉からは感じられる。

だが、フィレーナは祭りをそう感じたことはなかった。

お祭りか……。

帝国に祭りがあることは知っている。年に十数回の帝国の祭日があり、休日になることも知っている。帝国人がその日、飲めや歌えの騒ぎになることも知っている。

だが、闘技士(バトラー)のフィレーナにとって、帝国人の祭りは、帝国人の娯楽(ごらく)である闘技試合の、必ず行われる日だ。

自分でなければ奴隷（クレチア）のだれかが死ぬ日だ。
接待用奴隷（エンターテインメントクレチア）のリラにとっては、客や主人の相手をすることに翻弄（ほんろう）され、忙（いそが）しく、そして屈辱感（くつじょくかん）にまみれた日でしかない。
リラは、焚き火の踊りに音拍を取りながらフィレーナに言った。
「私が教わったその本には、祭りは、多くの人々が、何かへ対する喜びと感動と感謝の空気を共有し、ともに楽しむこと……って書かれてあったわ。なんだかわかるようなわからないような、どうもお祭りって奴隷（クレチア）向きじゃないって思った。
……だって奴隷（クレチア）には他人と共有できる喜びも感謝も感動もないもの。いつ死ぬかわからないという悲しみは共有できても……喜びはめったにない。あっても自分一人が、せめて今日だけ生きているという、その日暮らしの喜びだもの。それって、その日の命だって決められない他の奴隷（クレチア）と共有できるものじゃあないわ。
奴隷（クレチア）は自分だけの喜びを持つだけで精いっぱい。だから私たちの踊りの楽しさは、その日暮らしの一人遊び……私たちには祭りなんてない。それが踊りと結びつくなんて、ピンとくるわけないじゃない……ねえ……」
リラに同意を求められたフィレーナは微笑して答えた。
「でも、リラのその様子だと、今はピンときたわけだ」
リラはにっこり笑った。
「きたきた。音拍できた。空気できた。踊りできた。私、あの人たちが何を喜んでいるのかは

知らない。でも、喜んでいることはわかる。たぶん、何かを感謝していることも……何かに感動していることも……あの踊りなら感じられる。だって、私、嬉しくなってるもん」

フィレーナは頷いた。

「僕には、踊りも音拍もわからない。でも、あの人たちの空気ならわかる気がする。悪い気がしない」

闘技士としてのフィレーナは、人の持つ殺伐とした憎悪と闘志と殺気に対して、動物以上に敏感だった。

たとえ、その殺意が自分に向けられたものでなくても、集団の戦いの中では、今、だれがだれを狙っているか見極める感性は、闘技士が生き残るためには不可欠なものだった。

だが、焚き火の周りで踊る人々には、いがらっぽいものがなかった。

優しさがあった。温かさがあった。

フィレーナは、今まで、集団の踊りを見なかったわけではない。

酔ったように首都に向かって行進する神女団の踊りに紛れ込んだこともある。

けれど、あの集団には、神経を擦り剝ぐような狂気があった。

神女団だけではない。

人間が集団で行動するとき、フィレーナはいつも居心地の悪いものを感じてしまう。

反乱軍を率いていたときも、指導者の立場にいながら、集団というものが動くときに感じる、個人個人の自意識が失われていく雰囲気に、どうしようもない気味の悪さを感じるのだった。

どんなお題目がつこうが、集団で闘うぐらいなら、たとえ見せ物であろうと、個人で闘う闘技試合のほうが、自分が自分を動かしている気分でいられるだけましだと思ったときもあった。

フィレーナは、集団の行動というものにいつまでたってもなじめなかった。

フィレーナは、集団の行動の肌触り(はだざわ)にうんざりしていた。

しかし、焚き火の踊りは、今までのどの集団の行動とも違う気がした。

ざらついたものがなかった。

踊りはしだいに激しさを増していくのに、そこには柔らかな空気が満ちていた。

興奮(こうふん)はあったが、狂気はなかった。

殺意も憎悪も戦いも感じない集団だった。

なにより、踊っている個人個人の楽しさが、集団でありながら個々に湧(わ)きだしていた。

そこには集団の喜びがあると同時に、個々の喜びが泡だっていた。

「これが、祭りか……」

フィレーナは呟いた。

「みんなが納得しているんだ。納得して、喜んで踊っているんだ」

……だから、この人たちの空気は暖かい。

……こんな祭りの雰囲気は帝国の祭りには感じられなかった。

帝国の新年祭り、帝国の成人祭り、帝国の建国祭り、帝国の憲法祭り、帝国の老人感謝祭、帝国の文化祭等など……いわば、儀式(ぎしき)としての祭りだ。

帝国人は、確かにその祭りを飲めや歌えや踊れやで祝う。
しかし、考えてみれば、どれもこれも国が決めた祭りで、国は喜んでいるかもしれないが、帝国人自身が本当に喜んでいるかどうかは、奴隷(クレチア)だったフィレーナにはわからなかった。
だが、たとえ、人種が違っていても、祭りを喜んでいる姿は端から見ても感じるはずだ。
けれど、帝国人が祭日に見せる喜びの中でいちばん生き生きと感じるのは、闘技試合で流される血に興奮する表情だった。
フィレーナにとってそれが楽しいと思えるはずがなかった。
いずれにしても、焚き火の周りで踊る人々から感じられる楽しさを、帝国人の祭りから感じたことはなかった。
……けれど、これが祭りだとしたら、この人たちは、何を喜んで踊っているんだろう。
……この人たちのだれもが納得し、その踊りが、全くの部外者の僕たちまで見ていて楽しくさせる喜びってなんなんだろう……
フィレーナは、ふと、かたわらにいるギャッピーを見た。
ギャッピーは伸ばした前足の上に、顎(あご)を乗せ蹲(うずくま)っていた。
まるで、うたた寝しているようだった。
くつろいでいるともいえるし、言い方をかえれば弛(ゆる)んでいた。
それは、ギャッピーがあたりの空気に険悪なものを感知していない証拠だった。
感知していないどころか、フィレーナは、こんな無警戒(むけいかい)なギャッピーの姿を見たことがなか

った。
焚き火の踊りの音拍と旋律に、聞きほれているような感じすらした。
動物の中でも超一級の戦士であるはずの狼犬のギャッピー……。
その気持ちさえ優しくさせる雰囲気と踊り。
リラと僕が感じた安らぎは本物だ。
ギャッピーの御墨付きを貰ったような気がして、フィレーナは微笑んだ。
そのときだった。
ギャッピーの耳がぴくりと動いた。そして、ゆっくりと背後を向いた。
「ん……？」
フィレーナも後ろを向いた。
いつの間にか、そこに、二人の子供が立っていた。
三歳か四歳ぐらいの幼児だ。
フィレーナは、思わず息を飲んで身体を堅くした。
……あ、痛っ！　後ろを取られた……
フィレーナがまず感じたのは、闘技士らしい思いだった。
……闘技士としては恥ずべきことだ。
思わず、腰の剣に手をやっていた。
いくら踊りに見とれていたとはいえ、後ろに接近した気配に、まるで気がつかなかったのだ。

リラは舌を出して、思わず声を出した。
「やだ……見つかっちゃったあ……ギャッピー！　しっかりしてよ」
リラは、ギャッピーのせいにした。
ギャッピーは、ちらりとリラを見上げただけで動こうとしない。
相変わらず、寝そべったままだ。
ギャッピーは二人の幼児に気がついていたのかもしれないが、どうやら警戒の対象とは思わなかったのかもしれない。
二人の幼児は、好奇心の満ちあふれた顔で、フィレーナたちとギャッピーを見較(みくら)べている。
フィレーナはリラに囁(ささや)いた。
「静かに……子供が騒げば、みんなに見つかる」
「わかっている。あんたもにっこり……こわがらせちゃ駄目(だめ)」
「ああ……」
リラとフィレーナは笑顔を作って見せた。
リラはともかく、作り笑顔に慣れていないフィレーナの頬(ほお)は、笑っているというよりこわばっているといったほうがいいかもしれない。
フィレーナたちと二人の幼児の奇妙なにらめっこがしばらく続いた。
そのうち、幼児たちの視線はフィレーナたちから狼犬(ウルフドッグ)のギャッピーのほうに興味を持ち出した。

やがて二人の幼児は、ちょこちょことした足取りで、ギャッピーに近づいていく。
幼児たちから見れば小山のように見えるはずのギャッピーだが、幼児たちは、狼犬に対して恐怖心を持っていないようだ。
リラが、おどおどとギャッピーに言った。
「駄目よ。おこっちゃ。騒がれると大変だからね」
幼児の一人が、ギャッピーの鼻先を撫でた。
ギャッピーは黙っている。
「ギャッピー、あんたは大人よ……大人……我慢ね……我慢はいい子」
リラが、はらはらしながら囁く。
もう一人の幼児が、ギャッピーの髭を、ぎゅっと引っ張った。
リラとフィレーナは、自分がされたように思わず顔をしかめた。
ギャッピーは、たまらず鼻をむずむずと動かした。
「きゃははは……」
幼児たちは屈託なく笑ってフィレーナとリラを見上げた。
「あははは……ね」
リラは、幼児の一人の頭を撫でた。
幼児はにっこり笑った。
「フィレーナ、あんたも……」

「あ……ああ……あははは」
フィレーナも笑い顔を作った。
恐る恐る手の平を、もう一人の頭にやった。
昔、リトル・ラリテニアの子供たちに闘技を教えてやったことはあったが、こんな幼児には触れたこともなかった。
子供は正直だっていう。
……僕は闘技士（バトラー）だ。何人も人を殺している。どんなに笑顔を作ってそれを繕（つくろ）ったとしても、子供は、それを感じとりはしないか……
怖（こわ）がられないかとひどく不安だった。
……リラとギャッピーは大丈夫（だいじょうぶ）だったのに、この子に触って泣かれでもしたらどうしよう。
むしろ、今はフィレーナが泣きたい気持ちだった。
幼児はどことなく緊張（きんちょう）した表情でフィレーナの顔を見上げている。
そっと、頭に触れてみる。
思わず目を閉じる。
どこか、柔らかな手触りを感じる。
子供っていいもんだな……と思う。
「ふふふ……」
幼児の笑い声が漏れた。



北辺の村の幼児たちは、屈託なく笑ってフィレーナとリラを見上げた

フィレーナは目を開けて、幼児の顔を見た。
屈託のない顔が笑いかけてくれている。
嬉しかった。
そして……なぜか、突然、欲しいと思った。
子供が欲しいと思った。
「笑ったよ」
フィレーナはリラに言った。
「合格……」
リラはにっこり笑った。
と、突然……。
幼児たちは、甲高い声を上げた。
何を言っているのかわからなかったが、あの交錯唱法には違いなかった。
まるで、びっくり箱の蓋を開けたように、フィレーナとリラは息を飲んだ。
さすがのギャッピーも、むっくりと腰を上げた。
だが、それ以上何もしなかったのは、幼児たちの声に敵意を感じなかったからに違いなかった。
敵意があろうとなかろうと、リラはうろたえて耳を押さえた。
「ちょっとやめて。みんなに聞こえちゃうっ」

自分の耳を押さえても意味はない。
フィレーナは首を振った。
「もう、遅いよ」
焚き火の踊りが止んだ。
人々の視線が、フィレーナたちのいる岩陰に注がれていた。
フィレーナは逃げ場を捜した。だが、無駄だとすぐにわかった。
見るからに原始的な弓や矢や槍を持った一団が、背後の丘からも姿を現したのだ。
前も後ろも取り囲まれた格好だった。
フィレーナとリラを取り巻いた人の輪はしだいに狭まってくる。
……闘うしかない……
敗北した闘技士や反乱軍に残されているのは死しかない。
投降しても、待っているのは屈辱と凌辱、拷問の末の処刑しかない。
フィレーナは降伏する考えはまるでなかった。
フィレーナは、剣の柄に手をやって身構えた。
リラも同じ気持ちだ。
闘っても駄目なら、ひどい目に合う前に、舌を噛んで死ぬ覚悟はできていた。
そのときだった。
幼児の一人が、フィレーナの袖を引っ張った。

「え……？」
幼児は屈託のない笑顔を変えずに、フィレーナに何かを言った。
もう一人の幼児はリラの袖を引っ張っている。
まるで、二人を踊りの人々に引き会わせようとしているようだった。
フィレーナとリラは顔を見合わせた。お互い、どうしていいか、戸惑っていた。
そんな迷いを打ち消すように、ギャッピーは欠伸をしてから大きくのびをした。
まるで、闘う気配がなかった。
……おたおたするんじゃないよ……相手に敵意がないのがわからないのか……
そう言いたげだった。
けれど、フィレーナも、そんなギャッピーに言ってやりたい気持ちがある。
人間ってやつは、動物と違って、気配だけでは計れないところがある。
にっこり笑っていて、こちらが気を許して剣を手放した瞬間、気が変わったかのように裏切るのも人間の特徴だ。
油断はできない。
まして、今は、フィレーナ一人ではない。
リラがいる。
リラがひどい目に合うのだけは、避けたかった。
焚き火の踊りの一団の間から、長い髭を生やした長老格の老人が前に進み出た。

フィレーナは剣から手を離さず、老人と見合った。
老人は、何もしゃべらずじっとフィレーナを見つめている。
二人の幼児は、フィレーナとリラのそばから離れない。
幼児たちを人質や盾に使う気はなかったが、周りの人たちから見ればそう感じられるかもしれない。それが、攻撃してこない理由かもしれない。
焚き火の一団は武器を持っていないようだが、背後から来る集団は武装している。
いつ、矢や槍が降ってきても不思議はないのだ。
しばらくの間、睨み合いが続いた。
二人の幼児は、そんなフィレーナと焚き火の一同の対峙を、怪訝そうに見上げていた。
やがて、緊張した空気に退屈してきた。
いきなり、幼児たちは交錯唱法で、歌いだした。
そして、その場で駄々をこねるような足取りで飛び跳ねだした。
それは、拙いが、焚き火の踊りと同じものだった。
長老格の老人の顔が、ふーっと和んだ。
一瞬、焚き火の一同の表情にも柔らかさが宿った。
リラは、雰囲気の変化を見逃さなかった。
「これだわ……やるべし」
リラは、頷いた。

「え……？」
フィレーナの戸惑った声には答えず、リラは歌いだした。
幼児たちと同じ交錯唱法(ヨーデル)だった。
もちろん、リラの慣れない交錯唱法(ヨーデル)は、お世辞にも上手とは言えない、交錯唱法(ヨーデル)というよりは裏声に近いものだった。
「踊れ踊れ……踊っちゃえ……。
恐(こわ)くないったら恐くない……。
こうなりゃ自棄(やけ)だよ……踊っちゃおう……。
踊ってごまかしゃ……恐くない」
歌詞もでたらめだった。
それでも、さすがに接待用奴隷(エンターテインメントクレチア)出身だけあって、音拍と旋律は外れていなかった。
焚き火の一同は、呆気にとられてリラを見つめた。
リラはにっこり笑うと、幼児たちの足取りに合わせて踊りだした。
踊りは、交錯唱法(ヨーデル)ほど下手(へた)ではなかった。
さっき見た焚き火の踊りを真似(まね)てはいたが、即興(アドリブ)で、踊り子リラなりの、かなり高度な色づけ(アレンジ)がされていた。
幼児たちは手を叩いて嬌声(きょうせい)を上げた。
焚き火の一同からもどよめきが湧(わ)き上がった。

長老格の老人の後ろから、弦の音が聞こえた。
口琴を弾いていた若い女性が、また演奏を始めたのだ。
リラは、ありがとう……とでも言うように、若い女性にひらひらと手を振った。
若い女性は、にっこりと笑い返す。
すぐに別の女が弾く口琴が、加わる。
焚き火の一同の足が音拍をとりだす。
一人の女がリラに負けじと飛び出し、踊り出した。
長老格の老人が手拍子（てびょうし）を取る。
フィレーナの背後にいた男たちが、矢や槍を叩き弓を弾いて調子を取る。
リラはフィレーナに歌いかける。
「踊れ踊れ……踊っちゃえ……。
大丈夫ったら大丈夫……。
うまくいきそう……踊っちゃおう……。
踊ってごまかしゃ……楽しいよ」
フィレーナは、思わず自分を指さした。
「僕も……」
リラは頷く。
「踊れ踊れ……踊っちゃえ……。

仲良くなるとき、踊るとき
剣はいらない……踊っちゃえ
みんなで踊れば……気持ちが通う」

幼児の一人がフィレーナを促すように手を引っ張った。

「あ……うん……わかったよ」

フィレーナは、リラの踊りを真似ようとした。

体を揺すり飛び跳ねてみた。

「と……と……と……」

腰の剣に足がもつれて、躓いて倒れる。

焚き火の一同から、明るい笑いが湧き上がった。

幼児たちは、お腹を抱えて笑いころげた。

フィレーナは照れ笑いをしてギャッピーを見た。

ギャッピーは見ていられないとでも言いたげに、ぷいっと横を向いた。

「いいね……おまえは踊らずにすんで……ようし……こうなりゃ自棄だ」

フィレーナは、腰の剣を鞘ごと抜いて岩場に立て掛けた。

「僕は踊るぞ」

フィレーナは、身振り手振りを真似て、がむしゃらに踊り出した。

その一挙一動が笑いを誘い、いつの間にかリラとフィレーナを中心にして、踊りの輪ができ

ていた。
音拍に太鼓が加わった。
フィレーナは、音拍と旋律に身を任せるうちに、見よう見まねでぎこちなかった自分の踊りに無理が無くなっているのに気がついた。
気分が妙に高揚してくる。
体を動かすのが不思議に楽だった。
大地を叩き弾む足の弾みが、まるで、羽布団の上を跳んでいるかのように心地よかった。
そして、寒さと緊張と疲れでかさかさだった体が、内側から暖かく潤ってくるのを感じる。
それは、闘技の練習でいつも体験している汗の感触とも違っていた。
命を賭けた闘技試合で経験した血の逆流とも違っていた。
頭の上から爪先まで、ふわふわと浮き立たせるような幸福な体液が体中を駆け回っていた。
フィレーナの顔に止めようもない笑みが浮かぶ。
隣で踊る見ず知らずの人たちの躍動が、どうしようもなく嬉しく感じられる。
……もっと踊れ……もっと踊ろう……
フィレーナは、いつの間にか踊りに酔っていた。
リラも笑顔を振り撒き、楽しそうに踊っている。
その踊りも、フィレーナが今まで見てきた、いつものリラとは違っていた。
リラの踊りは、どちらかというと、相手がどう踊ろうとかまわない自己没頭型の一人踊りだ

った。

自分自身を自分だけに叩きつけ、内部で燃えつくしてしまうような、激しいけれど、どこか孤独な、他人を拒絶するような踊りだった。

だが、今日の踊りは違っていた。

他人と踊ることを楽しんでいた。

他人が踊りながら浮かべる笑顔を喜んでいた。

リラは他人と一緒(いっしょ)に、みんなと一緒に踊ることを嬉しがっていた。

その気持ちはフィレーナにもよくわかった。

なにより今まで踊りを楽しいと思ったことのなかったフィレーナ自身が、踊っていて嬉しかったのだから……。

何がそうさせたのか……。

これが、祭りの踊りだとしたら、祭りの空気が……祭りを祝う人々の歓喜が、そもそも何を祝っているのかも知らないフィレーナとリラの心に、直接伝わったとしか説明のしようがなかった。

やがて、焚き火の側に戻った長老格の老人が、フィレーナとリラに、何事か叫んで手を振った。

踊りの輪が、焚き火のほうへ動いていく。

「お招きされているみたい」

リラが、踊りながらフィレーナに言った。
今さら、断る理由などなかった。
フィレーナは、岩に立てかけた剣を取りに行こうと振り返った。
だが、そこに剣はなかった。
「僕の剣は……？」
いささかフィレーナはあわてた。
だが、リラが肩を突いて……あなたの横を見なさいとでもいうように、目で合図して微笑んだ。
二人の幼児が、剣の紐（ひも）を持って、引きずるようにして、フィレーナの側にいた。
まるで、忘れ物をなくさないようにと、ついてきているようだった。
フィレーナは、幼児たちに微笑みかけた。
そして、そのまま剣を引きずらしておくことにした。
「まいったな……僕、闘技士（バトラー）だぜ」
フィレーナは、照れ臭そうにリラに肩を竦めてみせた。
武器を、だれかに取られて気がつかないなど、あってはならないことだった。
ぶったるんでいるとしかいいようがない。
だが……、
「ま……いいかあ」

今日は、どうたるんでいても、自分が許せる気がした。
警戒心が踊りで弛緩(しかん)しきった自分が嬉しくもあった。
第一、この場に、剣や闘技士(バトラー)はいちばん不似合いに思えた。
ギャッピーだって、ほら、今日は一度も、牙(きば)を見せはしなかった。
「ね……」
同意を求めるように、フィレーナは、岩場に横たわるギャッピーを見た。
ギャッピーは、おだやかな目で、軽くあくびをしただけだった。
そして、前脚(まえあし)の上に顎を乗せて目を閉じた。
踊りの音楽は、聴力の優れた狼犬(ウルフドッグ)にとっては、あまりにも大きすぎる騒音だった。
それでも、今のギャッピーはどんな静寂(せいじゃく)よりも、ここに安らぎを感じていた。
これほど、危険の予感と感触のない時間と場は、生存のための戦いに明け暮れていたギャッピーにとっても初めてだったのだ。
そして、ギャッピーは花の香(かお)りと、潮風の入り交じった柔らかな風の中で、いつの間にか、うたた寝をしていた。

*

焚き火の周りで、踊りは、踊り手や演奏の弾き手を代わる代わるに替えて、いつ果てることもなく続いていた。
さすがに疲れたフィレーナとリラは、踊りを見ている人々の間に、隙間(すきま)を見つけ座った。

だれもが踊りに夢中で、よそ者である二人を気にしている様子はなかった。
やがて、踊りでは聞いたことのない旋律の交錯唱法が、浜のほうから聞こえてきた。
踊りが、突然止んだ。
一同が、海のほうを見つめた。
再び、交錯唱法の旋律が聞こえた。
帆船の舳先に立った男が、海に向かって歌っていた。
海の向こうから、こだまのように交錯唱法の声が返ってくる。
とたんに焚き火の人々から歓声が上がった。
「フィゴッ……フィゴッ……」
そう、口々に叫びながら波打ち際に駆けていく。
「フィゴッ……？　フィゴッって言ってるよね」
フィレーナは、リラに聞き返した。
「うん……意味がわかるの？」
「この人たちの言葉が海洋民族の言葉に近いとしたら、フィは海、ゴッは神様。海の神様ってことだけど」
リラは目を丸くした。
「海の神様がお出ましになるっていうの？」
「そういうことになるよね」

「こりゃ、見ものじゃ」
リラは背伸びして、海の方角を見た。
数隻の獣皮艇が入江に入ってくるのが見えた。
浜辺の一同の歓声が交錯唱法に変わった。
それでも歌う言葉はフィゴッだった。
数隻の獣皮艇は、帆船の脇を抜けると、まっすぐ浜辺に向かってくる。
「あれ、なに？」
リラが、獣皮艇の後ろのあたりを指差した。
海面が盛り上がってこちらに向かってくる。
浜辺の人々も盛り上がった海面を指差し、口々に……、
「フィゴッ！……フィゴッ！……」
と叫んでいる。
帆船につけていた獣皮艇も次々に帆船を離れ、盛り上がった海面に向かって進んでいく。
やがて、先頭の獣皮艇が浜辺につくと、浜辺の人々は我先に駆け寄った。
獣皮艇から降りた毛皮の男に、女性が抱きついた。
あの、口琴を弾いていた若い女性だ。
毛皮の男は、女の肩を抱いたまま、海を指差し、叫んだ。
「フィゴッ！」

人々は、数隻の獣皮艇（カヌー）の後部についていた縄（なわ）を、掛け声とともに引き出した。
海面を盛り上がらせていたものが、縄に引かれて姿を現し始めた。
フィレーナもリラも今まで一度も見たことのないものだった。
それは、背が黒く腹が真っ白な魚に似た巨大な生きものの死体だった。
木製の柄に刃物をつけただけの原始的な銛（もり）が、何本も背中につき立っていた。
今は死んでいるとはいえ、ついさっきまで、波をけたてて泳いでいたことは、想像にかたくない。
だが、目の前に見せられても、こんなに大きなものが海に住んでいるなど信じられなかった。
まさに神様と呼ばれても不思議はなかった。
それはかつて、この星で誕生（たんじょう）した生物の中で、最も大きな海洋哺乳類（ほにゅうるい）の一種だった。
はるか昔に絶滅（ぜつめつ）し、今や海洋民族の伝説の中にしか登場しないこの哺乳類を、帝国内で奴隷（クレチア）として育てられたフィレーナとリラが知るはずがなかった。
だが、この極北の海のどこかに、今もこの動物の群れは絶滅せずに生きていたのだ。
そして、そのうちの一頭が、十分の一にも満たない獣皮艇（カヌー）の勇気ある一団と戦い、力つきて、浜に引き上げられたのだった。
長老格の老人がフィゴッの前に進み出て、花びらを散らして頭を垂れて何事かを祈った。
そして、背に一番深くつき立った銛を引き抜いて、毛皮の男に差し出した。
おそらく海の神、フィゴッの止め（とど）を刺したのが、この男なのだろう。

男は誇らしげに、銛を空に向け、掲げた。
男はそれから、銛を浜に突き立て、腰に刺した刀でフィゴッの口をこじ開け、巨大な舌から小片を削り取った。
そして、それを食べると、交錯唱法で高らかに声を出した。
それが合図だった。
手に手に刃物を持った男女が、海の神に群がって解体を始めた。
数時間後、海の神は血肉はもちろん、骨まで砕かれ欠けらも残っていなかった。
そして、焚き火の周りで宴会が始まった。
火に炙られたフィゴッの肉が、香ばしい匂いで鼻をくすぐる。
至るところで酒盛りが始まる。
踊りは相変わらず終わらない。
疲れ切ったフィレーナとリラは、なんとなく居心地悪げに座っているしかない。
リラのお腹が鳴った。
「わしゃ、ペコンペコン……おいしそうね」
「ああ……でも、いくらなんでも……ご馳走してくれとはいえないよな」
フィレーナは懐から、こちんこちんに固まった焼肉を出して見せた。
数日前、ギャッピーが捕まえてきた鼠を焼いて食べたときに残しておいたものだった。
「これ……食べる？」

「差……つくなあ……鼠と海の神か……」
リラは目いっぱい、溜め息をついた。
そのときだった。
いきなり、聞き慣れた帝国語が耳に入った。
「どうぞ……口に合えば」
目の前に、大きな皿にのった肉の塊が差し出された。
あの口琴を弾いていた若い女が、微笑んでいた。
「あいます。あいます。合わせます。いただきます」
リラは、思わずそう言って皿を受け取った。
けれどフィレーナは、目の前の肉より、女の喋った帝国語が気になった。
「帝国の人……？」
「いいえ……ここは帝国じゃないわ。ここで、帝国の言葉を話せるのは私だけ……。あなたたちも帝国人じゃあないでしょう？」
「どうして……わかるの」
「ここの空気は、帝国の空気ほど純粋(じゅんすい)じゃない。普通の帝国人には、息苦しくてつらいはず……まして、あんなに激しく踊れやしない」
「僕らは……」
「何も言わなくてもいいわ。あなたが、流民(ウオンダーナ)だろうと反乱軍の落ち武者だろうと、私たちには

関わりのないこと。……ここは帝国人は入り込めない保護区ですもの……」
「保護区？」
「帝国自然保護区。帝国がそう決めたの……この星で、昔のままの自然が残っている、たった一カ所の土地だから……帝国は文明に染まらない土地をひとつだけは残しておきたかったんでしょう……もっとも、ここは、北の果てで土地も瘦せているし、とりたてて資源もないし、寒くて住みにくいから、帝国が手を出さないのも無理はないのかもしれないけれど……どっちにしても私たちは、帝国には関わりない暮らしを、帝国ができる何千年も昔からここで続けてきたわ。私たちにはこの星の歴史は関係ない。一年の季節の営みがあればいい。……何千年もそうやって暮らしてきたわ」
「何千年も昔から……？」
「そう、私たちはフィアイ……海の恵みを得て生きる民……」
「フィアイ？」
「たぶん、聞いたことはないと思う。こんな北の果てに来る人はいないし、ここに保護区があることさえ知っている人は少ないと思う。永久に凍っている雪原を越えてくるのだって楽じゃないし、雪原の南には人が入ってくるのを見張っている帝国の北辺警備隊がいるわ。よその人が来たのは、十何年ぶりかしら」
「ここに僕らがいれば迷惑がかかるね」
「迷惑？　どうして？　あなたたちが南の国で何をしようが、ここは北の果て……、私たちは

来るものは拒まず、出ていくものも拒まないわ。ここは、帝国人はだれは住めないし、他の民も、冬になれば何もかも凍りついてしまうこの土地で、狩りだけをして暮らしていかなければならない生活に耐えられはしない。結局、この土地を捨てて出ていってしまうか、寒さにやられて死んでしまう……十何年前かに来た人だって、その年の冬には……」

口琴の女性は、フィレーナが来た丘のほうを見た。

そこには石を積み上げた墓標が並んでいた。

「そして、残るのは私たちだけ……そんなところでも、あなたがここにいたければいればいい。あなたが、いたいだけいてかまわないわ」

「いたいだけいていい……」

フィレーナはいささか拍子ぬけしたように聞き返した。

「問題はあなたたち自身が、ここの暮らしに耐えられるかどうかだけですもの」

肉の塊にかぶりついていたリラが、ぼそりと言った。

「奴隷の暮らしよりはましそう」

「さあ……奴隷のことは知らない……でも文明に慣れた人には、厳しい自然は耐えられないものみたい」

「けど、このお祭り、楽しいよ」

リラは屈託なく言った。

口琴の女は、にっこりと微笑んだ。

「あなたたちの踊りも楽しかった。今日は白夜の祭り……短い夏の始まりなの……当分、夜はこないから、今のうちに長い冬が越せるように貯えなければならない……夏の来たことを喜び、冬が越せるだけの獲物が取れるように神様に祈るの……今日は私たちフィアイにとって一番楽しいお祭りだわ」

フィレーナは頷いた。

「楽しいってこと……僕にもわかる。みんなが喜んでいることもよくわかるよ」

「ありがとう……今日は、めったにいない大きなフィゴッもとれたし、もしかしたら、今年の夏は縁起がいいのかもしれないわ」

「本当にいてもいいの」

フィレーナが聞いた。

「みんな期待しているの。あなたたちを見つけたときから……保護されていたって広くはない土地。同じ血筋の人たち……厳しい自然の中で育つ子供は少ない……フィアイの数は年々減っているの。新しい血が流れ込んで欲しい。それが私たちの願いでもあるの」

フィレーナは、宴に興じる人々を見つめた。

言われてみれば、確かに子供たちの姿は少なかった。

見ず知らずのフィレーナたちすら嬉しい気持ちにさせる、こんな楽しい祭りを持っている人たちにも滅びの時が近づいているのか……フィレーナは寂しかった。

長老格の老人と目があった。

老人は、こっくりと頷いた。
ここに住むことをとっくに認めてくれているようだった。
フィレーナは、軽く会釈してから、老人から目をそらし空を見上げた。
もうとっくに夜のはずなのに白夜の空は明るい。
北もこの緯度（いど）になると、二つある人工の月の軌道（きどう）からはずれ、ここでは本来の月しか姿を見せない。
ひとつの月とひとつの太陽が空に浮かんでいる。
不思議な風景だが、これが本当の姿だった。
きっと冬……夜だけの闇（やみ）には、降るような星が瞬（またた）いているに違いない。
この極北だけにある本来の空。
フィレーナは、そんな空を手放したくなかった。
海に目をやる。
入江には帆船が浮かんでいる。
フィレーナとリラをここに導いてくれた船が、停泊して動く気配はない。
入江の海は、波もなくどこまでも静かだ。
ここが、僕の落ち着けるところなのかもしれない。
フィレーナは、ぽつりとリラに呟いた。
「ここにいたくない？」

リラは、逆に聞き返した。
「ここより他に行くところがある?」
フィレーナは頷いた。
「終わりだよね……旅は」
「いいよ……わたし。ここの踊りの演奏、結構いけるし。海の神って、結構おいしいし……後はいい男がここにいるかどうかだけど……」
リラは、焚き火の周りの男たちをちらっと見た。
「帝国中を歩いて、今までロクなのがいなかったんだから、いまさら期待したってしょうもないし……ねえ」
「そんなこと、僕に振るなよ」
「フィレーナがいいならいいってこと」
口琴の女は二人のやりとりに微笑して言った。
「もしかしたら、あなたたちが来たのもフィアイにとって縁起のいいことかもしれないわね」
フィレーナは、それまで気になっていたことを女に聞いた。
「どうしてあなたは帝国語を……?」
「喋りたくはないわ。帝国語は耳にきれいにきこえないもの……でも、私は、フィアイの部族長の孫……」
リラが呟いた。

「へえ……部族長の……偉いんだ」
女は、肩を竦めた。
「部族長の血筋に生まれだけで偉いと呼ばれるんだったらいいけど、これが実際は楽じゃないんだ。部族長の娘はね、代々……フィラーレって呼ばれてね……帝国の言葉で言えば、海の声ってところかな」
「海の声?……」
「雲や、風や、波の様子を読んで、天気を占(うらな)わなければならないの。狩りで生きる私たちって、その日の獲物が海のお天気次第ってところがあるでしょう。天気予報が、大事なわけ」
「それが、帝国の言葉を喋れるのと関係あるの?」
リラが聞いた。
「昔は天気だけ……海の声だけわかればよかった。でも、今ここは帝国の保護区、帝国の考え方次第で私たちの生活は変わるかもしれない。帝国は私たちにとってお天気みたいなものでしょう……帝国の声もわかる人が必要になったの……でも、自然の恵みだけで生きている私たちには、昔ながらの私たちの言葉だけで十分……狩りをするのに必要なのは弓や槍や銛の道具で、白熱光線(ホワイトレイ)や爆弾(ばくだん)の武器はいらないでしょう?　暗くなればそんなに動き回らないから、電気なんて、月より明るい光なんていらない……自給自足だから、商売や経済なんて関係ない。帝国にあるもので、ここにないものは、私たちにはいらないもの……よけいな言葉が多くて複雑で難しい帝国語なんてここじゃ必要ない……だから、帝国語をわかりたい人なんてだれもいな

い……結局、帝国語の通訳はフィラーレの仕事になっちゃった。
何十年も前から、部族長の血筋の娘は、帝国の北辺警備隊のところで、帝国語の勉強をしなければならなくなったの。
……迷惑なことよね」
「いろんな言葉を知るって悪いことじゃないと思うけれど……」
フィレーナが呟いた。
「言葉だけならね。でも、帝国人は、人間の中に差があるってことまで教えたわ。帝国人は優れていて、私たちは屑のような人間だってばかにしたわ……私たちは、動物と人間にも差があるなんて思ったことはなかったのに」
フィラーレは、焚き火が取り囲んだ円柱を見上げた。
円柱には、動物たちの像が刻まれている。
「私たちにとっては、動物も自然も……私たちに恵みを与えてくれる神様だわ。尊敬しているし感謝もしている。ばかになんかしない。まして、同じ人間同士に差があるなんて、そんな考え、聞きたくもなかった」
そして、吐き捨てるように言った。
「帝国語は嫌い。汚い。話したくない……」
今までのやさしい口調が、嘘のようだった。
フィレーナとリラは、黙るしかなかった。

フィレーナもリラも、フィラーレが帝国の北辺警備隊に言葉を習いにいって、どんな仕打ちを受けたのか見当がついた。

帝国人民（エンパイアラー）が他民族や奴隷（クレチア）に対して持つ差別意識の激しさは、だれより二人が今まで身に受けてきたことだ。

いまさら、互いの受けた傷を曝（さら）け出して、なめあっても、何の慰（なぐさ）めにもならないことが、よくわかっていた。

まして、フィアイの部族長の血筋だというフィラーレにしてみれば、帝国人民（エンパイアラー）から受ける屈辱感は、もともと奴隷（クレチア）育ちのフィレーナなどに比べたら、何十倍も大きいだろう。

フィラーレは、自分の語気の強さに気がついたらしく肩を竦めた。

「ごめんなさい。あなたたちの使っている言葉の悪口を言って……言葉自体には罪はないわよね」

フィレーナは、首を振った。

「言葉にだって罪はあると思う。だって、帝国語は、僕の国の言葉を消してしまった。僕は、僕のふるさとの言葉を話したくても、もう、話せない」

「あなたのふるさとの言葉？」

「うん、フィアイの人たちの言葉に似ていると思うんだ。僕は、フィが海を意味する言葉だって、ことを知っている。僕の名前についている単語なんだ。他にも、意味のわかる単語が幾つもある。だから、僕は帝国語より、なくなったふるさとの言葉に近い、ここの言葉を話せるよ

うになりたい。僕、ここの言葉を教わりたいんだ」
　フィラーレは、フィレーナの顔を、まじまじと見た。
「あなたの名前は……？」
「フィレーナ……海洋民族ではよくある名前でしょ。最近は反乱軍の名前としても流行している」
「ええ……フィレーナの名前は私たちの中にも何人もいるわ。あの凍った船の名もフィレーナっていうの」
「ほんと、ややこしい」
　リラが呟いた。
「フィレーナだらけ……おまけにフィレーナの剣まで名前がフィレーナだもん」
　フィラーレの顔に、驚きが走った。
「剣がフィレーナ！　じゃあ……あなたのふるさとって……」
「フィロセラ……知らないよね……僕が生まれたころ、ほんの少し昔までは確かにあったのに、今はもうほとんどの人の記憶から消えている国さ」
　フィラーレは、ゆっくりと首を振った。
「私たちはしっかり覚えているわ。あの船の言い伝えを。凍れるフィレーナは北の海を、毎年さ迷う。そして、いつか、フィレーナの剣を持ったフィレーナという勇者をここに導くだろう。その者こそ海の王国フィロセラの後継者にして、凍てれるフィレーナを溶かし、大海に漕ぎだ

し、世界の海を救うものなり……やはり、あなたが、そのフィレーナなのね」
　フィラーレは、立ち上がると長老のところへ駆けていった。
　長老はフィラーレから話を聞くと、フィレーナをちらりと見て大きく頷いた。
　そして、立ち上がると、ひときわ響く交錯唱法で歌った。
「フィレーナ・アラ・カンタ……トリ・フィレーナ・アラ・デンタ……マジ・フィフィローラ・アロラ・カンタ……」
　歓声があがった。
　リラが目を丸くして言った。
「これって……なんか大歓迎……？」
　フィラーレが、長老の交錯唱法を帝国語で通訳してくれた。
「フィレーナがやってきた。三つのフィレーナが揃った……本当の海の春がやってくる……」
「三つのフィレーナ？」
　フィラーレは頷いた。
「あなたとあなたの剣とあなたの船」
「僕の船……あれが？」
　フィレーナは、入江の帆船を見つめた。
「ええ……そして、あなたは死にかかった海を、生きものたちが芽生える豊かな春の海にかえる」

そのときだった。
かすかな地鳴りがした。
大地が揺れだした。
「ちょっと、これ、なに……」
リラがフィレーナにすがりつく。
だが、すぐに振動は弱まり、やがて、ぴたりと止んだ。
あわてふためいたのはリラだけで、フィアイの人々は、さっきの地震を気にしている素振りもなく、暖かな眼差しでフィレーナに注目している。
「ここの大地は、生きています。近くに火の山があり、ときどき、ああやって生きていることを知らせてくれるのです。でも、今日は、フィレーナが来たことを歓迎してくれたのでしょう。
フィアイの人々とともにね」
「歓迎してくれる……僕を」
「ええ……私たちはフィレーナを待っていたのです」
口琴と太鼓の音が激しくなった。
フィアイの人々は、焚き火の周りを、今までにまして、熱っぽく踊り始めた。
みんな、喜びを顔にあふれさせていた。
だが、フィレーナは、喜びよりも茫然と立ち竦んでいた。
「どうしたの……？　気分でも……？」

リラが心配して、フィレーナの顔をのぞきこんだ。
「なんでもない……歓迎されちゃったね」
フィレーナは、弱々しく微笑した。
なんでもないはずはなかった。
いきなり、深い穴に突き落とされたような気持ちだった。
ついさっきまで、一瞬ではあったが、フィレーナが夢見ていたのは、フィアイの人々とともに自然に囲まれた安らかな生活をすることだった。
そのためだったら、フィラーレがいうフィアイの新しい血になって、子供を産んでもいいとさえ思った。
もともと、僕は、女だ。リラと子供の数を競争して、たくさん赤ん坊を産んだって罰は当らないはずだ。
子供を産むことが僕の生きる目的になる……。僕は今まで、生きるために無数の命を奪ってきた。……それに比べたら、ここで生きることがどれほど素晴らしいことか……。
この土地で生きる一生に比べたら、剣も帝国も反乱も人類の未来さえ、小さなことに思えた……。
けれど、そんな夢は束の間でしかなかった。
船、剣、フィロセラ、勇者、後継者、海を救う？……救われたいのは僕自身なのだ。
フィレーナという名は救世主でも、帝国に虐げられた人々を救う反乱の指導者でもない。

疲れ果てた足を引きずってここまで辿りついた、性別が雌のただのちっぽけな人間のはずだ。
それなのに、また、フィレーナの名は、僕をどこかに引きずっていこうとする。
目の前に、フィレーナとの出会いを喜ぶ人がいる。
その踊りは心からの喜びに満ちあふれている。
だが……僕は……。
フィレーナは、入江に浮かぶ帆船を見つめた。
溶けかかった船体の氷がきらきらと光っている。
それを、美しいと思う気分にはなれなかった。
フィレーナ……フィレーナか……。
フィレーナは自分の名を何度も呟いた。
フィレーナ……海の魂という名は、これ以上僕に何を望むのか……。
フィレーナは、今まで一番大切にしていた自分の名を、これほどうとましく思ったことはなかった。
呪いたいほどだった。
白夜の入江の海は、何も答えず静かにフィレーナを見返していた。

第3章

さまよえる野生

白夜の祭りは、いつ果てることなく続いていた。

狼犬(ウルフドッグ)ギャッピーは、焚(た)き火の見える岩場で、危険への警戒(けいかい)心を弛緩(しかん)させた、いつにない安堵(あんど)感を感じながらまどろんでいた。

ギャッピーは、以前、放浪(ほうろう)の民と行動を共にしていた。

帝国や流民狩りに追われ、安住の地など望むべくもなく、帝国を漂泊しつづけた。

そして、フィレーナと出会った後の南部海岸地方から北辺の旅を加えれば、ほぼ、帝国の全土を彷徨(さまよ)ったといっても言い過ぎではない。

だが、どの土地も、ギャッピーの危険に対する鋭敏な察知能力を、休ませてくれる安全な土地はなかった。

しかし、この北辺の地は違っていた。

ギャッピーは、フィレーナが、霧の壁を抜けてこの浜に辿(たど)りつく前に、帝国自然保護区の中を偵察(ていさつ)し、ここには、まだ人間に加工されていない自然が残っていること……ここに住む人間たちが、帝国人とは違う人種であること……。狩猟(しゅりょう)用の道具以外の武器を持っていないこと

を知った。

そして、この土地の人々が、温和で純朴で、この地上のなかでもっとも自然と協調している人間……いや、人間というより、人間である前に、この星にいる動物として不自然ではない存在であることを感じていた。

ここの自然の下では、帝国人民も、他民族も、奴隷もない。

そればかりか、人間も動物も植物も、生き物である限り差はなかった。

ギャッピーやフィレーナが、帝国統治下の人間社会に俗されていない、ありのままの存在でいる限りにおいては、なんの抵抗もなく受け入れてくれる土地であるであることに、ギャッピーは気がついていた。

今まで、ギャッピーの彷徨った土地のどこに、これほどギャッピーやフィレーナに対して、恐怖や敵意や疎外や抵抗や蔑視を持たない空気があっただろう。

帝国のほぼ全域を知るだけに、ギャッピーには、フィレーナが安全に定住できる土地はここより他にないと感じていた。

だが、フィレーナにとっては楽園かもしれないこの土地が、狼犬のギャッピーにとっては、絶望的な結果を伝えていた。

生き物にとって楽園であるこの土地にすら、他の狼犬の気配はなかった。

犬はいた。

フィアイの人々に飼われ、雪上の橇を引いたり、狩りを手伝う犬たちだ。

彼らの遠い祖先は、確かに狼だった。
だが、人間に飼われ続けた長い時間は、狼とは似て非なる動物を完成させていた。
犬は、もはや狼ではなく犬なのだ。その犬ですら、愛玩用、狩猟用、警備用等、さまざまに進化し、もはや犬という単純な呼称では呼べないほど分かれてしまっていた。
そして……。
足の裏にまで毛が生えて、氷の上を走っても耐えられるようになった雪上犬は、この北辺の地域で雪上犬という純血種を形成できるまでに進化していた。
雪と氷の世界で群れをなしながら人間と共存できる犬……それが、雪上犬として存在できる必要不可欠な条件だった。
仮に、他の犬や狼との混血ができたとしても、この苛酷な雪原地帯では、純血の雪上犬ほど適応力はなく、生き抜いてはいけない。
たとえ親犬が母性愛から保護しようとしても、結局は他の雪上犬についていけず、成犬になる前に死んでしまうのが常だった。
自然界において、特別の保護がないかぎり、混血や突然変異した動物が生き延びる確率は、非常に低いのだ。
狼犬は、狼が犬に変化していく途中で必然的に生まれた種類ではない。
すでに狼と犬が分かれてしまった後に、誕生した種類だった。
この星で狼が絶滅を危惧された時期に、なんとか狼を存続させようとした人間が、最も狼に

近い遺伝子(いでんし)を持った犬と狼をかけあわせて作り出したものだった。

狼犬(ウルフドッグ)は、狼の強靱(きょうじん)さ、獰猛(どうもう)さ、賢(かしこ)さ……狼の理想的ともいえる特徴を持っていた。

さらに、野生動物にはとうてい住むことのできない、人間世界が作り出した環境(かんきょう)にも適応できる犬の持つ柔軟性があった。

狼犬(ウルフドッグ)はこの星で生まれた最も強い犬科の動物であるはずだった。

しかし、どんなに優れた犬科の動物でも、無理矢理生み出された種には、限界があった。

自然界には、ある地域に住むすべての生物と環境はすべて繋(つな)がり合っているという、生態系というものがある。

その地域に自然にいる生物は、どんな生物であれ、その地域にとってはなくてはならないものなのだ。

生物の繁殖(はんしょく)も減少も、自然の生態系の下でコントロールされている。

だが、もともとの生態系に組み込まれていない異種の生き物が、その地域に無理なく組み込まれることはない。

生態系から弾き飛ばされるか、逆に生態系のバランスを崩(くず)し、その地域の自然そのものを破壊(はかい)するしかない。

ある地域には生態系に組み込まれていない存在なのに、急激に繁殖して、その地域の自然そのものを壊滅(かいめつ)させた最も顕著(けんちょ)な例が人類だといえた。

だが、狼犬(ウルフドッグ)には、生態系のバランスを壊(こわ)すほどの繁殖力はなかった。

本来、野生動物は、混血を望みはしない。混血種の誕生は、特殊(とくしゅ)な場合に限られる。ほとんどの場合が、人間の手によって操作されたものだ。

混血は、犬や猫(ねこ)のような人間に飼われた動物にしか、めったに起こらない。

だが、ひとたび人間に飼われれば、人間の都合で頻繁(ひんぱん)に動物の混血化が進められる。

人間による家畜動物の混血化は急激に行われる。

犬や猫ばかりか、野牛から牛へ、猪(いのしし)から豚(ぶた)へ……人間と生活の場を共存している動物は、みな混血動物といっていい。

飼われているとはいえない鼠(ねずみ)ですら、人間の生活圏(けん)のなかで、野生のさまざまな鼠が混血して家鼠(いえねずみ)やどぶ鼠に進化した。

これも、広い意味で、人間が動物に混血化を促進(そくしん)させた例の一つかもしれない。

けれど、人間の操作による混血であっても、狼犬(ウルフドッグ)は、野生の狼の血を強く引いている。

狼犬(ウルフドッグ)の中に残った野生は、同種の狼犬(ウルフドッグ)との間の繁殖しか望まなかった。

けれど、狼犬(ウルフドッグ)は繁殖に足る絶対数が少なく、結局は近親間の生殖(せいしょく)となり、正常な子供が生まれる率は低かった。

まして、かつて狼が生き、狼犬(ウルフドッグ)が生きていくはずの本来の場である広大な原野を、とっくに人間が破壊しつくした今、狼犬(ウルフドッグ)は、絶滅動物保護を叫ぶ人間の身勝手な思い込みで作られた実験動物でしかなかったのだ。

野生動物は、人間によって作られ育てられたとき、人間と共存もできず、野生にも戻りにく

い動物園の鑑賞（かんしょう）用生物になるしかない。

それでも、数百頭の狼犬（ウルフドッグ）が、人間の保護の下で生み育てられ、狼が絶滅した後の原野に放たれたが、狼が住めなくなった原野に、狼犬（ウルフドッグ）が存続できるはずもなかった。

かといって狼の血を色濃（いろこ）く持った狼犬（ウルフドッグ）に、人間に飼われる生活が向くわけもない。

かろうじて残されているこの星のわずかな自然地帯の生態系にも、新種の狼犬（ウルフドッグ）が食い込める余地はなかった。

人間が狼の代用として作り出した狼犬（ウルフドッグ）は、誕生したときから絶滅を約束された動物にすぎなかったのだ。

だが、ギャッピーは、狼犬（ウルフドッグ）の黄昏（たそがれ）を感じてはいたが、動物本来の繁殖願望までなくしているわけではなかった。

それが、動物の本能とはいえ、頑固（がんこ）なまでに子孫を残したかった。

ギャッピーは、最後の狼犬（ウルフドッグ）にはなりたくなかった。

どこかに、自分と同じ狼犬（ウルフドッグ）がいるはずだ。

ギャッピーの旅の目的は、仲間を捜（さが）し、そして一世代でも狼犬（ウルフドッグ）の血を長く存続させることだった。

だが、どこにも狼犬（ウルフドッグ）はいなかった。

そして、フィレーナに会ったとき、ギャッピーは、フィレーナの中に狼犬（ウルフドッグ）を感じた。

全世界を敵に回したような孤独。そして、戦闘の際に見せる闘士としての動物的な勘（かん）……そ

して、一人ぼっちの寂しさ。
人間の姿をしているとはいえ、時折、どこか遠くを見つめ考え込んでいるフィレーナから流れる波長は、ギャッピーの持つ狼犬のせつなさと同じものだった。
ギャッピーは、フィレーナに仲間を感じた。
しかもフィレーナの中に、雄が守らなければならない雌をも感じていた。
ギャッピーは、本当の狼犬を見つけるまで、雄として、フィレーナを守ろうとした。
少なくともフィレーナが、健やかに休める土地を見つけるまでは……。
ギャッピーにとって、動物の安住の地とは、安心して子供の産める場所だ。
ギャッピーは、世界中のどこより、ここがフィレーナにとって子供を産むに適した場所だと感じた。
それは、ギャッピーの勘が保証していた。
さらに、今まで出会ったどんな人間たちよりも、フィレーナが安心できる仲間と呼べる人間もここにいる。
雄もたくさんいる。
これだけいれば、よい雄を見つけられるだろう。
そして、フィレーナは、強い子孫を産めるだろう。
もう、孤独ではなくなる。
そう感じたとき、ギャッピーにとってのフィレーナは仲間の狼犬ではなく、人間になってい

た。
ギャッピーは、これでフィレーナとの関わりが終わったと思った。
フィレーナは仲間を見つけ、だが……ギャッピーにはいない。
北辺の苛酷な土地ではあっても、それでもこの星では動物にとっての唯一(ゆいいつ)の楽園……ここに狼犬(ウルフドッグ)がいなければ、いったいどこにいるというのか……。
それでも、ギャッピーは仲間を捜し続ける本能を捨てることはできない。
そう、この星に狼犬(ウルフドッグ)がいようといまいと……ギャッピーが、最後の狼犬(ウルフドッグ)であろうとなかろうと……仲間を捜し続けるのが、ギャッピーにとって生きるということだった。
もうしばらく休んで身体(からだ)の疲れが取れ次第、立ち去ろう。
ギャッピーは、そのつもりだった。
だが、周囲は、そうもゆっくりさせてくれなかった。
背後から低い唸(うな)り声が聞こえた。
ギャッピーは、びくとも動かなかった。
とっくに唸り声の主に気がついていたからだ。
それは、フィアイが飼っている雪上犬のリーダーだった。
リーダーの後には十数頭の犬が従っている。
リーダーの唸り声には、明らかに脅(おび)えが加わっていた。
無理もなかった。

ギャッピーの身体は、雪上犬のリーダーに比べて倍ほどもあったのだ。
しかし、縄張りに踏み込んだよそ者を追い払うのは、リーダーの役目だった。
他の獣ならやりすごしても恥じにはならないが、ギャッピーはどう見ても犬の一種だ。
リーダーは、逃げるわけにはいかない。
臆病者の烙印を押されたら、リーダーの座はおろか、仲間外れにされてしまう。
リーダーの唸りは悲壮だった。
ほとんど、死を覚悟しているといってよかった。
ギャッピーは、立ち上がるとくるりとリーダー犬を見た。
別に威嚇する気も、まして挑発する眼差しでもなかった。
ただ、相手がどんな犬なのか、漫然と見ただけだ。
それでも、数知れない戦闘をくぐり抜けたギャッピーの眼光は、相手を射竦めるに十分な迫力がある。
リーダー犬は一瞬すくみあがる。
きりっと上に巻いていた尾が、かすかに緩んだ。
雪上犬にとって、巻いた尾は気丈さの現れだった。
尾が垂れたときは、自他共に降伏を宣言したことになる。
だが、リーダー犬には、このあたりの雪上犬を率いているプライドがあった。
ギャッピーの威圧を押し退けるように、垂れかかった尾をくるりと巻いた。



雪上犬のリーダーは統率者として、倍以上もあるギャッピーに唸り声を上げた

けなげにもリーダー犬の毛が逆立つ。

頭を低く垂れ、ギャッピーの眼を睨みかえす。

戦闘態勢だ。

勝てないとわかっていても戦うつもりなのだ。

ここで、もしも、ギャッピーが応戦の唸り声を上げれば戦闘開始だ。

リーダー犬は飛びかかり、そして……たちまちのうちにギャッピーの牙で、首筋を引き裂かれて息絶えてしまうだろう。

おそらく、リーダー犬の後ろにいる雪上犬たちも、いや、なによりリーダー犬自身が、それを予測していたに違いない。

だが、ギャッピーは、黙って犬たちを見回しただけだった。

雪上犬たちにはよけいなおせっかいかもしれなかったが、ギャッピーは、もし自分がリーダー犬を倒したら、次にどの犬がリーダーになるかを考えていた。

ギャッピーにとって、自分に刃向かってくるリーダー犬はなかなか見どころのある犬に思えた。

この犬に代わりうる器の犬が、いるかどうか気になったのだ。

しかし、犬たちはリーダー犬の後ろで、脅えきっていてリーダーに頼りきっているのがよくわかった。

リーダー犬を押し退けるような器量のある犬は見当たらなかった。

もし、リーダー犬を殺せば、この雪上犬の一団の統率がばらばらになってしまうのは目に見えていた。

たとえ、人間に飼われているとはいえ、優秀なリーダーを失った犬の一団が、この厳しい氷原地帯で無事に生き抜いていくことは難しい。

たとえば、氷の上で狩りをするとき、間抜けなリーダーの判断次第では、犬の一団、みんなが氷の割れ目に落ちて全滅（ぜんめつ）してしまうこともありうるのだ。

ギャッピーにとって、目の前のリーダー犬を殺すのはわけもない。

だが、ここにいる雪上犬すべてを混乱させたくはなかった。

そして、さらに、ギャッピーにとって最悪の事態が頭に浮かんだ。

犬や狼の群れの世界では、一番強いものがリーダーになる。

もしも、ギャッピーがリーダー犬を殺せば、犬たちはギャッピーを、次のリーダーに選ぶかもしれない。

犬たちは狼ほど、種族の別に対して節操はない。

犬の一種でさえあれば、リーダーとして迎えかねない。

そして、犬ならば、リーダー犬の地位を喜んで受け入れるはずだった。

だが、ギャッピーは狼犬（ウルフドッグ）だ。

犬のリーダーになる自信などなかった。

そして、なにより仲間の狼犬（ウルフドッグ）を捜し狼犬（ウルフドッグ）の子孫を残したかった。

ギャッピーの滅(ほろ)びゆく狼犬(ウルフドッグ)の血は、犬との混血を求めなかった。
ここで犬たちに関わりを持ちたいとは思わなかった。
ギャッピーは、後ずさった。
それは、犬の世界では気圧(けお)された証拠だった。
リーダー犬は、勝ち誇って吠(ほ)えた。
そして、飛びかかった。
ギャッピーは軽々と身を躱(かわ)した。
だが、逃げた仕種には違いない。
それまで脅えていた雪上犬たちも勢いづく。
リーダーに続け……。
十数頭の犬たちが牙をむいて、ギャッピーに襲いかかった。
だが、どの牙もギャッピーの身体にはかすらなかった。
雪上犬たちが、どんなに機敏に動いたとしても、ギャッピーとの実力差は明らかだった。
このままでは、長い白夜が終わって冬になっても、犬たちはギャッピーに触れることすらできないだろう。
ギャッピーにとっても、戦闘能力が子供のような犬たちの相手はばかばかしかった。
ギャッピーにしてみれば、ここにいる犬たちを黙らせるなど、数秒でできることなのだ。
だが、一度戦うのをよそうと決めた以上、牙を剝(む)く気はなかった。

しかし、吠えたてる犬たちはうるさく、四方から飛びかかるのをよけるのも面倒だった。
ギャッピーは、岩場から逃げることにした。
もともと、ギャッピーが雪上犬の縄張りに入り込んだのがいけないのだ。
ギャッピーにしても、犬たちの縄張りなどどうでもいいことなのだ。
ギャッピーが犬たちの縄張りから出ていけば、騒ぎは収まるはずだ。
フィレーナには仲間ができたようだし、そろそろ潮時だとギャッピーは思った。
犬たちの吠え声に人間たちが気づいてやってきたら、もっと面倒なことになりそうだった。
ギャッピーと雪上犬たちの争いがもとで、せっかく仲良くしているフィレーナと人々の間が気まずくなるのもごめんだった。
ギャッピーは、逃げることにした。
フィレーナとは、これが別れになるかもしれないが、構わなかった。
それぞれいく道が違ってくれれば、黙って消えるのが、狼らしい別れだった。
狼の別れに愁嘆場（しゅうたんば）は似合わない。
ギャッピーは、後ろも見ずに走り出した。
犬たちは、さらに勢いづいて、ギャッピーの後を追った。
ギャッピーは駆けた。
どれほど走ったろう。
緑の原野が雪原に変わっていった。

花の咲き乱れていた比較的温かい地域は、入江の周りのほんのわずかな部分だった。
どこまでが犬たちの縄張りかは知らないが、リーダー犬に率いられた雪上犬たちはしつこく追ってくる。
しだいにギャッピーは、犬たちの追跡に辟易してきた。
ギャッピーは、足の早さも、走りの持久力も、雪上犬より遥かに上だった。
だが、雪上犬は雪や氷の上を走るのに適した足を持っている。
雪上犬だけが持つ特徴……足の裏を守る毛は、寒さに強く、鋭利な氷の破片から足を保護してくれている。
環境による身体の進化は、無駄なものを作らない。
ギャッピーの身体は並の狼よりもはるかに強靭で俊敏な身体になっていたが、それは大原野を走る狼の進化だった。
そして、人間の自然への侵入で原野も平原も少なくなった今は、ギャッピーの狼犬としての優れた特徴はほとんど無用の長物になっていた。
ギャッピーの足は、冷たさに痺れ、氷の破片で切れ、血塗れになっていた。
走るのが辛かった。
ギャッピーは、突然、絶望的な気分に襲われた。
狼犬は、狼の血を引くがゆえに自然を求め野生に生きる本能を持っていた。
だが、今やこの星に残された自然は、この北辺の雪と氷に覆われた土地しかない。

その環境で、のびのびと走ることのできない自分はなんなのだ。

自分の戦闘能力は、今、自分を追いかけている犬たちのような小粒の相手をするためにあるのではない。

鹿や馬や牛のような大きな獲物を狩り、熊や虎のような猛獣から群れを守るためにあるはずなのだ。

けれど、この星に野生の鹿も馬も牛ももういない。

戦うべき野生の猛獣も、見つかりはしない。

守るべき群れもいない。

ギャッピーが、生まれてから戦った覚えのある動物は、人間だけだった。

数えきれないほどの人間と戦い、命を奪ってきたが、それが、野生の狼の本来の敵だったろうか……。

ギャッピーの牙は人殺しの道具ではない。

人殺しは、人間が人間で作った道具でやればいい。

狼の戦いの場は自然の原野だ。

能力を発揮すべきなのは狩りにおいてなのだ。

だが、その狩りにおいてさえ、この北辺の雪原に細々と生きる小動物を狩るには、ギャッピーのような強力な戦士は必要ない。

雪の上を自由に駆け回る雪上犬こそ、この環境に最も似合った狩人なのだ。

ギャッピーは、雪上犬と出会ったときにはまるで感じなかった敗北感を味わっていた。
雪上犬に負けたとは思わない。
狼犬（ウルフドッグ）の存在自体が、この環境に無価値なのだ。
自然に生き野生で生きていたい生き物が、自然から野生から、もういらないと宣告されたようなものなのだ。
ギャッピーは、今、自分の存在のこの世界での無駄さを、本能的に悟（さと）った。
無駄なものの生存を、自然が許してくれるはずはない。
仮にギャッピーが、子孫を作り、一生を無事に終えたとしても、次の世代の生存を自然環境は許しはしないだろう。
もともと狼犬（ウルフドッグ）が作られたとき、原形の狼は絶滅寸前だった。
人間によって変えられたこの星の環境は、狼を必要としなくなっていたのだ。
その後の人間による、安易な動物保存主義で狼のコピーとして作られた狼犬（ウルフドッグ）は、狼がこの世界で生存できない生物である以上、存在する意味のない生物だったのだ。
……この世界に存在する必要のない生き物……
ギャッピーの本能が、囁（ささや）いた。
もうこの星には狼犬（ウルフドッグ）の仲間など一頭もいない……いても意味がない。
絶滅した生物に似せたものは、しょせん、絶滅する運命しかない。
ギャッピーは、身体からすべての気力が失せていのを感じた。

子孫を残したいという願いにも似た本能も消えていく。

ギャッピーは、立ち止まった。

ゆっくりと、追ってくる雪上犬の方角を見た。

足を痛めてまで逃げ回ることがばかばかしくなった。

子孫を残す望みにすがっていたからこそ、自分の身の安全を最優先させた。

だが、その望みが断たれたとき、ギャッピーは狼犬(ウルフドッグ)本来の姿に戻っていた。

ギャッピーの中には戦士としての本能が、ふつふつと沸(わ)いてきた。

だからといって、もちろん、ギャッピーは動物だ。

人間のように、絶望による焼けっぱちな気分が、勝ち目のない戦いをさせるような無謀(むぼう)さは持ってはいない。

多少の怪我(けが)は覚悟しても、勝てると感じたから立ち止まったのだ。

ギャッピーは、もはや、追っ手に容赦(ようしゃ)を加える気はなかった。

雪上犬のリーダー犬も、ギャッピーの様子を見て走りを止めた。

他の犬たちも急停止する。

リーダー犬は、ギャッピーの気迫から、今までにない本気を感じた。

リーダー犬は冷静だった。

追跡しながらも、ギャッピーの戦闘能力が、計り知れないことを読んでいた。

ギャッピーが死にもの狂いになれば、今の追っ手の数では相手にならないのを知っていた。

だから、ギャッピーが縄張りから消えてくれれば、それ以上の追跡はやめる気だった。

ギャッピーには四肢の苦痛を強いた逃走も、雪上犬には、相手に逃げる余地を残した余裕のある追跡だったのだ。

だが、ギャッピーが決戦を決めた以上、リーダー犬も引きさがれはしない。

味方の損害を覚悟しても、よそ者を排除せねばならない。

リーダー犬もまた、決戦を決意した。

そして、当然のように勝てる手を打った。

リーダー犬は、ギャッピーを横目で睨みながら遠吠えをした。

吠え声は、雪原にこだました。

すぐに、別の犬の声が、立て続けに、それも四方から聞こえてきた。

そのとき初めて、ギャッピーは、相手のリーダー犬の、個体としての戦闘能力ではない、もう一つの戦闘能力を知った。

それは、文字どおり一匹狼のギャッピーには、計り知れなかったものだった。

リーダー犬の持つ、群れを率いる統率者としての能力だった。

ギャッピーは、雪上犬のリーダーを甘く見過ぎていたのだ。

あっという間に、雪原に無数の黒い点が現れた。

この白い原野のどこに隠れていたかと思えるほどの数の犬たちだった。

みるみるうちに、追っ手の雪上犬は膨れ上がった。

なかば呆然とそれを見ていたギャッピーは、自分の勝ち目がほとんどないのを悟った。
しかし、逃げようとは思わなかった。
ギャッピーは、久しぶりに興奮している自分を感じていた。
自分がやられることよりも、この雑魚どもを何頭倒せるかに思いをはせた。
身体中を戦闘にかりたてる血が、逆流していくのを感じた。
毛が逆立った。
ギャッピーは、牙を剝き、雪上犬の真ん中に飛び込もうと身構えた。
そのときだった。
集合した雪上犬の後部で悲鳴が上がった。
雪上に、血が飛び散った。
食いちぎられた、雪上犬の首が飛ぶ。
雪上犬の群れが、大きく動揺する。
さらに、一頭、二頭……、前足や、胴体を引き裂かれた雪上犬が転がった。
ギャッピーの飛び込む前に、何かが、雪上犬たちの背後から襲いかかったのだ。
それは、ギャッピーと同じくらいの大きさの獣だった。
雪上犬たちは、先を争って獣から逃げ、遠巻きにした。
牙の交錯する音、骨のかみくだかれる鈍い音がした。
獣は、瞬時に五頭の雪上犬を骸にしていた。

それは、ギャッピーが、いままで見たことのない獣だった。

頭は返り血を浴びてどす赤く汚れていたが、見開かれた二つの青い目は、ギャッピーが今まで見たどんな獣よりも鋭く光っていた。

その目の持つ孤独は、ギャッピーより冷たかった。

どんな狼や犬でも持っている柔らかさがその目にはなかった。

けれど、その獣の目は狂気に満ちてはいるものの、だれも寄せつけない気品のようなものがあった。

明らかにそれはギャッピーや雪上犬と違う猫科のものだった。

だが、飼われている猫の、媚びるような狡猾さはなかった。

それは、飼われていない野生の猫だった。

それも、大型……雪よりも白く輝く毛皮に見事に黒い斑点が目立っていた。

ギャッピーが、滅びゆく犬科の末期に現れた種なら、その猫は、数百年前に絶滅していたはずの古い種といえた。

本来、猫科は、温暖な地域もしくは熱帯を生息地にする動物だ。

新種には、家の中のぬくぬくとした暖房の前で、惰眠する小型のものが多い。

だが、きわめて少ない種類の猫科の猛獣が、厳しい寒地帯に住んでいた。

虎と豹の一種だ。

虎は毛皮と剝製を残すだけですでに滅びていた。

狼犬と同じように、虎が減少した際に猫科の猛獣も、虎を獅子や豹と掛け合わせた虎獅子や虎豹が、さらに、文字通りの虎猫すら頻繁に作られたが、人間の支配する社会で狼犬ほどの適応能力さえ見せられなかった。

だが、古くから絶滅を懸念されながら、皮肉にも棲息地が、人の繁殖しやすい森や平野でなく、不毛に思える高山や凍土だったために、虎や獅子よりも生き残った豹がいた。

それが俗に雪豹といわれる猛獣だった。

昔から、たいした繁殖もせず、細々と生き長らえてきた種は、かえって絶滅期には強い。帝国の記録にすら、一頭の確認もされなかった雪豹が、この北辺の保護地区では、奇跡的に存続していたのだった。

だが、今、雪上犬の中に飛び込んだ雪豹は、もしかしたら、この星に生きていた雪豹の最後の一頭だったかもしれない。

いくら、犬が好物だからといって、これほどの数の雪上犬に襲いかかるのは、自殺行為だ。動物の本能として常軌を逸していた。

よほど、飢えていたに違いない。

そして、狩りから生きて帰っても守るべき家族がいないのかもしれない。

孤独と空腹が、めったにいない犬の大集団を見たときに、本能の軌道を脱線させたのかもしれなかった。

雪上犬たちの唸り声も気にかけず、犬をむさぼった雪豹は、ふっと頭を上げた。

見つめているギャッピーと目があった。
雪豹の目からしだいに狂気が引いていった。
孤独と孤独が通いあった。
ギャッピーは、そのとき、雪豹が笑ったような気がした。
それは絶望の苦笑いに思えた。
見つめ返すギャッピーの表情もまた、雪豹には笑い顔に見えたかもしれなかった。
その瞬間を、雪上犬のリーダー犬は見逃さなかった。
仲間を食いちぎった雪豹の喉元に、リーダー犬は食いついた。
さっき、浜辺の岩場でギャッピーに飛びかかった動きとはまるで違っていた。
怯えも戸惑いもなかった。
仲間を殺されたリーダー犬の、必死が見て取れた。
ギャッピーは、唖然としてリーダー犬の動きを見た。
勇敢かつ機敏だった。
さっき、リーダー犬にこの動きがあれば、ギャッピーも攻撃を無傷で避け切れたかどうかわからなかった。
二度、三度、雪豹はもがいた。
しかし、リーダー犬は喉元に食らいついたまま離れない。
雪豹はなぜか、すぐにもがくのをやめた。

そして、じっとギャッピーを見つめた。
その目に食いつかれた痛みは見られなかった。
ただ、仕方がないんだ……と言っているかのようにやるせなかった。
雪豹は、滅びを認めていた。
命のあきらめがあった。
次の瞬間、雪上犬たちが雪豹に殺到した。
雪豹は、動かなかった。
犬たちの牙になすがままにされていた。
白に優雅(ゆうが)な斑点が見事な毛皮が、牙に蹂躙(じゅうりん)され血に塗(まみ)れていく。
雪豹は、呻(うめ)き声ひとつ洩(も)らさなかった。
孤独な死が、そこまで迫っていた。
ギャッピーは、じっとその死を見取っていた。
雪豹と同じ死が待っているのを知りながら、逃げようともしなかった。
ギャッピーもまた、仕方がないんだ……と、思っているのかもしれなかった。
これが、生きもの同士の生存競争の、勝つものと負けるものの姿なのだ。
だれにも文句の言えない自然の掟(おきて)なのだ。
ギャッピーは、やがてくるだろう自分の滅びも雪豹と同じように本能的に認めようとしていた。

そのときだった。
鈍い音が空気を揺（ゆ）るがした。
一瞬、雪上犬たちは雪豹への攻撃をやめ耳を澄ませた。
何かがこちらに飛んでくる。
雪上犬にもそれはわかった。
だが、なんであるかは理解できなかった。
自然保護区で生まれ育った雪上犬たちが知るはずがなかった。
知っているのは人間同士の戦いを嫌（いや）になるほど経験しているギャッピーだけだった。
迫撃砲（はくげきほう）の砲弾（ほうだん）……。
それも、白熱光線（ホワイトレイ）を使わない旧式の火薬を使ったものだ。
ギャッピーは、四肢の痛みも忘れ、その場を飛びずさった。
雪原に砲弾が炸裂（さくれつ）した。
雪豹もろとも雪上犬たちはふっとんだ。
かろうじて、直撃を受けなかった犬たちは、くもの子を散らすように逃げた。
その一頭一頭を、今度は銃弾が射ち倒していく。
それも、人間の武器にしては旧式の機関銃だった。
ギャッピーは、素早かった。
最初の迫撃砲で雪原に開いた穴に飛び込み、おり重なっている雪上犬の屍体（したい）の間に身を潜め

た。
人間の戦場での長い暮らしで得た知恵だった。
銃弾を知らない雪上犬たちは、うろたえあわて、次々に銃弾の犠牲になっていく。
やがて、機関銃の銃撃がやんだ。
硝煙の立ち込める雪原は、射ち殺された雪上犬の血と動けなくなった犬たちの断末魔の呻き声で埋めつくされた。
やがて、防寒具と防寒仮面をつけた数人の帝国兵が、雪上車に大きな橇を引いた装甲雪上車に乗って現れた。
そして、倒れている雪上犬たちの近くまで行き、装甲雪上車から降り立つと、まだ息のある犬たちに止めの銃弾を射ち込みはじめた。
息が絶えたのを確認すると、屍体を次々に橇の上に乗せていった。
帝国兵の一人が電算機で、犬の数を計算した。
「四十六頭、これで、野営地の一カ月分の蛋白質は確保した」
もう一人の帝国兵が機関銃の弾倉を玩びながら言った。
「弾が大きすぎやしないか……これじゃ、犬っころの肉まで吹き飛ばしちゃって、実入りが少ないし、第一血塗れで汚いぜ」
「これが、旧式の火薬式銃で使える最小の弾だ」
「光線銃の目盛りを最小にすりゃ、犬っころをショック死させて、肉に傷をつけずに手に入れ

ることができるぜ」

「おい、おれたちのやっていることが、法律違反の密猟だってことを忘れるな。光線のエネルギーが探知されたら、こちらが死刑で、蛋白質にされちまうぜ。なんたって、ここは自然保護地区なんだからな」

「なにが、自然保護だ……帝国は人間と動物のどっちが大事だと思ってやがるんだ」

「上層部はおれたちを人間とも動物とも思ってねえよ。北の端っこに置いた将棋の駒さ。反乱騒ぎでぐちゃぐちゃのこのご時勢だ。おれたちなんざとっくに忘れられているよ。この犬っころ一匹ほども気にかけちゃいまいよ」

帝国兵は、雪上犬の屍体に唾を吐きかけた。

＊

彼らは帝国の北辺警備隊の一員だった。

警備といっても、帝国の支配が確立した今は、彼らの北には不毛の北極点しかなく、事実上の任務は自然保護区の管理しかない。

その自然保護にしても、わずかに残されたにすぎない北辺極地の自然は、侵すべき価値もなく、足を踏み入れるものもめったにいなかった。

だから、警備用の武器も旧式なものが配備され、それで十分過ぎるほどだった。

なにしろ、武器を使わなければならないような戦いは、帝国成立以後、この地でただの一度も起こらなかったのである。

仮に、流民や、犯罪者、反乱逃亡者がこの地に紛れ込んで来ても、武器より先に、苛酷な自然が処分してくれていたのだ。

長い間、この地区の北辺警備隊は、帝国軍人にとって、ただ漫然と任務期間を暮らすだけに存在している帝国軍職の、いわば壁ぎわ……離れ小島だった。

その任務期間にしても、ほとんど無価値に近い土地だけに、この地に赴任してくる軍人そのものが、中央や地方局で不要視された人物か左遷された者から選ばれた独身者だったから、二度と前の職場に戻れるはずもなかった。

この地は、帝国軍職にとっても北辺の僻地だったのだ。

何もすることのない職場は……この地の帝国軍人にとって、数年前までは、出世欲や豊かな暮らしさえ望まなければ、それはそれなりに住みやすい場所だったかもしれない。

おとなしいフィアイが反乱を起こす危険はないし、欲求不満解消用の接待用女奴隷も、定期的に入れ替えて送り込まれていたから、今、帝国内地で頻発する反乱に戦々兢々となっている他の帝国軍に比べたら、よほどのんびりして幸福なほうだといえたかもしれなかった。

だが、ここ一年で、様相は一変した。

各地の反乱は、北辺警備隊への補給路を断ってしまった。

何度、帝国の中央に補給を要請しても、帝国軍にとって重要地点ではない北辺への危険な物資輸送は真剣に行われない。

反乱軍が北辺のどこかを占拠でもしてくれれば、帝国軍中央も手を打ってくれるかもしれな

いが、どの反乱軍も、不毛の極地にやってはこない。

再三の補給要請にもかかわらず……北辺警備隊への帝国中央の答えは……「ただ今、補給準備中……そのまま待機されたし」の、一点張りだった。

文字どおり、北辺警備隊は、鳥も通わぬ無人島に取り残されたようなものだった。

やがて、北辺警備隊の物資は底をつき、食糧難が襲ってきた。

北辺警備隊は、中央に対して、「自然保護地区で、食物採取をさせろ」……という食糧現地調達の許可を求めた。

しかし、中央の答えは冷たかった。

「北辺の自然保護は絶対至上命令……自然保護の対象であり、生態系の一環であると見られるフィアイの民以外の人間は、何人たりとも、保護地区内の自然を侵してはならない……違反するものは、帝国軍一等刑罰に処する」

帝国軍一等刑罰は、軍法会議なしの問答無用で軍職を剝奪され、家族縁者への通達もなしで、処刑されるというものだった。

北辺警備隊の上層部は戦慄した。

自然保護が絶対至上命令であることは事実だったが、それが、自らが飢えて、生存が危うくなった現在ですら、その違反が帝国軍一等刑罰にあたる大罪になるとは思ってもみなかったのである。

侵略に明け暮れる帝国の勃興から現在まで、帝国の政策に、敵を倒し屈伏させることには夢

中になったとしても、自然保護が重要視されたことはなかったはずなのだ。
北辺警備隊の隊長は、血を吐くような思いで通信を帝国軍通信回路に流した。
「帝国軍は、枯れかかった野草のために、我を見放すか……痩せた野鼠のために、我に死ねと言うのか……されば、北辺警備隊は、腹を満たして後、果てるなり」
決して、文才があるとはいえない北辺警備隊隊長の、血涙を込めたつもりの通信だったが、早い話が、食料が補給されなければ、絶対至上命令に逆らっても、保護地の動物や植物を採って調達するという脅迫でもあった。
翌日、北辺警備隊隊長は、自室の寝台で心不全を起こし冷たくなって発見された。
しかし、彼の命懸けの要求は、帝国上層に届いたらしく、一週間後、反乱軍の制圧地帯を帝国の一個師団が突き崩し、一年分の補給物資が届いた。
だが、一個師団が再び内陸部の反乱地帯に戻った後、北辺警備隊には、前任の隊長のように警備隊全体の今後を憂慮する優秀な指導者はいなかった。
北辺警備隊の上部階級は一年後、反乱が拡大し、新たな補給の来ないときのことを考えた。
……万が一のため、この一年分で、五年は生きぬこう。
仮に一年後、補給が来てもそれはそのまま、貯えになる。
結局、一年分の物資は、警備隊の限られた上部階級に搾取独占され、末端の兵まで行き渡らなかった。
末端の兵士は飢え、それでも絶対至上命令はこの北辺警備隊で生きていた。

て処分された。
保護地区で獲物を獲った末端の帝国兵は、絶対至上命令どおりに、ただちに上部階級によっ
それでも、末端の兵士は密猟をやめるわけにはいかなかった。
そして、ギャッピーが、雪上犬に追われフィレーナと別れたこの日、ついに北辺警備隊の一支隊である雪原野営隊が、隊ぐるみで申し合わせて、密猟を始めたのだった。

＊

兵士たちは、意外に多かった獲物の数に満足していた。
雪原野営隊だけなら、一カ月は持ちそうな量だ。
橇に乗せた他にもまだ、雪上犬の屍体は山ほど転がっていたが、永久雪原のこの土地では腐ることもなさそうだった。
北辺警備隊の駐屯地から離れたこの雪原まで、他の部隊がやってくる心配も当分ない。
「早く焼肉にして食ってみようぜ。犬を食うのは初めてだ」
雪上車の傍で火が焚かれ、あたりに、毛皮と油の燃える煙がたちこめた。
帝国兵士は、獣を解体する方法を知らない。
肉といえば、すでに加工され缶詰か真空パックになったものしか知らないのだ。
だから、帝国兵士たちは焼肉といっても、雪上犬の屍体を集めて、無造作に食用油をかけ火をつけただけだった。
油と毛の燃える匂いは、いくら嗅覚が発達していない帝国人にとってもたえられるものとは

思えなかったが、飢えた兵士たちの食欲を減退させる力はなかった。
まだ、ろくに焼けてもいないうちに、先を争うように試食が始まった。
ここしばらくは、栄養剤と粗末な蛋白固形食しか口にしていなかった兵士たちには、犬の肉は硬すぎた。
栄養失調で、弱った歯茎から、歯がぽろぽろと抜け落ちた。
それでも、兵士たちは黙々と顎を動かし続けた。
歯茎から出た血で、口元を血塗れにしながら食べる姿は、肉食動物のどんな獣よりも醜くおぞましかった。
だが、そんな兵士たちの、夢中で肉をむさぼる手が一瞬止まった。
たちこめた煙の向こうから、空気を張り裂くような吠え声が聞こえたのだ。
その声をギャッピーもまた、おり重なった雪上犬の屍体の間に身を伏せながら聞いた。
ギャッピーは、頭を上げ声のほうに目をやった。
煙のなかに犬の影が見えた。
それは、あのリーダー犬だった。
迫撃砲で前の片足は吹き飛び、尾も千切れていた。
頭の三分の一はえぐりとられ頭蓋骨が見えていた。
だが、三本の足でしっかりと立ち、帝国兵の焚き火に向かって吠えていた。
それは、仲間を銃や砲弾という理不尽な武器で一瞬のうちに殺されたリーダー犬の、悲痛な

抗議だった。

兵士たちは、唖然として幽霊でも見るような顔で立ち上がった。

リーダー犬は、そんな兵士たちを睨みつけた。

兵士たちは怯えて、銃を構えた。

リーダー犬は、さっきの帝国兵の攻撃で、銃というものがどんな武器なのかもう知っているはずだった。

銃が火を吹いたら、こちらの命がない。

今は、なによりもまず逃げるべきときなのだ。

だが、リーダー犬は、臆す様子も見せず、唸り声を上げた。

三本の足で、よろけながら兵士たちに向かって走り始めた。

……よせ……やめろ……

ギャッピーは、リーダー犬に叫びたかった。吠えたかった。

だが、ギャッピーが吠えたところで、リーダー犬が、帝国兵への攻撃をやめるはずがないのもわかっていた。

雪上犬は、この雪原に生きる限り、雪豹や狼犬はおろか、どんな動物よりも存続する適性のある生きもののはずだった。

この土地の自然は、環境は、それを許してくれるはずだった。

しかし、銃器という自然の中にあるはずのないもの……あってはならないもので、雪上犬た

ちは、無造作に抹殺されてしまった。
リーダー犬は、今、怒りの塊だった。
この雪原に住む生きものすべての怒りを、身体中から吹き出させていた。
そして、次の瞬間……その思いとは裏腹に、あまりに簡単な乾いた音がぱさぱさと響いた。
銃声だった。
数発の銃弾を食らって、リーダー犬の身体は、宙に舞い雪原に落ちた。
即死だ。
ギャッピーは、身体中の力が抜けたように横たわった。
ふと、横を見ると首だけになった雪豹が転がっていた。
喉元には、リーダー犬の牙の跡が残っていた。
雪豹の、見開かれた目は虚ろだったが、まだ、あのリーダー犬よりもましだったかもしれない。
少なくとも、この雪豹の命を奪ったのは、同じ動物の雪上犬だったのだ。
だが、その美しい斑点のある身体を粉々にしたのは、明らかに人間の砲弾だった。
ギャッピーの目に光が宿った。
ギャッピーの目に、あのリーダー犬と同じ怒りが燃えていた。

＊

そして……。

雪上犬を銃器で狩ったあの帝国兵たちは、だれも野営地に帰り着かなかった。

数日、続いた吹雪の後……行方不明者を捜索（そうさく）に出かけた雪原野営隊は、雪に埋もれた雪上車と橇を発見した。

橇には何頭もの雪上犬の屍体が乗せられていたが、雪上車には人の姿はなかった。

やがて、付近の雪の中から、一人また一人と帝国兵の屍体が発見された。

全部で七人いた。

あの日、密猟に出かけた人員のすべてであることが、雪原野営隊を戦慄させた。

密猟は隊ぐるみで了解（りょうかい）したことだった。

だが、いったい何が密猟の七人を屍体に変えたのか……。

どの屍体も喉元を一撃で切り裂かれていた。

狼犬（ウルフドッグ）の戦闘能力は相手が人間のとき、最大に発揮される。

音もなく背後から忍（しの）び寄り、目にも止まらぬ速さで喉（のど）を食い千切るなど朝飯前のことだった。

ギャッピーは、雪上車の帝国兵を、雪上犬の吠え声で一人ずつ誘（おび）きだし、その喉を食い破ったのだ。

どの兵士も、銃の引き金を引く余裕はなかった。

特に最後の二人は、しだいに減っていく仲間の数に怯え発狂し、ギャッピーが呼びもしないのに、雪上車から逃げだしてきたから、一番簡単に始末できた。

屍体を発見した雪原野営隊のだれも、それが一頭の狼犬（ウルフドッグ）の仕業とは思わなかった。

凍りついたその傷跡は、とても牙で裂かれたようには見えず、まるで、刃物でえぐられたように思えた。
まず考えられるのは、橇に残された獲物が雪上犬だったことから、それを飼い慣らしているフィアイの民と衝突が起きたのではないかという懸念だった。
七人の喉首の傷は、フィアイの民が持っている鉄や石や動物の牙で作った刃物の跡のようにも見えた。
いくら、おとなしいフィアイの民といえども、飼っている犬を大量に殺されれば、怒って報復に出ても当然な気がする。
それに、北辺警備隊の帝国兵たちは、フィアイの民を、保護区の人間だからといって、優遇していたわけではない。
むしろ、人間とは思わず、獣のように侮辱して扱うのが常だった。
たまに居留地に通訳の勉強に来るフィアイの女性など、ひどい扱いで、接待用女奴隷（エンターテインメントクレチア）以下の嫌がらせをされるのが普通だったのだ。
フィアイの民と帝国人の関係は、保護者と被保護者というより、フィアイの民の我慢によって辛うじて成り立っているといってよかった。
フィアイの民はどう思おうと、少なくとも、帝国兵は、フィアイの民が帝国に反感を持ってもおかしくないと考えている。
保護区とはいえ、檻のような北の地域にフィアイの民を押し込んだのは帝国人なのだ。

かといって、彼らは帝国上層から自然保護法で守られてもいる。
雪原野営隊の面々は、事件の処理に困惑した。
七人もの犠牲者を出しては、北辺警備隊の駐屯地に報告しないわけにはいかない。
こちらが雪上犬を密猟したとは口が裂けても言えない。
一人二人ならともかく、七人ともなれば、雪原野営隊全体の責任も問われかねないのだ。
ともかく、今は食糧難なのだ。
北辺警備隊の上部階級は兵士の数を減らしたがっている。
絶対至上命令違反は、処刑……。
下級兵士を口減らしする願ってもない口実を、上部階級に与えることになる。
結局、フィアイの民の雪上犬管理の不手際で、獲物と帝国兵を間違えた雪上犬の群れに襲われて雪原野営隊の七人は死んだことにした。
事実、七人の喉の傷は犬に噛まれたと見えないこともない。
死んだ雪上犬は、七人が抵抗の際、やむを得ず殺したことにする。
これは、雪上犬が起こした事故なのだ。
こうすれば、フィアイの民も帝国兵を殺したことにはならず、殺人者を帝国に差し出さずに済む。
フィアイの民も帝国との間に、あえて抗争が起こるのを望みはしないだろう。
雪原野営隊は、この密猟事件の被害者を雪上犬から帝国兵にすり替えることで、円く治めよ

うとした。

北辺警備隊は、雪原野営隊の報告を了解し、帝国軍中枢に通信した。

帝国軍上層部も、この事故で七人もの帝国兵が死んだだけに、保護法に反すると思える雪上犬大量死の責任を、あえて北辺警備隊に負わすことはしなかった。

と同時に、フィアイの民に、雪上犬管理の注意も警告もしなかった。

だが、密猟の罪を逃れた雪原野営隊はともかく、北辺警備隊と帝国上層のこの事件への対処で大きく揺れたのは、北辺警備の下級兵士だった。

もちろん、彼らは雪原で死んだ七人が、密猟をしていたことを知らない。

いや、仮に知っていても、雪上犬に殺されたというのに、フィアイの民が何の責任も負わないというのは許せることではなかった。

少なくとも、この地区にいる雪上犬は、害獣として駆逐すべきなのだ。

かつて帝国は、世界制覇の過程で占領した土地で、テロやゲリラ活動で帝国人民の命が失われたときには、わずか二、三人の犠牲者でも、報復のためにその土地の住民や国民、民族までみな殺しにしたことはざらにあった。

他民族にとってそれほど苛酷な対処をしてきた帝国が、なぜ、雪上犬とフィアイの民に対してこうも寛大にならねばならないのか……。

帝国上層は、自然保護が帝国人民の命より大切というのだろうか？

帝国民は、雪上犬以下なのか……。

下級兵士は日々の食料まで困窮しているというのに、それに何の手も打たず、のうのうと暮らしている他民族のフィアイとその犬を、我慢して守らなければならないのか……。
北辺警備隊の下級兵士の不満は、みるみる膨れ上がり爆発寸前になっていた。
その不満のほとんどが、雪上犬の飼い主フィアイの民に向けられようとしていた。
そして、絶対至上命令で禁じられているにもかかわらず密猟者が続出した。

*

「今の状態で、もし、北辺警備隊の搾取横領が知れたらどうなります」
皇帝種の一が呟いた。
「北辺警備隊の下級兵士の不満は限界まで達しています。反乱が起こるでしょうね」
皇帝種の六が答える。
「北辺警備隊の上層にはそれを押さえる力はない。もちろん、それを鎮圧する帝国軍を派遣する余裕はわれわれにはない……反乱は成功し、下級兵士たちは食料を奪うため、自然保護区になだれ込み、フィアイの民をみな殺しにしようとするでしょう。彼らの今の飢えを見れば、それだけの憎悪の種はまかれているはずです。持っている互いの武器からしても、フィアイの民に勝ち目はありません」
両性の皇帝種が考えられる当然の予想をした。
「だが、フィアイの民には、今、フィレーナがいる。フィレーナはどう動くか……」
皇帝種は、北辺の動きを見通していた。

「われわれの思いどおりにいけば、フィレーナは帝国の最大の敵になって戻ってきます」
皇帝種の二が、微笑(ほほえ)んだ。
「それがいつのことか楽しみですね……」
皇帝種の四が微笑み返した。
「いずれにしろ、この星の人類の行方を決める山場(クライマックス)が近いようです」
両性の皇帝種が呟いた。
だれも異論を差し挟(はさ)むものはいなかった。

＊

七人の雪原野営隊を殺したギャッピーは、雪原をさまよっていた。
ギャッピーは、帝国人殺しを生きる目的に決めていた。
雪豹の無念とリーダー犬の怒りが、体に乗り移ったかのようだった。
今、ギャッピーは、人食い狼と呼ばれても不思議はないほどいきりたっていた。
だが、その後を、一頭また一頭……距離をあけてついていく犬がいた。
生き残った雪上犬たちだ。
雪上犬たちは、ギャッピーが雪原野営隊の七人を殺したことを知っていた。
あのリーダー犬を失った今、彼らの群れを率いる犬が必要だった。
雪上犬でなくても、銃弾で殺戮された彼らの敵を討ったギャッピーは、リーダーになる器として充分だった。

雪上犬たちは、仲間を呼ぶ遠吠えを繰り返した。
雪原を何度も遠吠えがこだました。
そして……。
ギャッピーが立ち止まり、背後を振り返った。
そこには百頭近い雪上犬が従っていた。
それが、この保護区にいる雪上犬のすべてだった。
彼らは、ギャッピーを頼っていた。
ギャッピーの中の帝国人への怒りが、そのとき、別のものに変わっていった。
彼らを食べさせていかなければならない。
それが、あのリーダー犬の敵を討った自分に託された生き方なのかもしれない。
ギャッピーは、本能的にそれを悟った。
ギャッピーは、孤独な戦士でいることをやめた。
ギャッピーは再び歩き始めた。

*

白夜の祭りは、終わりを忘れたように続いている。
昼夜の感覚が摑みづらいので、日数はわからないが、少なくとももう五回は寝起きを繰り返している。
フィレーナはギャッピーが、いつの間にか、近くにいないことに気がついていた。

しかし、引っきりなしに挨拶(あいさつ)にくるフィアイの人々の気分を損(そこ)ねないためにも、祭りの席を外すことはできなかった。

フィレーナとリラの噂(うわさ)は、近隣の村にも知れわたったらしく、入れ替わり立ち替わり、二人を目当てに浜辺を訪れるフィアイの民は、二千人をゆうに越えた。

そのそれぞれがフィレーナとリラの顔を見に来ては、肩を抱き鼻を押しつける。

どうやらそれが、フィアイの挨拶らしい。

「挨拶はしたいけど……こう大勢だとなあ」

フィレーナが鼻の先を赤くして溜(た)め息をついた。

「あなたはいいわよ……今のところ男に見られているらしいから……」

「それが、何の関係があるんだい」

「男同士は、鼻のこすり方がいい加減でしょう？　それに比べて、わたしゃ、可愛い女の子……どうも男の人たち、わたしには挨拶が丁寧(ていねい)すぎるのよ……なんか鼻が骨折しそう」

リラは、鼻先に指で唾をつけた。

「これで挨拶がキスだったらえらいことだわ。牡蠣(かき)のように口を閉ざすわけにもいかないでしょう？」

リラは、そう言いながら、目の前にある皿から大きな生牡蠣(なまがき)を摘(つま)んで口に運んだ。

皿の上には、リラがこの地に来るまでは見たこともない海の幸が並んでいた。

……郷に入っては郷に従え……

奴隷育ち(クレチア)の二人は食べられるものならなんでも好きになることにしていた。

そして、たちまち、海の幸のとりこになった。

特にリラが気に入ったのは、生の鱈子(たらこ)にいくらに数の子に雲丹(うに)……これを摘むといくらでも酒が飲めた。

酒が飲めないフィレーナは、鰊(にしん)の酢(す)漬けや鰯(いわし)のひもので炊(た)いた米や麦等の穀類をどんぶりで食べている。

フィレーナは生物(なまもの)にはいっさい手をつけなかった。

帝国ではなまものは、とてつもなく高価だった。

闘技士(バトラー)が、食べさせられるものといったら、帝国軍の食料用として作られた保存食品の古くなったものが多かった。

戦いの体力をつける栄養だけは、保存食品に含(ふく)まれていたからだ。

フィレーナの舌は、まずい保存食品に慣れていた。

だから、どちらかといえば、フィアイの民に遠慮(えんりょ)して、みんながまずいだろうと思う穀類ばかりを食べていたのだ。

フィラーレが、そんな二人に苦笑しながら言った。

「二人とも海の幸を初めて食べたというのに、ちゃんと好みが違うんですね。片一方は贅沢(ぜいたく)で、もう一人は粗食(そしょく)……」

フィレーナが、リラをつついた。

「ほら、すこしは遠慮しろよ……」
「わたし、贅沢さん？　そりゃそうかもね……フィレーナに比べたら、私、踊り子、芸術家……美は贅沢を好む……うん」
リラは、納得して頷いた。
「いいえ……贅沢なのはフィレーナさんのほう」
「え……僕が……？　どうして」
フィレーナは、フィラーレの言葉に首を傾げた。
「ここは北の果て……お米や麦は取れないもの。それに、酢漬けや干物は、冬の間や、長い狩りに出かけるときの大切な保存食料ですもの……」
北辺の地では、長持ちしない生物より保管できる乾物や穀類のほうが貴重品だったのだ。
「そう……別に好きなわけじゃないんだけれどさ……」
フィレーナは、思わずどんぶりを降ろした。
「生のほうが贅沢だと思ったのに」
フィレーナはそう言って肩をすくめた。
「その季節季節に一番おいしいと思うものを食べる……それが、フィアイの食事です。帝国流の遠慮はいらないわ。今年は牡蠣が最高なの」
フィラーレは、生牡蠣を取って、フィレーナに差し出した。
「おいしいときがうまいとき……さ、フィレーナ、いってみよう……」

フィレーナは、牡蠣をすすった。
口の中に潮の匂いが、豊かに広がった。
思わず溜め息が出た。
「ね……ね……最高でしょ。おいしいものを食べること。それが最高……贅沢気分」
確かにそうだった。
海の国フィロセラに生まれながら、ただの一度も生の海産物を口にしたことがなかったフィレーナは、今、心から贅沢を感じた。
そして、この地から離れたくないと思った。
そのときだった。
再び地響きがした。
思わずフィレーナとリラは立ち上がった。
さっきよりも、激しく大地が揺れている。
岩場と砂浜の間の至るところから白い蒸気が吹き出している。
だが、フィアイの人々はだれもうろたえない。
ただ、フィレーナには、フィアイの民の演奏する音拍が激しくなり、歌声がさらににぎやかになった気がした。
そして、円柱を取り巻いていた人々の輪が外へ広がっていく。
柱を中心にしてだれもいない丸い大きな広場ができた。

フィラーレが、にこやかに二人に言った。
「そろそろ、祭りの終わりが来たわ」
さらに揺れがひどくなった。
人々は手を繋いだ。
そして、叫んだ。
「スパ、スプ、スパ!」
フィラーレが、フィレーナたちに帝国語で意味を教えてくれた。
「春の泉……吹き上げろ……」
「春の泉?」
フィレーナが聞き返す間もなかった。
ずん!
空と海と陸、すべての空気を揺さぶる鈍い音が響いた。
一瞬のうちに、立っていた円柱が、上空高く吹き上げられた。
続いて砂地から大量の熱湯が吹き出した。
あたり一面が湯気で見えなくなった。
相当な高熱のお湯のはずだが、凄まじい噴出力で、垂直にかなり高く吹き上げられているため、雨になって地上に落ちてくるときには、まるで、適温のシャワーのお湯のようだった。
「毎年、このとき、この時間に、一日だけお湯が吹き出してくるのです。帝国語だと間欠泉と

呼ぶのだそうですけれど……私たちには春の泉がふさわしいような気がします。みんなこの日を待って、泉のお湯で長い冬の汚れを清めるんです」

人々は、老いも若きも、男も女も、毛皮の上着を脱ぎ、肌着だけになってお湯の雨の中で踊りまくっている。

濡れた肌着のままで、抱き合いながら踊っている若い男女もいる。

フィラーレは、少し頰を赤らめながら二人に言った。

「春は、動物たちにも私たちにも恋の季節です。今日は、望む恋が、相手さえいいって言えば叶えられる日なんです」

フィラーレは、湯気の向こうにぼんやり見える男の影を見詰めた。

体型から見てフィゴッ（海の神）を仕留めた男のようだった。

「あ……あの……」

今度はリラが、頰を赤らめて、口籠もりながら言った。

「私たちにおかまいなくどうぞ……ねえ」

リラにいきなり聞かれて、フィレーナもあわてて頷いた。

「ええ……おかまいなく」

フィラーレは、くすっと微笑んだ。

「私たちのお祭りは、二年前に終えましたわ。それより、あなたたちは……？」

リラは、肩を竦めて平然と答えた。

「いえ……当分、私たちは間に合ってまして……」
フィラーレは、軽く頷いた。
「そう……もっとも、フィレーナさんはお祭りで浮かれている時間はないかも……」
「え……？　どういうこと？」
フィレーナは聞き返した。
「あなたの船が、もうすぐ動きだすわ」
フィラーレが、入江を指差した。
いつの間にか入江には湯気が立ち、分厚い霧に覆われていた。
そして、風もないのに波の音が聞こえた。
フィラーレが呟いた。
「海が、動きだしたわ。さあ、あなたの船に行きましょう」
フィラーレは、浜辺に二人を連れていった。
先刻のフィゴッを仕留めた男が、獣皮艇（カヌー）を船着場に用意して待っていた。
波の流れに逆らって、引き綱を必死に押さえている。
「波の流れ……？　ちょっと！……変……この海！」
リラが、曇（くも）った湯気の海を見透かしながら叫んだ。
「波が並じゃない……」
決して洒落（しゃれ）を言ったつもりではなかった。

波は海辺に向かってではなく、入江の外に向かって出ていくのだ。
それは打ち寄せる波ではなく打ち出る波だった。
「理屈は簡単……」
フィラーレは、獣皮艇（カヌー）に乗りながらリラに言った。
「海に落ちないように……のぼせちゃうから……長くつかってると塩加減のいい温泉卵になっちゃうから……」
「え……？」
リラは小指で波に揺れる獣皮艇（カヌー）から、海面を触ってみた。
お湯だった。
それも、かなりの勢いで流れている。
「噴流風呂（ジェット・バス）……にしちゃ、確かに熱すぎる」
「これも間欠泉？」
フィレーナがフィラーレに聞いた。
「ええ……この入江には春の泉と同じものがいくつもあって、春の泉と同じ時間に、直接、海の中にお湯を吹き出しているんです。……冷たい海の中にお湯が噴（ふ）き出るから、どんな静かな海にも水の流れが起こります。この近くの海は、火山によって起こる温かい水と、もともとの冷たい水との兼ね合いで、季節ごとに海の温度と流れが変わるんです。その流れに乗って、あなたの船は、だれも操るものはいないのに毎年同じ航路をめぐっているんです」

「毎年……同じ航路をめぐっている」

「ええ……、いつかフィレーナという名の勇者を連れてくるという言い伝えを乗せながらね……でも、あなたの船は、いつもの年は私たちに春を告げだけで、この流れに乗ってまた隠れ家に戻っていってしまうのです」

「隠れ家って？」

「あの船には、夏の間休む隠れ家があるのです。そこには、たくさんの家族が眠っています。そしてあの船の家族たちは、目覚めさせてくれる勇者の来る日を待っています。それが、フィアイに伝わるあの船と勇者の言い伝えです」

リラが、ふーっと息をついて言った。

「なんかこう……わくわくしてきたぞ。その勇者がフィレーナ……あなたなわけよね」

……僕はお伽話の主人公なんかじゃない。ただの闘技士だ……

だが、それを言っても仕方のない事実が目の前に並べられている。

フィレーナは、今はもう黙るしかなかった。

フィラーレが、フィレーナの気持ちを促すようにいった。

「あの船の隠れ家はそう遠くありません」

フィレーナたちを乗せた獣皮艇は、強い波の中だったが、男の巧みな操縦で帆船に横付けされた。

帆船の甲板には、すでに数人のフィアイの男たちが荷物を持って乗っていた。

船内の扉は凍っていて、甲板以外には立ち入れないようだった。

フィラーレが、男たちを紹介した。

「行きはこの船で行けますが、隠れ家を見たら、帰りは陸を戻らなければなりません。人手が必要です」

フィレーナは、すべて、フィラーレに任すしかないと思った。

「よろしく……」

フィレーナとリラは、男たちと鼻を擦り合わせる例の挨拶をした。

そして、甲板に立ったフィレーナは、帆柱を見上げた。

……これが、僕の船……

解けかかった氷が、水蒸気を上げていた。

……いったい、僕を、どこに連れていくんだ……

……これじゃあ、僕は言い伝えのまま……伝説の言うがままに動かされている……そう、言うがままに動かされて抵抗もできない……まるで今までどおり、奴隷とおなじじゃないか……

帆船は何も答えない。

その代わりに……。

ぐらっ！　帆船が揺れた。

帆船は波に押され、静かに海面を動き始めた。

第4章

大海への船出

湯気か霧か……？
帆船の周りは何も見えなかった。
ともかく帆船は、波に乗って、静かに流れていく。
フィアイの祭りがあった入江の岬はとっくに出ているはずだ。
やがて、温かかった霧が、冷たい雨混じりになってきた。
「これを着たほうがいいわ……もっと寒くなるから……」
フィラーレが、毛皮の上着をフィレーナとリラに用意してくれていた。
「フィアイの土地は、火山のお陰で地面が温かくて、私たちや動物や植物が生きていけるけれど……本当なら、一年中、氷が解けない北の果てです。夏になっても、これ以上温かくはなりません。いえ……むしろ、あの入江から遠くなればなるほど寒くなる一方です。これかから行く先の寒さがこの地方では普通なんです」
フィラーレが話すうちにも、みるみる吐く息が白くなり、気温が下がっていくのがよくわかった。

そして、霧に氷の粒が混じりだした。
せっかく、水蒸気がたって解けかかっていた帆船の帆柱も、白く凍り始めていた。
「手の平で目を隠して……こうするの。でないと、目をやられるわ」
フィラーレが、両手で顔を押さえた。
帆船に同行した他の男たちも同じ素振りをしている。
二人は、わけがわからないまま、とりあえずその真似をした。
だが、すぐにわけがわかった。
いきなり、霧が晴れた。
「あっ……」
思わず、二人の口から声が漏れた。
手の平を射るように、光が飛び込んできたのだ。
フィレーナとリラは、目をあわてて閉じた。
そこには、乳白色の霧に慣れた目には、眩しすぎる快晴の世界があった。
「ゆっくり、目を開けて……」
フィラーレの声がした。
恐る恐る目を開く二人の前に広がった世界は鮮やかに青かった。
雲ひとつない青空。中天に白く輝く太陽。紺碧の海。白い波。そして、雪に覆われた白い崖が、近くに見えた。

「空気の温度と水の温度のおり合いがついて、霧がなくなったんです。大丈夫……この船は、陸に沿ってちゃんと隠れ家の方向に向かっています」

そのとき、風もないのに帆船の速度がぐんと上がった。

波が逆巻いている。

海の流れが速さを増しているようだった。

「ちょっと、このお船、暴走族さんしてません？」

リラが、心細そうに、フィラーレに聞いた。

「海の中の地形が、複雑なんです……もう少しは楽しめますわ」

前方につきたった氷の山が見えた。

山と崖の間に、わずかな隙間が開いて波が牙を剝いている。

帆船は、どんどんその方向へ流されていく。

リラは息を飲んだ。

「楽しめるって、まさかあの間を通り抜けるんじゃ……」

フィラーレは、にっこり笑った。

リラはごくりと唾を飲んで言った。

「あ……そ……恐いの大好き……」

そうは言ったものの、この辺の海や空は、今まで経験したこともない大袈裟な悲鳴を、耳鳴りがするほど十二分に聞かされた。

数分後、伴奏音楽箱の中で絶唱し終えた少女のように、けろりとした顔のリラを乗せて、帆船は無事に海の隙間をすり抜けていた。
隙間を抜けた帆船の速度が、急速に落ちていく。
波もみるみる静かになっていく。
隙間の向こうには、氷の入江があった。
帆船は、ゆっくりと入江に入っていった。
リラは、入江の様子に息を飲んだ。
「ここが、このお船の隠れ家？」
「ええ……ここはフィアイの住む半島の先……大きな氷の河の先端……陸のように見えますが、この入江の周りは、みんな氷でできています」
フィラーレが言った。
「氷でできた隠れ家なんだ」
やがて、帆船は巨大な氷の壁に近づいていった。
「あれは……」
まるで、模様のように無数の影が壁の中にあった。
それがなんであるか、フィレーナにはすぐわかった。
それは、船だった。
「あれが、この船の家族……」

家族というより、一族といっていい数だった。

船団と呼ぶにも、多すぎる数だった。

フィレーナは、その膨大な数になにより圧倒された。

そして、そのどれもが帆柱を持った帆船だった。

「氷の表面に見えているだけで二百隻はあります。氷の奥には、あと、何隻あるのか、見当もつきません」

フィラーレが言った。

「もしも、この船の群れがよみがえったら、フィアイの北の海は、風をはらんだ船の帆で埋めつくされるでしょう。ここにある船は私たちの獣皮艇とは違う。外海の遠く、海の果ての大陸……いいえ、この世界のどこへだって、そこが海にさえ繋がっていれば、いくことができるでしょう」

「世界中のどこへでも……」

フィレーナは呟いた。

「ええ……どこへでも。そして、この船のすべてが、フィレーナという勇者のものなのです」

フィラーレが、静かに言った。

「でも、どうすればいいんだ……」

フィレーナは、自分のものだという船団を、目の前に見せられてもなす術を知らない。

海に浮かんでいる船は、フィレーナをここに導いた一隻だけだ。

あとは、どれもこれもが、故郷のフィロセラの灯台の壁画に描かれた船そのままに、氷の壁に塗り込められ動けはしない。

帆のない帆柱はまるで、骸骨のように見える。

これでは、船が眠っているというより、船の墓場といったほうが似合っている。

……どうやって海に浮かべ……第一、だれが、こんなにたくさんの船を操ることができるというんだ……この船を眠りから覚ますのが僕だとしても……僕は、そんなに大きな目覚まし時計にはなれない……

フィレーナは、氷壁に閉じこめられた船団を茫然と見つめるだけだった。

やがて、船は緩やかな流れに乗って、氷壁をえぐるように開いた洞窟のなかに吸い込まれていった。

洞窟のなかは、白い氷の淡い光と透明感のある水の青さに満ちていた。

天井に割れ目があり、そこから太陽の光が、照明の代わりのように差し込んでいたのだ。

光は波に揺れ、屈折し、水の青さを洞窟の中で踊らせていた。

やがて、洞窟はしだいに浅くなり、船は底をこすらせてゆっくり止まった。

「着きましたわ。ここがこの船の夏の隠れ家です。さあ、船から降りましょう。あなたには、まだお見せするものがあります」

フィラーレが、すっかり無口になったフィレーナに下船を促した。

洞窟の奥は、フィラーレが船の隠れ家というのに相応しく、帆船のためにしつらえたドック

のような見えた。
そして、洞窟の壁から突き出した氷の埠頭の先に、フィレーナが故郷フィロセラで見た、同じ形の灯台が立っていた。
しかし、朽ち果てたフィロセラの灯台に較べ、洞窟の灯台は氷でできてこそいたが、天井からの日の光を浴びて身体全体が巨大な水晶柱のように輝いていた。
今すぐにでも、その鏡玉の瞳から光を放って旅人に進路を教えてくれそうに、生き生きとして立っていた。
フィラーレは、フィレーナたちを灯台のなかに案内した。
壁中が、頭上から降り注ぐ太陽の光をほどよく透過して、照明の必要は全くなかった。
一階の中央には硝子材で組み立てられた階段が、頂上と地下に向かって伸びている。
フィラーレは、灯台の階段を地下へ降りていった。
そこにも、硝子でできた扉があった。
洞窟の海のように青い硝子で、中の様子までは透けて見えなかった。
「この扉に続く部屋だけが、氷でなく硝子でできています。でも、鍵がかかっていて開けられない」
「鍵……？」
「扉の浮き彫りを見てください」
扉には波と帆船とさまざまな魚……そして、ひとつずつの月と太陽が浮き出されていた。

そして、右手の一カ所だけ、そんな穏やかなモチーフと裏腹なものが描かれていた。
それはほとんど実物大の剣だった。
扉の模様にしては、何の装飾もない、ありふれた剣のデザインだ。
しかも剣の部分だけが、浮き彫りではなく凹んでいた。
「そこに、ぴったりとはまり込む剣が必要なんだと思います」
リラが、フィレーナにささやいた。
「あなた、用心がいい人ね。何年も前から、ここの鍵を持ち歩いている」
「僕の剣……フィレーナ」
フィレーナは、剣を抜いた。
それは、首都ボーの刀鍛冶ウトから手渡され肌身離さず持っていたフィレーナという同じ名の剣だった。
フィレーナは、扉に剣をはめこんだ。
剣が青白く光った。
そして、乾杯のグラスを合わせたような軽い音が聞こえ、簡単に扉は開いた。
扉の中の部屋は、フィレーナの剣と同じように青白い照明で照らされていた。
片方の壁いっぱいに、地図があった。
地図の部分部分なら、フィレーナにも見覚えがあった。
帝国の支配する大陸の地図の部分だ。

だが、それは、地図の七分の一程度を占めているにすぎなかった。
地図は、フィレーナもリラも見たことのない、それは、この星の世界地図だった。
南の果てには、見たことも聞いたこともない陸が描かれている。
その大陸にしても、大きさは帝国の支配する部分と大差はない。
地図のほとんどは、フィという部分に覆われていた。
この星のほとんどは、フィ（海）だったのだ。
フィラーレが、地図の下に書かれた文字を、たどたどしく読んだ。
「フィペーラ……ユニペーラ」
その程度の単語なら、どの海洋民族も共通した語彙があった。
「意味はわかっている……」
フィレーナは、通訳してくれるなとでも言いたげに首を振った。
ペーラは支配者、統治者、王者。そして、ユニは世界、すべて、みんな。
文字の意味は……、
……海の統治者……世界の統治者。
……海を制する者、世界を制す。
おそらくこんなところだ。
だから、何だ……？　と、フィレーナは叫びたかった。
どこの国でも、この手の標語は、景気がいい。

うっかり乗ると、それこそほめ殺しにされる。
北の果てで、ただでさえ寒いのに、こんな言葉にのぼせあがって堪るものか……。
第一、凍りついた船しかなくて、どうやって海に出ていくっていうんだ。
笑っちゃうよ……。
本当に、フィレーナの顔にばかばかしさの笑みが浮かんだ。
そんなフィレーナに、リラが、よけいなものを見つけてくれた。
「この地図も、扉じゃないかな。剣をはめる窪みがあるもの」
リラは地図の右角を指差した。
リラは手を差し出した。
「フィレーナ、剣を貸して……ここまで来たら、見落としはなしにしなきゃ、もったいない……ね」
「もったいないか……確かにね」
フィレーナは、苦笑して、剣をリラに渡した。
「ここまでのお伽話的展開からすると、お宝ざくざくかもよ」
リラは、剣を地図にはめ込んだ。
思ったとおり、地図の裏側には小部屋が隠されていた。
壁中が書棚だった。
そこは、フィロセラの資料庫といってよかった。

膨大な数の電子文書盤と、地図、何を意味するのか得体の知れない設計図のような図版が、並んでいた。

フィロセラの蓄積した知恵と知識のほとんどが、この部屋にコンパクトに収められていた。

リラは、そのあまりの量に溜め息をついた。

「お宝ざくざくがこれじゃ……楽しいお伽話が学校の授業になったようなもんよね……蛍の光、窓の雪って……ここは北国だけにさ、雪と氷はいっぱいあるから、あなたにお勉強しなさいってことかしら？」

茶化して言うリラに、フィレーナは真顔で答えた。

「いいや、ここまでさ……。せっかくの資料でも使いものにならない」

フィレーナは肩を竦めた。

「どうして……？」

「資料はみんなフィロセラ語で書かれている。フィロセラ語は滅ぼされた言葉だ。消された言葉だ。残された海洋民族の中にもしっかりわかっている人はいない。フィだの、ペーラだの片言ならなんとなくわかっても、今となっちゃ難しい単語はおろか、単語の並び方の文法だってよくわからない。こんな難しい本を読める人なんか、もういないんだ」

「そう……？」

リラは、フィラーレにすがるような顔をして聞いた。

フィラーレは、残念そうに頷いた。

「同じ海洋民族でも、私たちフィアイは、文字もろくにない言葉ですもの。フィロセラとは違いすぎる。それに、海洋民族の言葉でも、フィロセラの言葉ってなんだか無理してわかりにくくできている気がする」

「無理してわかりにくい？　帝国語と通訳できてるフィラーレさんもそう思うの？」

フィレーナが、意外そうに聞いた。

フィレーナ自身も、フィロセラ語をわかろうとして、いつも感じていたことと同じだったからだ。

あまりにわかりにくいから、自分には語学の才能がないのではないかと落胆していたのだ。

それが、通訳のできるフィラーレさえ難しいとなると、話は違う。

フィラーレは、頷いた。

「言葉の並びが普通じゃないの。帝国語や他の民族の言葉は大体決まった並び方をしているから、単語がわからなくても、相手の言いたいことの見当はつくの。帝国語の並びは簡単……わかりやすいから、ばかな私でも慣れれば通訳やれるわ」

「ばかというのはばかじゃない証拠」

リラが、素早くフォローした。

フィラーレは、リラに微笑み返した。

「ありがとう……ともかく、帝国語はだれにでもわかりやすく、広まりやすい言葉だわ。それに較べて、フィロセラ語のわかりにくさは、わざとやったとしか思えない……」

「わざとやった……何のために……」
「通訳している私に思い当たることといったら……」
フィラーレは、少し言いにくそうにフィレーナを見て……、
「たとえば、フィアイの民の中にも、狭い土地に住む人達って、ときどき、他の土地に住む人たちにはわからない言葉を使いたがるものなの。他の土地の人と区別をつけるために……」
「なぜ……？　なぜ、区別をつけるわけ？」
リラが聞いた。
「たぶん、言葉でよそ者を見分けるためだわ。自分たちの利益を守るためとか、自分たちの秘密を守るためとか……目的はいろいろでしょうけれどね……言葉の並びや発音が複雑だと、どんなに他の土地の人が真似をしても真似をしきれないもの……言葉でよそ者だってことがすぐわかるでしょう？　そういう土地の人たちって、仲間同士はとっても仲がいいけれど、他の土地の人たちを気持ちのどこかで違うものとして見ている」
フィレーナは、肩を落として呟いた。
「そうかもしれない。フィロセラは、国ぐるみで、他の民族との差をつけたがった人たちかもしれない。おなじ海洋民族の中ですら、読みにくい、喋り（しゃべ）にくい言葉を作ってね……」
フィレーナは、その先を言わなかった。
……そして、自分たちの利益ばかり追いかけて、この世界のすべてを食い荒らした。
フィレーナは、自分に頷いた。

「いいんだよ……フィロセラの言葉なんか読めなくて……フィロセラの知識なんて滅びてよかったのかもしれない」

そのときだった。

リラが、きつい声で言った。

「悔しくないの……フィレーナ」

「え……？」

「たとえ、難しくったたって、自分のふるさとの言葉がわからないなんてこと、許せる？……言葉を消したのは、難しい言葉を作った本人のフィロセラの人ではないわ。

言葉を滅ぼしたのは帝国なのよ。

これって許せない……本当は、帝国だろうとフィロセラだろうと、国なんてさ……滅びたっていいと思う。でも、言葉まで滅ぼしちゃいけないと思う。言葉ってその人を表現するものでしょう……？　言葉が消えちゃ、その人の本当の気持ちが表せないでしょう？　その人の心がわからなくなる気がするでしょう？　だって、人は、その人の言葉で考えて、その人の言葉で笑って、その人の言葉で泣くんでしょう？　その人が言葉をなくすって……いい？……確認するわ。私が言っている言葉っていうのはね、いわゆるお喋りで口から出てくるような言葉だけじゃないの……その人を生んだ、その人が心の中で喋っている言葉。それは、その人の生まれ育ったところの言葉のはずだわ。それを消しちゃうってことは……その人が、どんな人だかわからなくするってことで……自分が何が何だかわからなくしちゃうってことで……ええい……

なんか支離滅裂になってきたぞ……ともかく言葉を消しちゃうような帝国は許せないのだ……うん！」
リラは一気呵成にまくしたててから自分に頷いた。
「悔しいさ……そりゃ。この資料の中に今を変える何かがあるなら、見つけだしてみたい気もする」
フィレーナは、正直な気持ちを言った。
「だけど、読めないものは読めない。この資料は、出遅れた幽霊みたいなもんだ。何を言いたいのかわからない幽霊は、恐くも、ありがたくもない……」
フィレーナは、こぶしを握り締めた。
「最近、なーんか暗いのよねえ。フィレーナは……」
リラがにっこり笑った。
「読めないなら読めるようになりゃいいじゃん。よろしい。まあっかせなさい」
あまりに軽くリラが言ったので、フィレーナとフィラーレは気圧されて、顔を見合わせた。
「わたしゃ、最近、どうもフィレーナにとって、歌や踊りや応援だけのバラエティ担当で役不足を感じておったんだけどね……考えてみれば、あの狼犬ギャッピーほどにも役だっていないわけで……ねえ」
「能書きはいいよ」
フィレーナが、ぽつりと言った。

「うん、それでは……」

リラは、軽く咳払いをしてから話しだした。

「フィロセラ語が、いくら難しい言葉だからって、しょせんは、大勢の人間が使っていた言葉なんでしょ。もともと言葉や文字は人に気持ちを伝える道具でしょ。クイズや暗号じゃあるまいし、難しさにだって程度ってもんがあるはずだわ。それなのになぜ、フィロセラ語が解読できないか。答えは簡単……。帝国のせいで、フィロセラ語の文章や単語がほとんど残っていないからだわ。たくさん文章があれば、そこから、単語の意味や並び方、使い方がわかってくるはずよね。で、みなさん、もう、おわかりでしょう。フィロセラ語がなかったのは昨日までのことです……ここには、そのフィロセラ語の文章が、うんざりするほどあるわ。後は、単語を、分類整理、解読すればいいわけよね。今回は、人まかせの舌先三寸自由自在の発音発声が必要なわけじゃない。……読めりゃいいわけでしょう？　この際、難しい交錯唱法はいらないの。……なら、そんなの簡単よぉ……」

フィレーナは、フィラーレに聞いた。

「簡単かなあ……」

「私は、会話を覚えるほうが、文章を読めるようになるよりずーっと楽でしたけれど……」

フィラーレは、首を傾げた。

リラはにっこりと頷いた。

「そう、頭のいい子は、会話が先……でも、生真面目なおばかさんは、文法や単語や文章読解

が好きなの」

「リラがそうだっていうの？」

フィレーナが真顔で言ったので、リラはこけた。

だが、すぐに立ち直り、ニヤリと笑った。

「ふっふっふ……残念ながら私は頭のいい子なのだ。だが、フィレーナにギャッピーがいるように、私にも強い味方がいるのだ。ギャッピーほど頭がいいとはいえないけれどね。真面目（まじめ）は真面目よね。私の可愛い用心棒……」

リラは、肩にかけた袋から携帯通信電算機を取り出した。

その携帯通信電算機は、リラが絶えず程度上昇（グレード・アップ）を心がけ、携帯用としては、帝国の携帯通信電算機の最高水準をいくものだった。

リラは、小部屋の書棚から持てるだけの電子文書盤（フロッピー）を取り出した。

そして、決してリラがいうほど楽ではなかったが、フィレーナたちが氷の入江からほぼ一カ月の行程をかけて陸路でフィアイの入江に帰ってきたときには、携帯通信電算機によるフィロセラ語解読は日常語の領域という程度では、ほぼ出来上がっていた。

リラとリラの携帯通信電算機は、帝国が数十年を要して消した言語を、わずか一カ月足らずで蘇（よみがえ）らせたのだ。

その副業として、リラは二十五万語収録のフィロセラ語辞典まで作りあげていた。

*

フィロセラの資料が、フィレーナにどんな未来をもたらすかはまだ不明だが、帝国人民心理更正病院に収集分類された帝国の資料は、ネストとテスに悲観的な観測しか与えてくれなかった。

与えられた資料を見終えた今、ネストは、もう、何もすることはなかった。

ネストは資料庫から解放され、心理更正病院の中庭に出て、大きく伸びをした。

そこには、相変わらず、懐かしい古代の空気と穏やかな海と豊かな緑が、病院の患者たちを包んでいる。

立体映像と作られた空気の虚構の自然ではあっても、この星の他では望めない環境であるのなら、空しくはあっても楽しんで悪くはない気持ちにさせられていた。

後は、テスのまとめた帝国上層の皇帝種に送る報告書に目を通し、了解の署名をすればいいだけだ。

テスがどんな内容の報告書を書こうが、ネストは了解するつもりだった。

報告によって起こるネストの今後は、テスの書き方次第で決まるだろうが、それに文句を言う気はなかった。

ネスト自身としては、この星と人類に対する自分の結論は出ていた。

全く救いようがない……それが、ネストの答えだ。

無理に進化させた帝国種であろうと、フィレーナのように、古代の特徴を残した人類であろうと、この先、どんな種の人間が誕生しようと、それが人間である限り、遅かれ早かれ結果は

同じだろう。

考えてみれば、この星の生物の中に、人間という動物が生まれたときから、自然と環境と生態系の破壊が始まったといっていい。

人間は、与えられた環境と現状だけでは、決して満足しない……。

それが、人間の人間たるゆえんなら、人類の種の違いも進化も、人間であり続ける以上、結果は大同小異だ。

自然と環境と生態系の破壊……そして、母屋である星そのものをなくし、自らも滅びる。

人間というものを形作る遺伝子が、この星での繁殖を求めたときから、この星の悲劇は始まったのかもしれない。

人間は、この星にとって、悪性腫瘍のような生きものだったに違いない。

この星が助かるためには、発生した早期に除去するしかなかった。

だが、もう間に合わない。

この星には悪性腫瘍が蔓延し、体力も気力も失せた。

母屋が消えれば、悪性腫瘍も生きていけない。

悪性腫瘍自身があわてて自己増殖を押さえたり、他の悪性腫瘍を除去して母屋とおり合いをつけようとしても、それは結局、茶番にすぎない。

悪性腫瘍自身が完全に除去されないかぎり、結末は来ないのだ。

人間は、この星にとって、もともと存在してはならない、存在すべきではない、何の役にも

たたないどころか、よけいで命取りな細胞にすぎなかった。
その、悪性の細胞の一人として生まれてしまったネストにできるのは、ただ、母屋であることの星と、母屋から奪取する栄養がなくなった悪性細胞同士が、互いに食いあう姿を見ていることしかない。
その途中で、自分が他の細胞に食われてしまえば、それはそれで仕方のないことと思うしかなかった。
膨大に膨れあがった悪性細胞の中のひとかけらが、泣こうが喚こうが、生きようが死のうが、いまさら何の意味もなかった。
この星を救う方法があるとすれば、ただちに人類のすべてを除去し、この星の自然な回復能力に万が一の期待をかけるしかない。
だが、それを、当の人間自身が決められるはずがないではないか。
自分一人が死ねば、この星が救われるというなら死にもしよう。
ある種類の人間すべてがいなくなれば、この星が救われるというのなら、絶望と狂気と信仰めいた確信で集団自殺することもあるかもしれない。
だが、人類という単位でみれば、生存と増殖を続けようとする生物の遺伝子は、決して、滅びようとはしない。
遺伝子は自殺しない。生存と増殖を望む。
そして、それがこの星の滅亡に連鎖する。

人間は生まれてはならない生きものだった。
いったいだれが、何のためにこんなものを生み出したのか……。
ネストが、今、人類に対して、人間として感じることといったら、そんな知的な好奇心しかなかった。
その好奇心を満足させるには、結局、生き続けなければならない。
考えてみれば、その好奇心すら、遺伝子の命じる生存への欲求の現れかもしれないと思うと、ネストは、自分の存在自体を笑い飛ばしたい気持ちに誘われた。
そして、ネストはどうしようもない微笑を押さえることができなかった。
心理更正病院の、この虚構の中庭の自然の中で、自分を笑い、酒を飲み、そのまま麻痺(まひ)した神経のまま、永遠にうたた寝できたら、どんなに楽だろうとネストは思うのだった。
「何を考えているんですか……楽しそうに……」
「ん?」
振り返るとテスが立っていた。
「楽しそうに見えるかね」
テスは肩を竦めて、それには答えず、分厚い書類を出した。
「報告書ができました」
「わざわざ紙に印字したのかね」
「ええ……電子文書盤(フロッピー)は磁気で簡単に消せますけれど、紙は炎で燃やさなければ消えません。

上層部に報告を手を加えられて操作されても、手元に原本が残ります」
「そんなに大切なことを書いたのかね」
「いいえ……単なる記念にとっておきたいだけですわ。読んでいただけます？」
ネストは受け取り、報告書をめくり……、
「時間がかかりそうだな。後でゆっくり読ませてもらうとして、テスの結論はどうなったのかね？」
「帝国医学論文の結論は、いつも、最初のページに書かれてあります。帝国医学で大切なのは、病気が治るか治らないか、生きるか死ぬかの結論だけですから……」
ネストは、頷いて、最初のページを読んだ。
いきなり書かれていたのは、この文章だった。
〔特殊変形優秀種に、人類を継承する可能性あり。帝国は保護繁殖を奨励すべきである……〕
ネストは、書類を閉じてテスを見つめた。
「本気なのか……？　どこをどうひねったら、われわれに可能性があるという冗談が作れるんだ？　この病院に収容されている患者たちのどこに人類を継ぐ能力があるというんだ？　根拠のない報告をすれば君自身の命まで危なくなる」
「これって過激ですか？」
テスは微笑し、ネストの手から書類を受け取った。
「確かにいい加減な報告をすれば、処分されます。でも、そんなこと、どうでもいいんです」

「どうでもいい？」

「死んでほしくないんです」

テスは呟いた。

「ネストさんにも……ここの患者さんにも……今日、生きているかぎりは……明日も生きてほしい……私、私の患者さんに死んでほしくない……」

テスは書類を抱き締めた。

テスが、患者のカルテを持っているときにいつも見せる素振りだった。

そして、虚構の浜辺で、無心に鬼ごっこをしている患者たちを見つめた。

「帝国の上層部は、いらない帝国種を抹殺するつもりです。特殊変形優秀種が不要となったら、真っ先にここは潰されるでしょう。今の私には、特殊変形優秀種の可能性も人類の未来もどうでもいいことです。ただ、私の患者を見捨てるのはお断りです。患者を守るためならなんだってします」

「こんな、すぐばれるような結論でか？」

「どんな結論をだそうと、上層部は見抜くでしょう。だから、正直な私の気持ちが上層部に伝わるように、わかりやすい嘘を書きました。それが、自分自身にも正直だと思うんです。わたし、初めから、そう決めてました。私はなによりこの病院の患者を守る。それが、人類の未来なんかより優先する。それが、私なんだって……」

そこまで言ったとき、テスの胸に抱いた書類が落ちた。

「どうした？」
テスは苦しそうに言った。
「私、みんなを助けたい……」
そして、ネストの腕に崩れるように倒れ、気を失った。

＊

ネストは、焦らずに手際よく医者に連絡し、テスを治療室に運び込んだ。
処置が早かったのが幸いして、テスはことなきを得た。
治療室の寝台には、まだ、酸素吸入器をつけたままのテスが寝かされている。
原因は過労による呼吸困難だった。
「過労？」
その原因は、ネストにとっては意外に聞こえた。
心理病理観察看護人が、なりたがる人間も少なく、激務であることは、他の心理病理観察看護人を見ているとよくわかった。
しかし、テスは、ネスト専任の心理病理観察看護人だった。
そのほとんどは、ネストと帝国の資料を見直す机上作業だ。
時間も決まっていたし、それほど激務とはいえないものだったはずだ。
だが、テスを見舞った同僚の看護婦がネストに漏らした。
「無理のし過ぎよね。自業自得とはいえ無茶だわ。指令どおり、あなたの相手だけしていれば

よかったのに……」
「どういうことかね」
ネストは聞き返した。
「他の患者たちまで看ていたものですから。好きでやっているから、私たちも勝手にやらしていたけれど……、ま、こちらも助かりますしね……」
「他の患者？」
同僚は頷いた。
「あの娘は、あなたの担当になる前は、見習いでした。でも、見習い中にしても、一度でも観察看護した患者は自分の患者の一人だって……妙に頑張(がんば)っていて……勤務時間外にもここにきて、患者たちの世話をしていたんです。ご存じでしょう？　ここの空気が、帝国人にはつらいってこと……長時間いるのは無理なのよ。それなのに……心理病理観察看護人になる娘って変わり者が多いけど、あの娘は特に変わっているわ」
ネストに肩を竦めてみせて、同僚は出ていった。
「ネストさん、ごめんなさい……」
いつの間にか、寝台の上のテスが、自分で酸素吸入器を外し、半身を起こしていた。
「元気かね」
ネストは、何を言っていいかわからず、とりあえずそう聞いた。
テスはいつもの微笑みを見せ頷いた。

「はい、元気です。看護人が看護されちゃった。……いけませんね」
「好きなんだね。看護が……」
「はい。どうしてなんだろうと、自分で不思議なほど……ええ」
テスは、ネストにさわやかな瞳を向けた。
……この娘を大切にしよう……
ネストは唐突にそう思った。
そのときだった。
にぶい地響きがした。
たちまち、けたたましい警報が鳴り響いた。
テスは、弾けるように起き上がった。
「火災です。私の患者は逃げ方がわからない」
後ろも見ずに治療室から飛び出していった。
鈍い音はさらに続き、床が揺れ、壁が崩れた。
それが火災ではなく、爆発であること……それも、爆発物による攻撃であることが、だれの目にもすぐわかった。

*

その日、ラズルの率いる反乱軍「ボーのフィレーナ」が、首都制圧をもくろんで、総攻撃をかけてきたのだ。

しかも、主たる目標は、病院。
帝国の中枢は、首都の病院のどこかにある。
証拠こそないが、かつて、首都の税務局に勤めていたラズルには確信に近いものがあった。
税務局は、仕事上、首都圏を流れる金の動きを掴みやすい位置にいる。
首都圏の帝国軍指令部も、その他の官公庁も、デビス神殿さえも、帝国の中枢に足る金の動きは見られなかった。
機密を要する軍事費ですら、その金の流れだけなら、優秀な税務官の目からは逃れられないはずなのだ。
帝国の中枢を動かすには、それなりの金も動くはずだ。
そして、帝国の財政界において用途不明瞭の金が流れやすい団体の一つに病院があった。
さらに、医学が信仰ともいえる帝国において、聖地とされている場所。
しかも、こととしだいによっては帝国要人の命を自由に操れる場所。
ラズルには、病院以外に帝国の中枢になりうる場所は考えられなかった。
帝国中枢をうまく叩ければ、少なくとも首都占拠は可能だと考えていた。
だが、それが首都のどの病院なのか……。
帝国の中枢である以上、かなりの規模が必要である。
首都には、巨大な病院が七つあった。
帝国中枢総合病院。国立帝国病院。帝国大学病院。都立帝国病院。帝国軍首都病院。そして、

帝国人民心理更正病院。デビス神教病院。

デビス神教病院は、神女団がらみの特殊な慈善病院だから除くにしても、六つのうちのどれが帝国の中枢にあたるかそれが問題だった。

もし、病院を間違えれば、すぐに中枢の反撃を受けるし、聖地を侵しただけに帝国側はおろか、反乱側からも非難されるだろう。

ラズルに病院攻撃を今まで躊躇させていた最大の理由が、そこにあった。

だが、首都圏の反乱の慢性化は、士気を明らかに衰退させていた。

工場、農地の少ない首都圏は、自給能力がない。

地方からの供給路を他の反乱軍に断たれれば、「ボーのフィレーナ」軍がいくら物資を首都都民から掠奪、調達しようにも、すぐに空になってしまう。

奪い取るものがなくなっては首都圏の反乱は存続できなくなる。

しかも地方の反乱軍のいくつかは、首都に進軍を開始しそうな勢いを見せている。

ラズルとしては首都反乱軍という、全国の反乱組織を統一しうる絶好の位置にいながら、このまま先細るわけにはいかなかった。

ラズルは、総攻撃に最低必要な戦力を蓄積することにした。

その間、戦力を消耗するような派手な反乱活動は自粛させた。

そして、反乱暴徒の欲求不満が爆発寸前になるぎりぎりを見計らって、引き絞った弓を射るように総攻撃に踏み切った。

帝国の中枢のある病院がまだわかっていなかっただけに、ラズルにとってそれは大きな賭けだった。

可能性のある六つの病院は、同時に攻撃を受けた。

それが、今日だった。

＊

帝国中枢総合病院……その地下二十階には帝国機密情報兵団（通称黒い悪魔）の最上層部の会議室があった。

壁の首都圏地図が、明滅する点であふれ出した。

頭上ではかすかな爆発音が聞こえる。

「首都反乱軍が、ここをふくめて首都圏の大病院を攻撃し始めました」

黒い悪魔の一人が肩を竦めた。

「病院は聖地のはずだったがな……」

「見ればおわかりでしょう。どうやら、反乱軍は聖地を侵してでも、首都を制圧するつもりのようです」

一人が自嘲気味に言った。

「これでも、帝国の指導者たちはわれわれに動くなと言うのかな」

「さあ……いずれにしろ、反乱暴徒どもがここまで殴り込んできたら、いくらわれわれでも、わが身を守らんわけにはいかんでしょう」

もう一人が溜め息をついた。

「まあ、それまでは帝国指導者のご命令をお待ちするとしましょう」

黒い悪魔の上層部は、帝国指導者の「戦うな」という指令に、もう白けきっていた。

＊

国立帝国病院……最下層階……大地の間……。

皇帝種の七人はいつものように、ゆったりと長椅子に横たわっていた。

もちろん帝国中枢総合病院や心理更正病院と同じく、国立帝国病院も反乱軍に襲撃されてはいた。

だが、その地下深く、最大級の超爆弾の直撃にも耐えられるように設計された最下層階は、簡単に侵入を許すはずもなかった。

しかし、皇帝種の姿は落ち着いて見えたが、新しい決断を迫られていた。

「この総攻撃は、少し早すぎますね。まだまだ帝国の首都防衛軍の力は残っている。反乱軍の犠牲は少なくないでしょう」

両性の皇帝種が抑揚のない声で言った。

立体映像でラズルが映しだされた。

「首都反乱軍の指導者は帝国の優秀種として生まれ、わずかの差で最優秀種になれなかった男です。よほど焦っているのでしょうね。しかし帝国人の血は争えませんね。本当に気短で好戦的ですな」

男の一人がそういって肩を竦めた。

「これで、戦いに病院は侵すべからざる聖地であるという歯止めがなくなりました。これをきっかけにして、全国各地で、雪崩をうったように、病院が襲撃され掠奪されるでしょう。傷ついた生命を救済する場の崩壊は、ある種の倫理観の崩壊を意味します。まがりなりにも、今まで、帝国人、他民族を通じて、暗黙のうちに存在した生命遵守の倫理観が崩壊するのです。その倫理観の喪失は、人間の本能を剝き出しにします。すなわち、殺す（やる）か殺される（やられる）か、殺される（やられる）前に殺せ（やれ）！　もう、そこに帝国人と他民族の差はありません。これからの戦いは帝国の防衛も帝国の反乱も名目でしかない。あるのは、生きるために殺し合う人間だけです。そこでは、人間という生物が持つ唯一貴重な特徴、尊厳は死んでいます」

「尊厳と倫理のない世界では、殺戮のため、後先も考えず超爆弾も使われるでしょう」

もう一人の男も肩を竦めた。

「間違いなく、禁じられた超爆弾の封は切られるでしょう。すでに、実例はいくつもあります」

七人の中央に浮かんだ立体映像に、要塞都市デビが南部海岸地方で使用した、超爆弾炸裂の場面が映しだされた。

「人間が追いつめられると、必ず亡霊のように超爆弾は使われます」

男の一人が頷いた。

「自然界に超エネルギーが存在する限り、超爆弾の廃絶はできません。廃棄してもすぐに作り出せる。事実、使われないままの超爆弾は世界各地に埋もれています。しょせん、どんな処罰を代償にしようが、帝国の禁止令は人間の倫理観に頼ったものです。人間がその気になれば、人間の作った法律上の禁止など、絵に画いた餅に過ぎません」

さらに男の一人が呟いた。

「超爆弾が使われだせば、この星の環境は完膚なきまで破壊されつくすでしょう」

「もう、これから私たちがしなければならない決定に対して自己弁護を繰り返すのはやめましょう」

女性の皇帝種がうんざりしたように男たちを見回した。

「まとめて整理すべき時期が来たのね」

もう一人の女性がきっぱり言った。

「首都圏においては、改良した新爆弾の実験をするのにいい機会だと思います」

両性が、無表情に言った。

新爆弾……帝国上層が開発している人間の遺伝子に選別作用して、ある特定の種だけの人間を残し、それ以外の人間を根こそぎ消滅させる爆弾だった。

今の実験段階は、帝国の優秀種以上を選別して残せるかどうかだった。

女性の一人が呟いた。

「特殊変形優秀種は生き残るでしょうか？」

女性の一人が呟いた。
もう一人の女性が溜め息をついた。
「残らなければ……しょせん残しても仕方がないでしょう。提出される前にすでに傍受した心理病理観察看護人の報告書よれば、彼らには残る意志が欠けている。倫理と尊厳は羨ましいほど人間的と思いますけれど……」
両性の皇帝種が言った。
「人間は倫理と尊厳だけで存続できません」
残る六人の皇帝種は、うつろに、悄然と、憮然と、それぞれの表情で頷いた。
微笑むものはいなかった。

＊

「帝国機密情報兵団は全国の暴動鎮圧に全力をつくせ」
ついに、黒い悪魔に出動命令が出た。
「解禁ですな……」
上層部の一同はおもむろに腰を上げた。
一瞬のうちに帝国全土の機密情報兵団に指令が回り、もう行動を開始した支部もあるはずだった。
だが、帝国中枢総合病院の上層部には、緊張感など微塵もなかった。
待たされることにはいらついていたが、いざ行動となると、冷静な悪魔の表情が戻ってくる。

地上の帝国中枢総合病院は、反乱軍の攻撃を受けていたが、黒い悪魔の最上層に位置する彼らの実力をもってすれば、取るに足らぬ敵のはずだった。
帝国機密情報兵団の上層になるには、権謀術策だけでなく、本人の武闘技術も重要な要素とされた。
闘技に関しても現役の超一流でなければ勤められないのだ。
……久しぶりに汗をかいてみるか……なあに、一人あたりで二百人も倒せば、ここの騒ぎは治まるだろう……
彼らは手ごろな武器をそれぞれ身につけると、蠅を追い払うような気持ちで、地上に向かう昇降機に乗った。

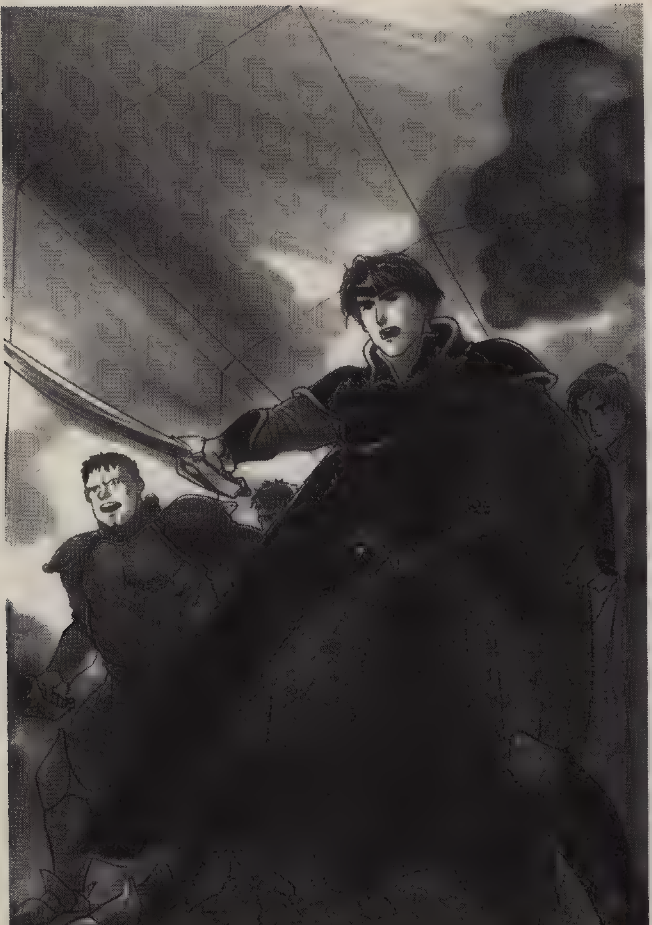
*

テスが心理更正病院の中庭に飛び出してきたとき……。
そこには、もう海も森も野原も、虚構の自然は残っていなかった。
反乱軍の攻撃が、立体映像装置を破壊したのだ。
剝き出しになった病院の壁が次々に崩されていく。
壊れた拡声器が、患者の朝の体操の曲を大音響で繰り返している。
医者や心理病理観察看護人はいち早く避難したらしく一人もいない。
何が起こったのかわけのわからない患者たちが、音楽に合わせ緩慢な仕草で手足を動かし体操をしている。

「みんな、こっちに逃げて！」
だが、だれも事態がわからない。
叫ぶテスに、にこやかに手を振る患者もいる。
崩された壁の向こうから、白熱光線を放ちながら反乱軍が突入してくる。
敵がどこに隠れているかわからないから、相手かまわず撃ちまくる。
患者たちは、そんな光線に次々に射たれ蒸発していく。
「やめてっ！」
テスは思わず光線の前に立ち塞がろうとした。
「死ぬな……！」
ネストが、その手を取って、物陰に引きずり込んだ。
「だって……！　私の患者が！」
手を振り払って出ていこうとするテスの頬を、ネストが叩いた。
「テス！　落ち着くんだ。ここはもう助からない。だが、病棟には、まだ他のおまえの患者が残っている」
「私の患者！」
テスは我に返ってネストを見つめた。
「おまえが死んだら、逃げることを知らないおまえの患者は死んでしまうんだぞ」
テスは、こくりと頷いた。

「病棟へいきます」
その顔には、心理病理観察看護人の冷静さとひたむきさが戻っていた。
テスは、中庭に面した第一病棟へ走った。
病棟の扉を手動錠(じょう)で片っ端から開け、寝ている患者を叩き起こし、うろついている患者を叱(しか)り飛ばし、非常口に誘導した。
テスの駆けずり回る姿は、この娘の、どこにそんな力が隠されていたのかと思えるほど、機敏で活力にあふれていた。
やがて、第一病棟に火が入った。
非常口から病棟の患者たちを出し終えたテスは、ネストに叫ぶように言った。
「ネストさん、後はお願いします」
そして、燃え上がった病棟に駆け込もうとした。
その腕をネストが押さえる。
「どこへ行く気だ」
「個室病棟です！　狂暴な患者さんが何人か残されています」
ネストは頷いて言った。
「鍵を……おれが行く」
「でも……」
「君には、この患者たちのこれからの看護があるはずだ。鍵を開けて命を救(たす)けるだけならおれ

にもできる」
「ネストさん……」
テスの目には、涙があふれていた。
けれど、ネストが今まで見たことのない、輝くような笑みが浮かんでいた。
ネストは、テスから手動錠を受け取ると、個室病棟に走った。
病棟に駆け込もうとしたとき、頭上で白熱光線が弾けた。
拡声器の声がした。
「動くな！　おまえが患者なら殺す気はない」
振り返ったネストの前に反乱軍を率いたラズルが立っていた。
反乱軍は、テスと患者たちも取り巻いていた。
白熱剣を突きつけていたが、確かに発砲する気配はなかった。
ラズルはネストを見据えて言った。
「どうやら、頭はおかしくないようだな。心理更正病院の患者は一度入ったら二度と出てこれないという。どういう患者が収容されているのかね」
ラズルは、六つ候補にあげた首都の病院の中では、心理更正病院を一番重要視していた。
帝国の最優秀種は、優秀種から選ばれた後は国民の前に姿を現さない。
その最優秀種が、帝国の最上層部を形成しているのは明らかだ。
そして、ここは心理障害によって隔離された患者たちの病院……外部と隔絶した世界。



「動くな！　お前が患者なら殺す気はない」ラズルはネストたちに言い放った

心理障害と最優秀種を比べるのは皮肉だが、居住環境に共通点があることは確かだ。

それに、仮にここに帝国の中枢がなくても、帝国に反抗する政治犯や、重要機密を知っていて監禁されている人物と接触できるかもしれない。

六つの病院の中で、反乱の指導者がまず行くべき所としたら、心理更正病院を選んでも不思議はなかった。

ネストは、ラズルをどこかで見た覚えがあるような気がした。

だが、数年前、享楽(きょうらく)地区でリラに絡んでいた若者が、反乱軍の指導者をしているなど思いもよらなかったし、ラズルも、自分の人生を変えたあの娘につきまとっていた酔っ払いが、目の前に立っているとは気づかなかった。

ラズルは、黙っているネストに言った。

「ま、いい。ともかく、この病院は『ボーのフィレーナ』が占拠した。帝国の反撃が来るまでの時間、話を聞かせてもらおうか」

話を聞く時間はなかった。

そのとき、ネストも、ラズルも、テスも、何かが飛んでくる気配を感じた。

次の瞬間、頭上で何かが炸裂した。

＊

帝国中枢総合病院の昇降機(エレベーター)が地上に着いた。

黒い悪魔のひとりは、剣を抜いた。

当たるを幸い、反乱軍を片っ端から薙ぎ倒すつもりだった。
扉が開いた。
黒い悪魔は一階の廊下に飛び出した。
だが、だれもいなかった。
壁を炎が舌を出して動いているほかは、人の気配すらなかった。
黒い悪魔は怪訝な面持ちで昇降機に同乗してきた仲間を見た。
仲間も仰天していた。
五人乗っていた黒い悪魔のうち……二人がいきなり消えていたのだ。
いや、足元に鎧と兜と武器だけが残っていた。
その二人は、帝国機密情報兵団の上層部だったが、実は帝国の優秀種ではなかった。
それは、その秘密が、他の三人に初めて明かされた瞬間だった。
昇降機の中ではだれも気づかなかったが、首都ボーの上空で何かが炸裂したのだ。

*

心理更正病院の中庭には、ラズルとネスト、テス。そして、心理障害の特殊変形優秀種しか残っていなかった。
反乱軍は衣服と武器だけ残して消滅した。
反乱軍に優秀種はラズルしかいなかったのだ。
「いったい何が……何が起こったんだ！」

心理障害を起こしたようなラズルの絶叫が、心理更正病院の中庭に響いた。

*

「特殊変形優秀種も、生き残ったようです」
皇帝種の両性が、呟いた。
「まあ、それも優秀種には変わりないのですから……新爆弾の実験は、ほぼ成功でしょう。さらに開発研究の必要はありますがね……」
男の一人が溜め息まじりに言った。
女の一人が頷いた。
「ええ……今、現在、首都圏に生きているのは、私たちと最優秀種と優秀種。そして、ここの研究室で育成している人間だけになりました」
「あれらが人間と呼べるならですが……」
両性が皮肉っぽさは微塵（みじん）も見せず言った。
あれらとは、もちろん超皇帝種と、もう一種、実験的に急速成長させている奴隷（クレチア）の子供のことだった。
地方都市ドラに生まれた孤児で、両親の奴隷（クレチア）の生前の名はフィコスとミリカ……フィコスは、闘技試合で闘技士（バトラー）フィレーナに倒された。
その子供はフィスと呼ばれていた。

*

帝国人も他民族も消滅した首都の異変は、全国の反乱の様相を変えた。
すべての人間たちに、いい知れぬ絶望と恐怖が襲いかかった。
各地の反乱は狂ったように暴走し、帝国機密情報兵団（通称黒い悪魔）は、帝国への反乱とおぼしき行動は無差別に攻撃した。
そして「黒い悪魔」の矛先は、帝国内の官僚や軍人、警察にまで及ぶようになった。
公職の腐敗は国家への反逆であるとして、汚職や横領、民間との癒着まで糾弾し、処断するようになった。
帝国機密情報兵団の存在はあくまで秘密にされていたから、その処断は、いきなり、原因不明の死や事故や天誅という古風な名の暗殺でやってくる。
それが、以前の帝国機密情報兵団と違い、汚職・横領・贈答等という、あまりに庶民に身近な中で起こったから、腐敗と呼べるものに身に覚えのあるものにも、ないものに対しても、「黒い悪魔」は姿の見えない恐怖になっていた。
こうして、帝国人民にとって不安で眠れない夜が続いた。
そして頻発する他民族の反乱暴動は、さらに帝国人民を痛めつけた。
これで、帝国人民自身に反乱暴動が起こらないはずがない。
そして、聖地であった病院は片っ端から、掠奪の対象にされ、目的も意味もない殺し合いや抗争が続発した。
ただでさえ、食糧難に苦しみ苛酷な環境に閉じ込められた北辺警備隊が、この影響を受けな

いはずがなかった。
不平不満が鬱積し頂点に達したとき、部隊上層部が暗殺された。
部隊に潜伏していた末端の「黒い悪魔」の仕業だった。
やがてその暗殺から上層部の物資横領が、明るみに出た。
たちまち、下級兵士の怒りが爆発し、北辺警備隊上層部は、吊し上げを食い、あげくが暴徒化した兵士たちによって私刑にされた。
北辺警備隊は無秩序状態になり、食料を求め自然保護区へ暴走しはじめた。
末端の「黒い悪魔」数人では、もはや収拾がつけられなかった。
動物たちは殺され、木々は切り倒された。
そして、北辺警備隊の最初の一隊が、フィアイの入江に姿を現した。
十六人いた。
豊かな海の幸に恵まれ幸せそうなフィアイの村のたたずまいは、それだけで北辺警備隊の憎悪をかきたてた。

＊

その日の朝、フィレーナは、いつも入江の丘の上から聞こえる朝の交錯唱法で目を覚ました。
フィレーナは、フィアイの長老から、暖かい毛皮の天幕を貰っていた。
火山の地熱もあり、白夜の夏の間はその天幕で充分過ごせそうだった。
隣には、昨晩遅くまで灯台から持ち出した電子盤を翻訳していたリラが疲れ果てて寝てい、

フィレーナはリラの肩から落ちた毛皮をかけ直してやると、天幕から出て大きく伸びをした。
朝の空気が、体の隅々(すみずみ)まで洗ってくれる気がした。
……こんな朝が、何週間も続いていた。
いつまでも続いてほしかった。
だが、交錯唱法(ヨーデル)が、いきなり止まった。
ぱたぱたという乾いた音が聞こえ、丘の上に立っていたフィアイの民の姿が崩れ落ちた。
もうそれだけで、静かな朝の終わりをフィレーナは悟(さと)った。
武器の音をフィレーナの耳が、聞き違えるはずがなかった。
あの音は、機関銃の発射音……そして戦いの始まり……。
「なんてこった」
頭をふりながら、フィレーナは天幕の中に入り、リラを起こした。
もう、その手には、鞘(さや)から抜かれた剣が握られていた。
丘から襲ってきた北辺警備隊の十六人を、フィレーナが始末するのにたいした時間はかからなかった。
十六人いても、普通の帝国軍兵士は、闘技士(バトラー)フィレーナの敵ではなかった。
だが……。
フィアイの民は抵抗もせずに二十四人が殺された。
フィレーナは、精いっぱい、素早く、敵を倒したつもりでも、これだけの犠牲が出てしまっ

た。

旧式とはいえ乱射される帝国の銃機を、フィアイの民は躱(かわ)しきれなかったのだ。

犠牲者を弔(とむら)う時間はなかった。

山々にこだまする交錯唱法(ヨーデル)は、他の集落が別の北辺警備隊に襲われたことを知らしてきた。

死者の数を聞けば、ほとんどがみな殺しだった。

そして、ここにもすぐ、次の北辺警備隊が現れるのは目に見えていた。

長老はフィレーナとリラ、通訳のフィラーレ、そして、フィラーレの恋人(こいびと)らしい青年を呼んで言った。

「フィアイは、海の恵み、山の恵みを貰うために狩りをする。しかし、戦いはしない。われわれは狩りの道具をもっているが、戦いの道具は待たない。それが、フィアイのピッツ……」

「ピッツ……？」

フィレーナは、聞き返した。

フィラーレが答えた。

「生き方……というか……決まりでもない。掟(おきて)でもない。もちろん、法律でもない。生き方としか訳しようがないの」

長老は続けた。

「大昔からあるフィアイのピッツは止められない。止める気もない。われわれは戦わない。われわれは戦う相手が来ればいつも逃げた。そして、いままで生き続けてきた」

フィレーナは思う。
逃げて逃げ切れるなら、そうしたい。
だが、相手は武器を持ち、全世界を支配している帝国なのだ。
「でも、ここより先に逃げる場所があるっていうの？　この北の果ての先に」
長老はふっと笑った。
「まだまだ逃げられる。いつか来るこの日のために、フィアイの言い伝えがある」
「言い伝え……？」
フィレーナが聞いた。
「火の山を怒らせよ。されば、救われん」
リラが言った。
「火の山を怒らせよ？……そか……あの間欠泉のように火山がドカンで、相手を吹き飛ばしちゃう」
フィレーナは首を振った。
「ばかな、火山をどうやって噴火させるんだ。だいち、噴火が起きたら、こっちだってどうなるかわからないだろう」
「そうか、大噴火、みんなで吹っ飛びゃやっぱり恐い……よね」
「どうかな……ここはわしに任すことじゃな」
そういって長老はいかにも愉快そうに笑った。

ひとしきり笑ってからから、長老は青年に向かって言った。
「すぐにすべてのフィアイの民を集め、持てるだけの食料を持って、船の隠れ家のある入江に向かうんじゃ。もちろんフィレーナと一緒(いっしょ)にな」
そして付け加えた。
「それから、ちょいとフィラーレを貸してくれ。何、すぐにお返しするよ。ちと通訳が必要でのう」
そして、フィラーレだけを連れて出ていった。
長老は火の山に向かっていた。

*

山々に交錯唱法(ヨーデル)がこだました。
その日のうちにすべてのフィアイの民が旅支度をして、帝国自然保護区から消えた。
雪上犬たちを率いたギャッピーも、その交錯唱法(ヨーデル)を聞いた。
それは、フィアイの村へ向かっている北辺警備隊の十人の小隊を背後から集団で襲い、全滅(ぜんめつ)させたちょうどそのときだった。
帝国人が、雪上犬を食料にするのなら、雪上犬が帝国人を食料にしてもおかしくない。
それが、ギャッピーが北辺警備隊を襲った理由だった。
だが、雪上犬たちは、山にこだまする交錯唱法(ヨーデル)を聞くと、兵士はおろか兵士の持っている食料にも目をくれず走りだした。

ギャッピーも、そうなれば、雪上犬たちの後についていくしかなかった。

＊

穏やかな噴煙を上げている山頂に、長老とフィラーレはやってきた。

「火の山を怒らす方法じゃが……実は、昔、ここを訪れたフィロセラの学者と話し合ったことがあってのう……」

「フィロセラ？　フィレーナさんの国の……」

フィラーレが聞いた。

長老は頷いた。

「そうじゃ……確か、ウトとかいう名のお人じゃった……ちょうど、デビス帝国がやたらとあちらこちらを攻めているころじゃった。いつか、フィアイの民にも襲いかかってくるときが来るじゃろう。そんときは、わしらは逃げにゃならん。じゃが、いくら、言い伝えといっても、この山が、そんときを見計らって怒ってくれるとは、さすがのわしも思えんでなあ……怒らす方法をいろいろ聞いて、ちょいと仕掛けをしておいたんじゃ」

長老は火口の淵にやってきて一方を指さした。

「あれなんじゃがなあ」

そこには、ドラム缶のような物が無造作に放り出してあった。

「超爆弾というものじゃそうだ」

「超爆弾？」

フィラーレには聞いたことがない単語だった。
「ま……知らんほうがいいがな……ただ、帝国語の取り扱い説明ぐらい読めるじゃろ。わしゃ、読めんでな」
フィラーレは、超爆弾の横に貼ってある説明書を読んだ。
「デビス製簡易超爆弾……三種の安全装置を取り外した後、頭の着火棒を叩いてください。一デビス時間後に炸裂します。そう書いてあるけれど……じいさま、こんなものをどこで」
「昔はどこの国も不景気でなあ、こんなものはいくらでも叩き売っとった。こりゃ、デビス製じゃがのう、回り回って、わしが手に入れたのはな、昔、この近くにあった結構でっかい国からじゃ……たぶん、食物が欲しくて仕方がなかったんじゃろう、わずか中型フィゴッ（鯨）十頭分の肉で売ってくれた……まあそれは、今さらどうでもよかろう。……もうちっと詳しく安全装置の扱いを教えてくれんかのう」
「ええ……ここにちゃんと書いてあります」
フィラーレは、超爆弾がどんなものかも知らずに、長老に扱い方を教えた。
長老は聞き終わると、七日以内に必ず、フィアイの民全員が船の隠れ家のある入江に辿りつくように……とフィラーレに念を押した。
「で……じいさまは……」
「わしゃ、火の山を怒らすからのう、お詫びとお礼をせにゃ……まあ、この歳じゃから、わしのお詫びじゃ、山もありがた迷惑かもしらんがのう……」

そう言って笑った。
「みんなにゃ、しっかり逃げ続けろよと言うてくれ。したらフィアイはいつまでも生き延びるわい」
そして言った。
「はよ行け……帝国人に見つかりゃひどい目にあう。もしものことがあったら、おまえの男に申し訳がたたんからのう」
そして、呟いた。
「こんなもん使うのは、フィアイのピッツに反するかもしらんが、ま、戦いじゃなく逃げるためじゃから、勘弁してくれるじゃろう」
そして、超爆弾の上に胡坐を組むと、手を振って、山を降りていくフィラーレを見送った。

＊

七日後、数千人のフィアイの民が、船の隠れ家の入江の近くに集まっていた。
氷の入江の先は、もう海しかなかった。
北辺警備隊が追ってくれれば、逃げ場はない。
そのときは、ここが、戦わぬフィアイの滅亡の場所になるはずだった。
自然保護区は、北辺警備隊に蹂躙されていた。
フィアイの入江は、残されていた酒と食物で、どんちゃん騒ぎが続いていた。
兵士たちにとって、苦しかった北辺警備隊の暮らしが嘘のようなひとときだった。

彼らは、みんな思っていた。

ここの食物がなくなれば、フィアイの民を追いかけていき、掠奪すればいい。

情報によれば、フィアイはこの入江の先、海の方向へ向かっている。

逃げられはしない。

いつでも追いつける。

とりあえず、今は食って飲んで楽しもう。

＊

「そろそろ……船の隠れ家についたころじゃろう」

長老は、超爆弾の安全装置を外し着火棒を叩いた。

「年寄りは力仕事がきついのう」

超爆弾を押して、火口に落とした。

超爆弾は、ごろごろと音をたてて、噴火口の中に転がり落ちていった。

＊

一デビス時間後、正確に簡易超爆弾は炸裂した。

そして、ウトというフィロセラの学者の計算が正しかったのか、長老の願いがかなったのか、火の山は超爆弾に誘発され怒りだした。

フィアイの入江は、間欠泉の熱湯に煮沸消毒されたとたん、熱風で乾燥され、さらに溶岩流が吹き出した。

人間の力の遠く及ばない、地中の熱力が爆発した。

＊

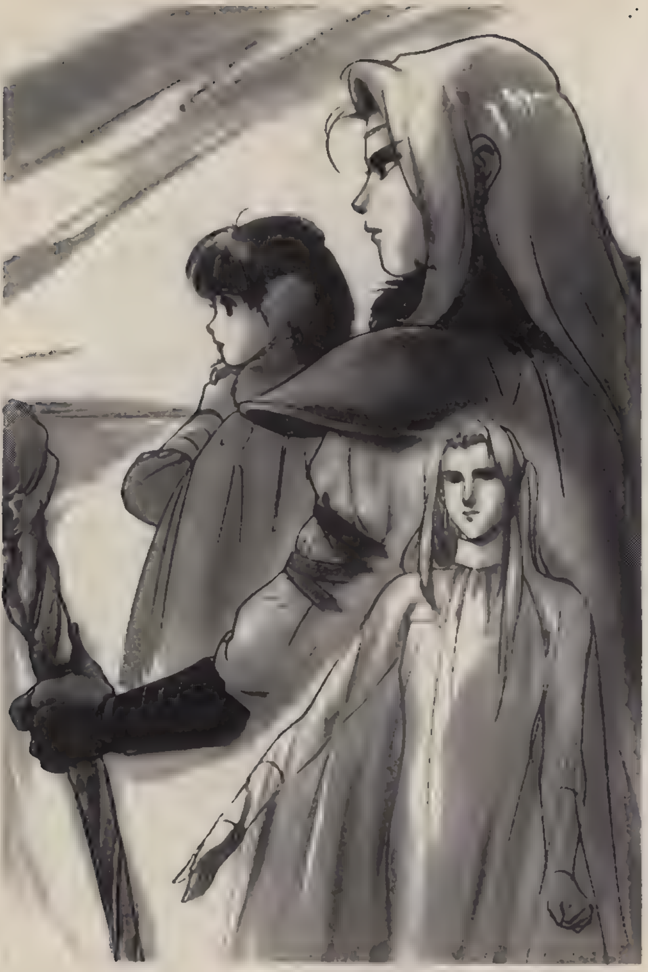
フィレーナとリラには、そのとき、何が起こったのか判断がつかなかった。
かすかに、足元の氷原がゆれたような気がした。
すぐに、フィアイの入江の方向の空が暗くなり、みるみる白夜の明るい空に、闇が侵食していく。
フィアイの入江の上空で、いくつも雷鳴が光る。
やがて、空気を震わして、腹にずんとこたえる鈍い音が何度も聞こえた。
フィレーナはリラと顔を見合わせるしかなかった。
やっと声が出た。
「なんなんだ、これは……」
「聞かれてわかるわけない」
「火の山が怒っています」
フィラーレが呟いた。
次の瞬間、すべてが大きく揺れた。
視界も足元も世界も何もかもが揺らいだ気がした。
そこにいたフィアイの民のだれもかもが、空気に体ごとすくわれたように倒れた。
いや、フィレーナのように運動神経のよい者は、腰を落とす程度で辛うじて持ちこたえた。

リラは、爪先立って、軽く二度三度跳躍した末に、着地に失敗して尻餅をついた。
揺れはそれきりだった。
居合わしたみんなが、何が何だかわけがわからず、茫然として互いの顔を見合った。
フィレーナは、そのとき、ふと、何かが変わったことに気がついた。
風だ。
今までなかった風が吹いている。
フィラーレの恋人らしい青年が、入江の海を指差して何かを叫んだ。
波が逆巻いている。
だが、吹き始めた風はそれほど強くはない。
フィレーナとリラの髪がかすかになびく程度だ。
フィラーレが、信じられないといった感じで首をふりながら呟いた。
「動いています」
「え……？」
「何もかも……地面も……私たちも……空も……海も……何もかもみんな」
大地が動いていた。
氷の上を人間が歩いて七日間の距離の雪原が、丸ごと動いていた。
火山の噴火で、半島級の大きさの氷の塊が、デビス帝国の大陸から切り離されたのだ。
「とととと……」

船の隠れ家の入江も、氷の塊のほんの一部にすぎなかった。
フィレーナは海を見つめた。
動いていると言われても、まるで実感がなかった。
そのときだった。
遠吠え（とおぼえ）が聞こえた。
フィレーナは振り返った。
小さな点が無数にこちらに向かって駈け（か）てくる。
雪上犬の群れだった。
だが、さっきの遠吠えは雪上犬ではなかった。
雪上犬をぐんぐん追い抜いて、際だって大きな犬が走ってくる。
ギャッピーだ。
孤独な狼犬（ウルフドッグ）は、仲間とともにフィレーナの前に戻ってきた。

エピローグ

デビス帝国は、世界制覇以来はじめて、実際の土地を失った。
それが、たとえ暑くなれば溶けていく氷の塊であっても、地図の上には今まで確かにあった土地だった。
そして、その広さは滅亡当時のフィレーナの故郷フィロセラの何十倍もあったのだ。
皇帝種たちは北辺のもぎ取られた地図を見つめていた。
「フィレーナが、やりましたか」
男の一人が呟いた。
「フィレーナがやったのではなく、あくまで、あれは、自然のなせる業です」
両性が肩を竦める。
「それに乗れているのは、ただの偶然でしょうか？」
もう一人の男が言った。
「あの娘だけがどんどん成長していくようですね」
女の一人が溜め息をついた。



「フィレーナが、やりましたか」。フィレーナの行動は皇帝種たちに波紋を起こした

「次はどんなふうになってわれわれの前に現れるでしょう」
もう一人の女が言った。
「いずれにしろ、海は帝国人種の苦手とする領域です。うかつに手は出せなくなりました。それよりもわれわれの希望を見つめましょう」
残りの男が言った。
「希望？　ああ……そういうのもありましたね」
両性の皇帝種の言い方にはいささか皮肉がこもっていた。
「超皇帝種はもうすぐです。特殊変形優秀種も生き残っている。さらに実験室の奴隷……可能性はそれぞれですよ」
男の一人が言った。
「それよりも、とりあえずは今の帝国です。まだまだ、この星にこの世界の人口は多すぎるのですから……」
両性がきっぱりと言った。

＊

巨大な氷塊は海流に乗って、南下しはじめた。
行き先は、フィレーナに予想がつくはずがなかった。
だが、今度の旅は今までと違っていた。
リラもギャッピーも、そして、フィアイの民がいた。

入江には、数知れぬ船が、凍って眠っている。
氷の灯台の書棚(しょだな)にしまわれたフィロセラの知識もある。
フィレーナの新たな船出は始まったばかりだった。

第7部　完

帝国地図


N
W
E
S
巨大帆船
北極点
フィレーナの道
北デビス山岳地帯
汚潮海域
ドラ
森
中部高原地方
首都ボー
汚潮海域
西部海岸地方
砂漠
リラの道
南デビス山岳地帯
ルンベ
デビ
狼のフィレーナ軍
解放地区
デビス帝国軍事試験場
(旧フィロセラ)
南部海岸地方
世界変更線
ドラゴニア大陸(伝説)
南極点

あとがき

「世紀末の迷い道、すれ違ったら、声をかけてください」
これは、このフィレーナ7巻の出版される1993年の新年に、ぼくが知人に送った年賀状の一節です。
気が付いてみれば、フィレーナの第1巻が雑誌に連載されてから十年近い年月が経ってしまいました。
フィレーナにとっても、作家のぼくにとっても、けっして短い時間とは言えないでしょう。
いつの間にか、知らない人との様々な出会いが楽しかったはずの時間が、知っている人との様々な別ればかりが目立つ時間に変わってしまったようです。
ぼくの仕事場のある伊豆半島の付け根にある小さな港も、打ち寄せる波や、毎年やってくる季節には変わりがないように見えても、ふと見上げれば建設中の高架道路の橋げたが視界を遮っています。
何をいいたいかといえば、時が経つと、見たいと思っていたもの、見えていたものが見えなくなる時もある……と言うことかなあ……？

思えば、第1巻のフィレーナ……世界を征服している帝国を倒し、母国フィロセラを再興しようという、……不可能であろうとも彼女の第一歩には、未曽有の敵へ挑戦するという確信とエネルギーが在りました。

でも、作家によって手の内が明かされた（その作品世界の構造がわかった）今は、帝国も本当の敵とは言いきれず、何が敵なのかも見定めることが難しくなりました。

「自分はなんなのか……この世界に何のために存在しているのか？」

フィレーナは迷っています。

「いっそ存在しなければよかった」

そんな気持ちに襲われることもあったでしょう。

でも、存在してしまったことは確かですし、ぐずぐず自己存在を哲学している余裕はないほど、世界はどんどん破滅の時へ向かっています。

フィレーナにも作家のぼくにも、終わりがちらつくようになりました。

こうなったら、それが迷い道であっても行くしかありません。

フィレーナは元気です。リラもいます。フィレーナの戦いは終わりまで続きます。

迷い道でフィレーナに出会ったら、元気なあなたが、声をかけてください。

１９９３年　雪の日

首藤剛志

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 7

氷原からの船出



首藤剛志

'49年8月18日、福岡生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。「魔法のプリンセス　ミンキーモモ」などのシリーズ構成を務める。小説家としては「ゴーショーグン」と本シリーズが代表作。



高田明美

3月31日、東京生まれ。キャラデザイナー・イラストレーター。「クリィミーマミ」「うる星やつら」のキャラデザインを経て、「機動警察パトレイバー」のキャラデザインを務める。

1993年2月28日初刷　　N-082
Printed in Japan

著者　首藤剛志
発行者　山平松夫
〒105-55 東京都港区新橋4—10—1
発行所　株式会社　徳間書店
電話　03(3433)6231(大代)
振替　東京4—44392番
印刷 製本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-669666-X

首藤剛志関連作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
美しき黄昏(たそがれ)のパバーヌ
永遠のフィレーナ 1～7
都立高校独立国 上下
いつかきっとピーチブック(ミンキーモモ)
それからのモモ(ミンキーモモ)
夢の中の輪舞(ロンド)(ミンキーモモ)
ラインハルトとヤン(銀河英雄伝説)

カバーイラスト＝高田明美
カバーデザイン＝真野　薫
カバー印刷＝真生印刷(株)

9784196696667
1910174003907

デビス帝国に滅ぼされた海洋国家フィロセラの王女フィレーナは、奴隷の闘技士として育てられた。自らの運命の導くままに帝国の神殿を破壊したフィレーナの噂は帝国中に広まり、各地に非帝国民の反乱軍が乱立した。その後、南部海岸地方でNo.1の反乱軍を率いるようになったフィレーナは、岬の灯台に導かれて単身、極北の地に至る。そこでフィレーナは勇者への遺産である巨大な帆船を発見し、北の民〝フィアイ〟と出会った。

ISBN4-19-669666-X
C0174 P390E (0)
アニメージュ文庫　定価390円（本体379円）